成・寿

SEIJU

春号

1994年

第 22 巻

横浜
善光寺刊

まことのかがやき

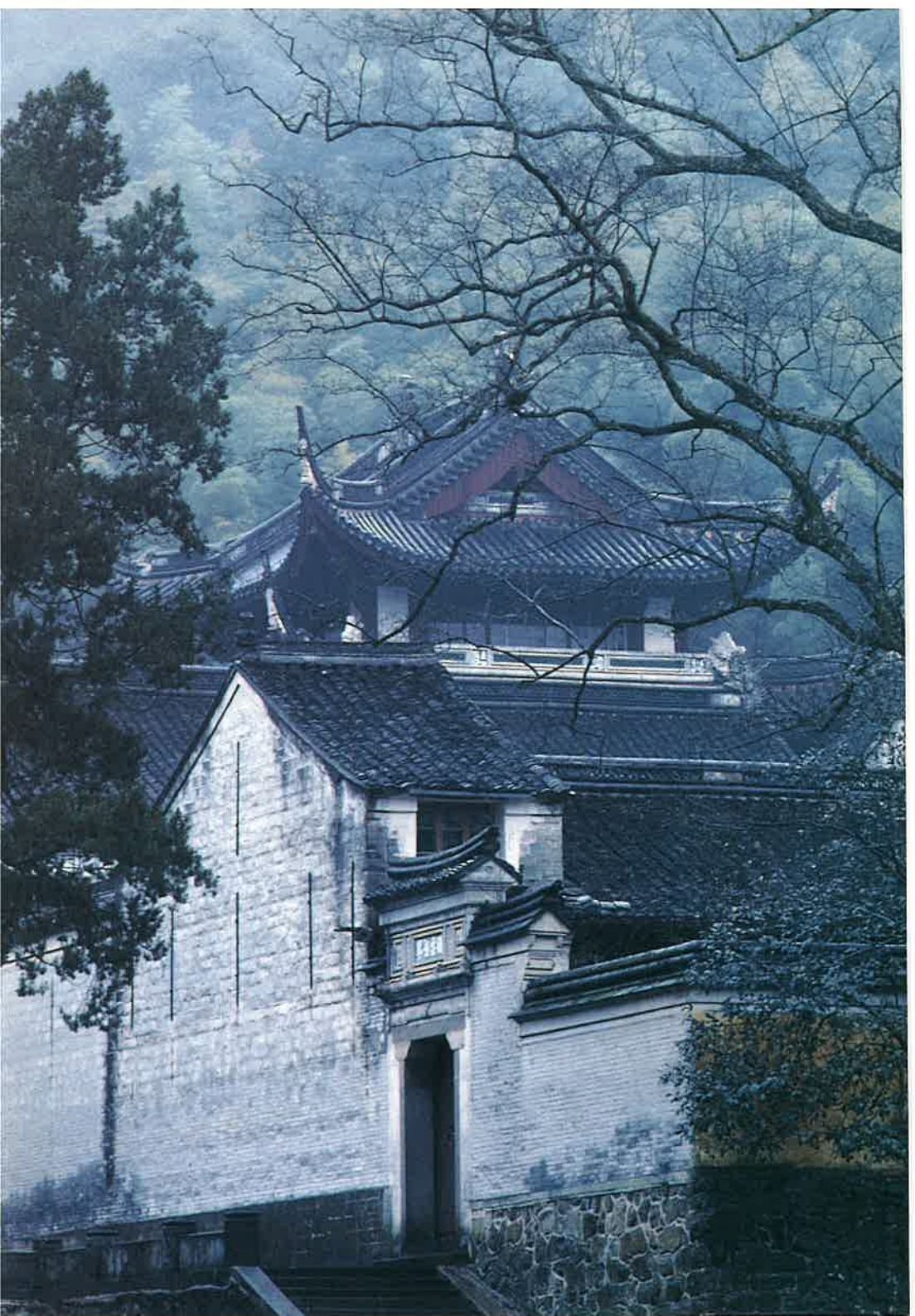
太陽は昼に輝き
月は夜に照る
武人(もののふ)は
武具(よそおい)いかめしくかがやき
祭(まつり)の司(おさ)は
こころ寂(しず)かに光る
されど　さとれる者は
昼に　夜に　威光(ちから)もて
かがやきわたるなり

（法句経・三八七）

中国 太白山天童寺を歩く

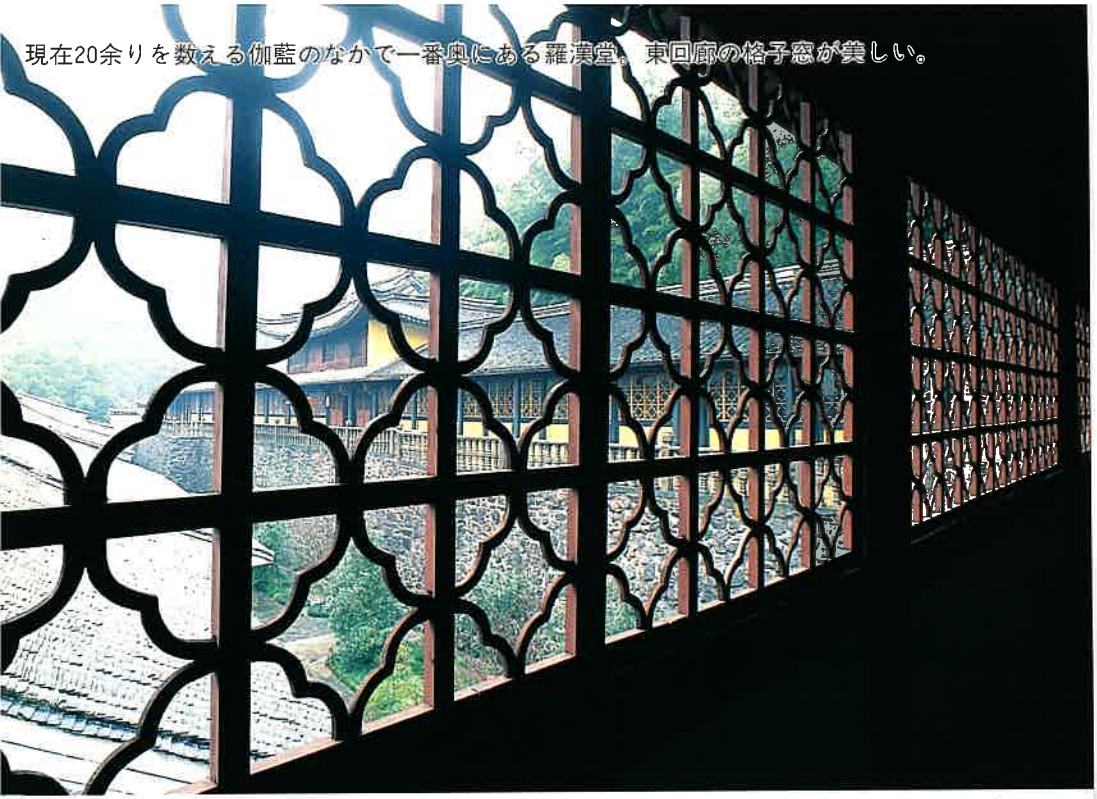
天童寺伽藍をゆるやかに登っていく石畳の坂道、古刹の静けさが身にしみるようだ。

伽藍右手にある未公開のお堂。どっしりとした重みのある壁がこの寺の年輪を感じさせる。



仏殿は、いわば天童寺の本堂である。手前の廊下など日本にはない建築様式である
本尊は、中央釈迦如来、右が薬師如来、左が阿弥陀如来の三世仏である

内万工池の北側には天王殿があり、四天王が、参拝者を見おろすように立っている。



現在20余りを数える伽藍のなかで一番奥にある羅漢堂。東回廊の格子窓が美しい。

太白山天童寺は、阿育王寺などと並んで中国五大古刹に数えられる中国禅宗の名刹である。曹洞宗の祖、道元禅師がこの寺で修学し、住持の如浄禅師のもとで正伝の仏法を体得して今日ある曹洞宗の源泉を日本に導入したことで、日本仏教にとっても極めて重要な意味をもつ寺である。

福井県の大本山永平寺は、この寺の伽藍様式を移したものといわれ、今日我々が天童寺を訪れて、ことさら親近感をもつのも、たたずまいが永平寺のそれと似ているためもあるのだろう。

天童寺は晋の永康元年（三〇〇）、僧義興が庵を結んだのにはじまり、唐の開元二〇年（七三二）に僧法璿が精舎を営んだ。これを俗に「古天童」という。至徳二年（七五九）に現在地に伽藍を遷したのが今日の天童寺となった。その後、名称も変わり、伽藍の倒壊・再建等、幾多の変遷をくり返したが、清代に現在の伽藍がほぼ出来たと伝えている。

大伽藍の右後ろの丘に登ると天童寺の七堂の重畳たる堂宇が見える。

羅漢堂の美しい瓦が、この寺の年代の重みを伝える。

東回廊の天井から大きな魚板が下がっていた。

仏殿正面にある丸窓と前廊下。中国建築の美しさを伝えるものだ。

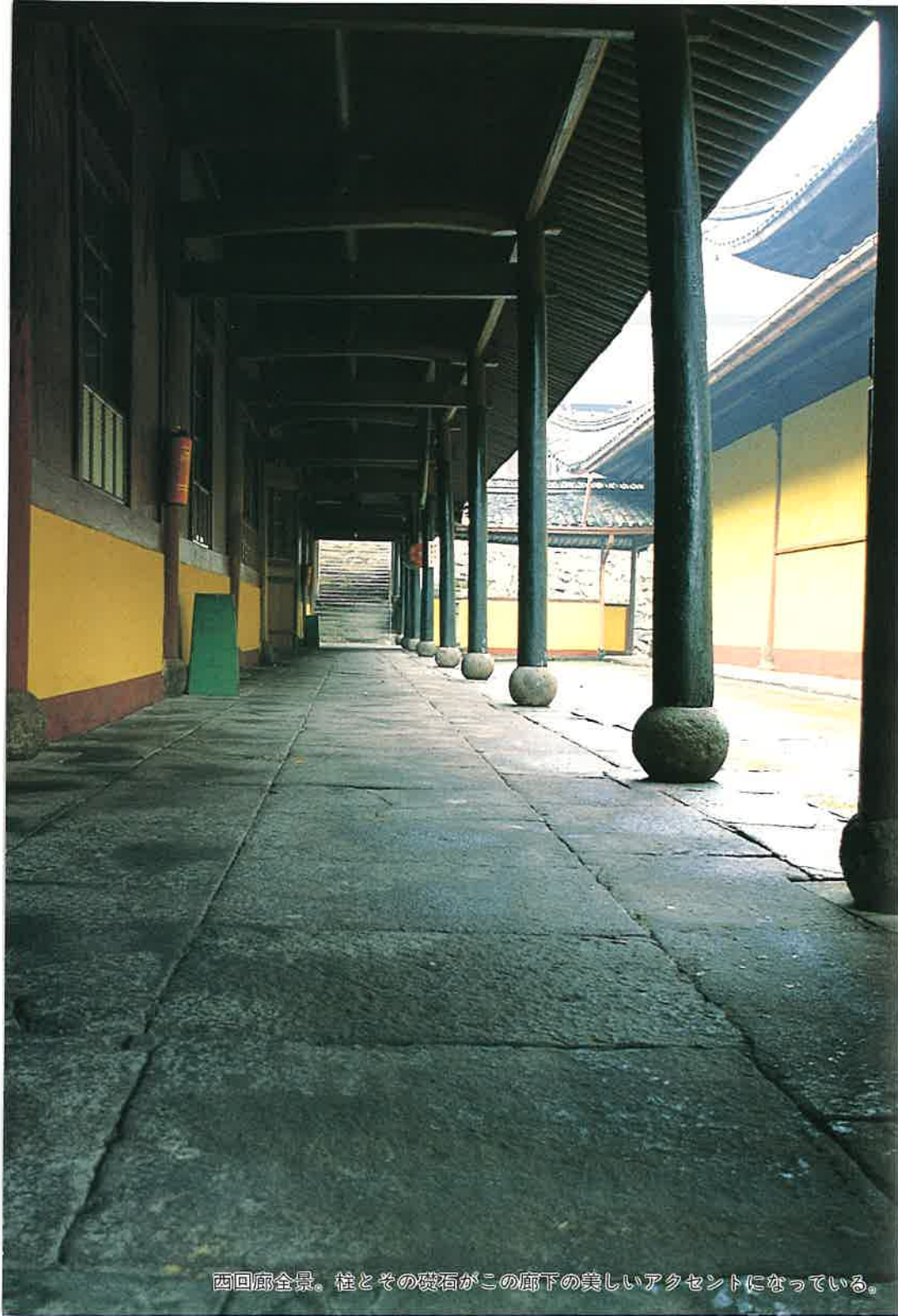
法堂の軒下に咲く白梅。春は天童寺の最も美しい季節である。

文化大革命後に建立された道元禪師得法靈蹟の碑である。

西回廊を法具をかついで寺衆がゆく。

天王殿内陣。四天王がいかめしく参拝者を見つめている。

西回廊中央にある祖師堂内陣。歴代和尚の位牌が並ぶ。



西回廊全景。柱とその礎石がこの廊下の美しいアクセントになっている。

東回廊を行く僧侶。春三月になっても山あいのこの寺はまだまだ寒い。

太白山のある鄞県は、ゆるやかな丘が幾重にも連なる静かなたたずまい。
春は見わたす限りの菜の花が咲きほこる。

カラー■中国　太白山天童寺を歩く
巻頭言●……18
御挨拶●開創二十五周年記念事業について……22
●北京雍和宮弥勒大佛開光(開眼)慶典記念に参列……黒田　武志　24
特　集●中国八日間の旅……佐藤　俊明　26
カラー●中国八日間の旅・北京雍和宮弥勒大佛開光慶典記念……65
特　集●天童寺と如淨禅師……東　隆眞　73
連　載●くらしの中で読む『正法眼蔵』……小倉　玄照　91
●篆刻・『般若心経』……98
特別読物●出逢い(その二)……東郷　敏　101
エッセイ●物と心の結び目「亡禅尼」……東野　光生　116
●インドネシアの旅　ボロブドールを中心にして……伊藤　博　121
カラー■ボロブドール・トラジャ……133
留学記●二度目のインド国内旅行(3)……島　岩　137
●永平寺貫首・丹羽廉芳禅師さま御遷化……144
●二人を追加採用・横浜善光寺留学僧育英会……146
声　善光寺ニュース　留学生からのたより……154
読者のたより……160

題字・さしえ　伊藤三喜庵
グラビア　松本　栄一

巻頭言

本年は当寺開創二十五周年にあたります。ゼロからの出発ではありましたが今日のこの隆盛を迎え得ましたことは、仏天加護のもと檀家の皆様がたの善光寺護持にかける奇特の信心と浄業のしからしむところで、感謝感激にたえない次第であります。

皆様がたにご一緒にお集まりいただける大本堂があればとは常々考えているところですが、住職の力量不足で実現しかねております。それで、二十五周年記念式典は大本山総持寺を式場として拝借し、禅師様御親修のもとに五月三十日開催すること、過般の総代会において満場一致をもって決定いたしました。後日御案内差上げますので、ぜひ御列席賜りたくお願い申し上げます。

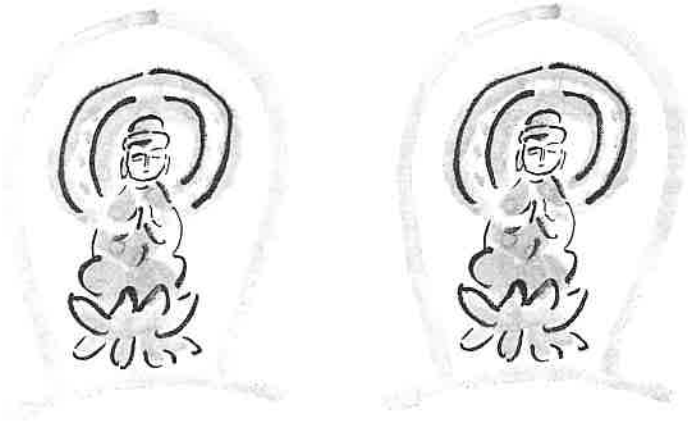
次に、留学僧育英会は、本誌前号で、「善光寺海外留学僧派遣育英会」という従来の名称を「横浜善光寺留学僧育英会」に変更した旨お知らせ

しましたが、国際交流の在り方もだいぶ変わって参りました。これは日本の経済成長もさることながら善光寺留学僧育英会の知名度の高まった証左でもあります。

ご承知のように七年前から関係各国の歴訪をはじめておりますが、六月には中国を訪れ、高祖道元禅師得法の霊場天童寺に拝登し、住職明暘法師を名誉顧問に推戴、快諾を得てまいりました。さらに北京雍和宮で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝師を留学僧として受け入れたご縁で、十月雍和宮の弥勒大佛開眼式典に招待を受け参拝して来ましたので、本号は中国訪問を特集といたしました。

本年は育英会創設十周年を迎えますので、三月下旬に記念行事をおこなうべく準備しております。式典のほかに、関係各国訪問も十ヵ国に達しましたので、育英会の歩みの一環として訪問記の刊行を企画しております。また、留学僧の論文集第二集も上梓する予定であります。

何卒今後一層の御協力御支援をお願い申し上げます。



喜びの実り

赤間義徳

日中仏教交流のため
李幼麟・善光寺留学僧が
先導者として活躍したことを
喜ぼう

宗祖　道元禅師さまが修行された
天童寺の大雄宝殿にのぼり
佐藤俊明老師さま
黒田大円方丈さま　が
般若心経を　高らかに読誦されたことを
喜ぼう

〝仏教振興と世界平和に寄與する
人材を育成しよう〟
方丈さまの大誓願が
仏殿のいらかをつき抜けて
中国の天空に響きわたったことを

われら　檀信徒が
毎食のひと口を献じつづけて
ひとつの実りが結んだことを

素直に喜ぼう
心の底から喜ぼう

湧きあがる喜びに充ち溢れて
横浜善光寺留学僧育英会へ
きょうのひと口を
献じさせていただこう

開創二十五周年記念事業について

成寿山善光寺

仮本堂を建てて「善光寺」と命名してより、はや四半世紀を閲しました。まことに光陰矢の如しというべく、月日のたつのは早いものであります。

今日を迎えられましたこともこれひとえに仏天の加護のもと、檀徒の皆様の絶大なる御協力御支援の賜物で、感謝感激にたえないところであります。

思えば開創して十五年間は釈迦殿の建立整備に向っての寺檀一体の精進の日々でした。

昭和五十七年めでたく釈迦殿が完成しましたので、翌年開創十五周年を記念して、本尊脇仏造顕、大般若経六百巻を勧請し、そして報恩行の一端として翌々五十九年に海外留学僧派遣育英会を設立し、六十年より留学僧を派遣し今日に及んでおります。

ついで平成元年、開創二十周年にあたり、主として不動殿の整備を記念事業とし、大日如来像をはじめ、薬師・弥陀の二如来像及び不動明王眷属、矜羯羅、制吒迦の二童子像の造立・須弥壇の整備等をおこないました。

何しろ三百年五百年の歴史を持つ寺々の間に伍してのことでありますので、矢継ぎ早や

ではありましたが、さいわい檀家の皆様の御協力により目的を達成することができました。

さて本年は開創二十五周年記念にあたりますので、これまでの締めくくりとして次の記念事業を目論んでおります。

一、開創二十五周年記念式典の実施

なるべく大勢の方々にご参加いただくため、五月三十日、大本山総持寺を会場として、梅田禅師様御親修法要と祝宴を予定しています。

二、善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典の実施

大韓民国、仏宝宗刹、通度寺方丈尹月下猊下を拝請、三月当山において実施の予定

三、記念出版物の刊行

イ、留学僧派遣、関係十カ国訪問記、留学僧論文集第二集の刊行

ロ、「善光寺の歌」CD及びカセット・テープの作成

四、内外の整備

建物・什物等の小修理

就きましては右記記念事業実施のため、総額三千万円の予算を計上いたしましたので、何卒ご協賛くだされ、浄財の御喜捨を伏してお願い申上げる次第であります。

平成六年一月吉日

善光寺住職　黒田武志　　式典委員長　伊藤喜三郎

名誉式典委員長　村岡有尚　　実行委員長　富永豊重

北京雍和宮（ぺきんようわきゅう）

弥勒大佛開光（開眼）慶典記念に参列

横浜善光寺留学僧育英会理事長　黒田武志

十月十四日、北京最大のチベット仏教新派黄教雍和宮において、世界最大の白檀一木造り弥勒大佛（地上一八メートル、地下八メートル）の開光（開眼）式典が行われ、拙僧夫婦は招待を受け参列しました。

この弥勒大佛は一九九〇年八月に完成されたもので、式場は法輪殿と万福閣の広場に特設されました。式典は、加木揚吐布丹住職の歓迎の挨拶、参列来賓の紹介で始まり、次に仏教聖歌演奏の後、中国仏教会を代表して趙朴初先生が「この佛縁は中国の多くの人々の喜びとするもの」と、開光式の祝辞を述べられました。続いて北京副市長阿魯明女史は、「雍和宮は、静寂に包まれた御殿で、清の雍正帝が即位する前は、王府であり、一七七四年にチベット寺院となり、現在はチベット、蒙古族の信仰の場であり、本日開光の大佛は、ダライ・ラマ七世より贈られたもので、今後は多くの方々の信仰の拠り所となり、無限なる佛様の功徳がいただける」と、大佛の紹介と雍和宮の歴史的意義を説明されました。

その後、各仏教界代表の挨拶やラマ教の活佛と言われる方々の祝辞が続いた後、読経に続いて開光式に移りました。

住職はじめ高僧、来賓の方々は、万福閣の中にまつられた弥勒大佛の前に集まり、白い布（カタ）やお米を捧げました。白い布（カタ）は佛様に対する尊敬の意味を表わし、お米は、芽が出ていろいろのものを実らせて吉祥を作ると言われています。

佛前の供え物は、内供（お酒、水）、外供（果物）、密供（お経）と同時に、自分の心をも全て大佛にささげる供養の式で、四十分ばかりで式典は終りました。

式典にはアジア各国大使、外交官、中国、日本、韓国、台湾、チベット、モンゴル仏教会代表、キリスト教代表、アメリカ、ヨーロッパからの信者、その他の方々が集まり、その数は世界二十カ国より二百名、その他一般の参列者は七百名を越えていました。

開光式の後は、雍和宮の正面、天王殿の前に設けられたステージで、ラマ僧による金剛駆魔神舞の踊りが奉納され、ここでは、善光寺留学僧育英会名誉顧問・天童寺明暘禅師と並んで舞踊を観ることができて、光栄に感じました。

拙僧夫婦が式典に招かれたのは、雍和宮廟務委員会委員嘉木揚凱朝師を第十回善光寺育英生として受け入れた縁によるものです。

嘉木揚師は十月二十一日来日、愛知学院大学に留学することになっています。愛知学院大学小出学院長先生はじめ、前田専学教授、引田弘道助教授、又、多くの先生方の御配慮、御好意に心より感謝すると共に、今後も、佛法興隆のため、微力ながら尽力することを強く感じた次第です。

せっかくの中国訪問なので、翌日、天童寺参拝に向いました。天童寺では、修祥監院老師に心からのもてなしを受け、今後の親善交流を願いつつ、しっかり手を握りあって、別れを惜しみました。

中国八日間の旅

横浜善光寺留学僧育英会常務理事
龍光寺住職　佐藤俊明

上海　六月十五日

李幼麟さんは上海の復旦大学を卒業、良寛研究のため来日して駒沢大学に留学し、善光寺留学僧第三期生となった異色の人材である。この李さんの案内で今回の中国訪問が企画された。

六月十五日朝、理事長と常務理事の私、そして李さんの三名は成田空港第二ターミナルで合流し、十時二十五分離陸、三時間のフライトで現地時間十二時三十分上海空港に着陸した。

飛行機を降りてボーディング・ブリッジに足を踏み入れると、強烈なジャスミンの香りの歓迎を受けた。その瞬間、私の脳裡の映像画面の中に、ちょうど親画面の中に子画面が浮かんだように五十年前の上海の街の姿がインプットされた。

今日只今の上海、そして五十年前の上海、新旧二つの上海の姿を同時に視聴することができたら――、そんな期待をもって入国手続を済ませてロビーに出ると中国旅行社の人々が出迎え

てくれた。予想以上に順調に事が運んで呆気ない感じ。いや、失礼、中国は変ったんだゾ!!と自分に言い聞かせた。

空港の建物には「オリンピックを誘致しよう」と大書された大きな横書きの額が掲げられ、オリンピックを目指し、これを跳躍台としてさらに前進しようとする中国の熱い息吹が感じられた。

空港からホテルまでの道の両側には当然のことながら近代ビルが林立しており、また続々建築中である。〝上海はドンドン変っている!〟そう思っていると、懐しいことに租界や住宅街は昔のままの面影をとどめている。住宅改造まではまだ手がまわらないのかと思ったがどうもそれだけではなさそうだ。

「私は五十年前、約半年ぐらい上海におりましたが、南京東路にだったろうか、『大光明』という映画館とか、その近くに『永安公司』というデパートなどあったものですが、いまどうなってます?」

と李さんに訊ねると、李さんは、

「そのまま残ってます。もっとも『永安公司』は二年ほど前に、外資がはいって『華联商厦』に名前は変わりましたが、建物はそのままです」と、答えてくれた。

南京東路といえば東京の銀座通りのような繁華街である。その街を代表するような建物が五十年も前の姿をそのままとどめているとは、日本ではちょっと想像しがたいことである。建物だけのことではなかった。私が南京におった頃、上海、南京を中心に『蔷薇(チャンウエー)蔷薇(チャンウエー)蔷薇(ツーツーカイ)処々開(ツーツーカイ)』ではじまる軽快なメロデーの歌が大流行していた。私は懐しさの余り、飛行機の中で、ノートに、

蔷薇(チャンウエイ)、蔷薇(チャンウエイ)、処々開(ツーツーカイ)(ばら、ばら、どこにも咲く)

青春(チンチユン)、青春(チンチユン)、処々在(ツーツーツアイ)(青春、青春、どこ

にもある）

と、五十年前の思い出を辿って、ここまで書いた。

さて、クルマの中でノートを取り出し、気付いたことをメモしようとしてノートを開いたところ、脇にすわっていた張莉（チャンリー）さんが目敏くそれを見つけ、

「先生！薔薇の歌、知ってるんですか？」と、頓狂な声をあげた。それ以上に驚いたのは私のほうで、

「へエー、五十年前の歌、あなた知ってるの？、これからさき書いて頂戴！」

といって手帳を渡すと、二十三歳の彼女は次のように書いてくれた。

挡不住的春風吹進胸懐（タンプチュデシュンフオンチュイチンシウンホワイ）（春風はそよそよと胸の中に吹き込む）

薔薇（チャンウエー）、薔薇（チャンウエー）、処々開（ツーツーカイ）（ばら、ばら、どこにも咲く）

「いや、有難う。二番、三番もわかる？」

「家に帰ればわかりますから、手紙で送ります」

「頼む…」ということで話題をかえたのだったが、帰国した翌日、張さんから、歌詞を書いたファックスが送られて来た。折角なので載せたいのだが、紙面の都合で割愛することにして、

「謝々（シエシエ）、張莉小姐（シャオジエ）！」でご免。

上海には新と旧が仲よく同居している。上海だけではなく、中国全体がそうなのだろう。その中国が、社会主義国家に変身したのはどういうわけなのだろう。その疑問は残るが、今日は二つの体制が共存しており、今後ますます協調を深めることであろうし、中国だから可能であろう。

日本は進歩の名のもとに、古いものは惜し気もなく捨て去ってしまう。これはまた性急で勿体ないことだが、反面素晴らしいものを生み出

す原動力にもなっている。今回中国に来て特に感じたのは仮名の威力である。漢字文化に学び、漢字を超えて仮名をつくり出したことは実に素晴しい。今日中国では簡略漢字を使っているが到底仮名の比ではない。試みに次に揚げる文字を何と読むか、チャレンジしていただきたい。

1、洛山幾　2、旧金山　3、雪珮

これは外国の都市名である。次に街頭でみた看板の文字を拾ってみると、

4、時装表演　5、雪碧　6、彩色胶卷

（この六問の答えは64頁にあります。）

なんと不便なことであろう。傑作なのは「卡拉OK」である。漢字で表現し切れなかったわけではないだろうし、なかなかユニークな発想だと思う。この言葉は「カラオケ」と読むのである。

その昔、仏教経典が中国語に翻訳された時、たとえば『般若心経』のように、梵語（「般若」）と漢語（「心経」）を兼挙して一つの言葉を作った。これを「梵漢兼挙（ぼんかんけんこ）」というのだが、その際は梵語はその音を写して漢字で書かれているが、「卡拉OK」の場合は「漢英兼挙」ならぬ「漢英兼用」である。

李さんや張さんに矢継ぎばやに質問を浴びせて耳目をたのしませているうち、クルマはもう新錦江飯店に到着した。「飯店」といってもめし屋ではなく、ホテルのことである。

早速旅装を解き、改良衣に着換えて玉仏寺参拝に向かう。

玉仏寺はその名のとおり、玉（ぎょく）で出来た仏を祀る寺である。辞書をみると、玉とは宝石。珠に対して、美しい石をいう。硬玉・軟玉の併称。白玉・翡翠・黄玉の類……とある。ここの玉仏は翡翠造りで、今から約百年前慧根法師がビル

マから持ち帰ったものとか。艶かしくもあでやかな玉仏は身の丈が一・九メートル、秀麗な火焔舟型光背の前に結跏趺坐するこの碧玉仏は重さ一・五トンという一玉造りで有名。昔から華僑の信仰を集めてきた。文化大革命の際は周恩来首相の尽力により、紅衛兵の破壊から免れ得たという。杭州の霊隠寺の場合もそうだが、周恩来首相は数多くの有名寺院を破壊から護ってくれた大恩人である。

市の中心部に近く、商店街や民家に囲まれて立つ黄色の山門をくぐると、堂塔伽藍が整然と建ち並び、その威容に眼をみはる思いがする。

李さんを通して事前に連絡をとっていたので、慧云知客和尚が待機しておってくれた。

彼は大学を出たばかりとか、実に能弁で諸堂案内をしてくれた。

十三年前天童寺を参拝したときは、あの大寺に僧侶はわずか二十三人しかいなかったし、いずれもみな老齢で、当時は若い僧侶の姿はどこにも見られなかった。それがいま、若い僧侶が先頭に立っている。まことに望ましいことであり、聞けば一山の僧侶は百五十人、僧俗併せて六百五十人を擁すという。施餓鬼法要の掲示が堂内いたるところに貼付され、法要は毎日おこなわれている様子で参詣客でにぎわっている。法要収入だけでも相当高額にのぼることであろう。さすがは玉仏寺の感を深くした。

龍華寺も参拝したいところだったが、来客を迎える約束の時間も迫ってきたので割愛してホテルに戻ることにした。

しかしここで「龍華（りゅうげ）」について一言しておきたい。中国寺院の典型的スタイルは、四天王殿、大雄宝殿、舎利殿、方丈を主たる建物として回廊がついている。四天王殿の中央には布袋様が、その裏には韋駄天様が祀られてある。布袋は九世紀末実在した禅僧といわれ、肥満した容貌が

福々しく、いつも半裸で杖をつき、大きな袋をかつぎ托鉢して歩いたので人々は布袋和尚と呼んだ。人の吉凶や時の晴雨を予知して当らざることはなかったという。世人、弥勒菩薩の化身となし、その像を描き、または刻して尊崇したという。どこへ行っても布袋様の姿に会うことの多いことをみると、中国の人たちには弥勒信仰が非常に強いように推測される。現に二日後に訪れた杭州の浄慈寺で晩課に読誦されていたお経は『弥勒経』だったし、また「龍華」という名も弥勒信仰に由来するものである。

弥勒菩薩は梵語でマイトレーヤといい、慈氏菩薩（慈悲の権化）と訳されている。いま天上界の兜率天（とそつてん）におられるが、お釈迦様入滅五十六億七千万年の後、この娑婆世界に降りて来られ（「下生（げしょう）」という）、龍華樹のもとで弥勒如来となり、そこで三回説法なさる。この説法で娑婆世界の者は残らず成仏する。これを「龍華三会（りゅうげさんね）の説法（せっぽう）」というのであって、この説法はいまだかつて聞いたことのないほどの素晴らしい説法で、これを聞いたらいかなる悪人も成仏するというのである。それで後世待ちこがれる説法を「龍華三会の説法を待つ思い」といい、また、有難く感激した説法を「龍華三会の説法を聞いたような」ともいうのである。「龍華寺」とはそうした思いを込めて命名された寺名であろう。

李さんの先輩であると同時にごく親しい間柄にある王生洪氏は上海人民政府の教育衛生の最高責任者であり、上海市の高等教育局長と教育国際交流協会の会長を兼ねた上海市の高官である。宗教局長を伴ってくださる約束だったが、折悪く宗教局長、急用のため王先生一人でホテルに来られた。

王先生はまず、昨秋の天皇陛下ご訪中の際案内役をつとめられたこと、両陛下は中国人民か

ら熱烈歓迎を受けられ、両陛下また中国人民にたいへん好ましい印象を与えてくださったこと、パーティもこのホテルで大盛況だったことなどを語り、初対面の私たちのためになごやかな雰囲気づくりをしてくださった。さすがはと感心した次第。こんなわけではじめから打ち解けた話し合いとなった。

王先生は、道義の頽廃と人口政策によりどの家庭も一人ッ児のため、過保護に陥り、子供のわがままが目に余るようになったと、嘆いていた。私は〝そうだろうなあ〟と思った。

十三年前、天童寺を参拝したとき、飛行機や火車（汽車）の乗務員は女性で（これは今も同じことだが）、彼女らは化粧もせず質素な衣服をまとい、実に清楚な感じで物腰やわらかく親切で、かつての大和撫子を想わせるものだった。男子青年もまたりっぱで、「あなた方は随分不自由な生活をしておられるようですが、不平や不満はありませんか」と訊ねると、彼らは、「みんながが仕合わせになるまでは頑張ります」と昂然と胸を張っていた。当時はこの意気込みが国中に漲っていた。

またホテルでは、「中国には泥棒がいませんから」といって鍵も渡さなかったし、事実盗人はいなかった。さらに、不要品を捨て置くと、「不要品」と明記してない限り、次の宿泊地まで届けられるといったふうだった。それから、子供たちに物をやろうとすると昔の子供たちと違って決して受取ろうとしなかった。

〝実にりっぱだがいつまで続くのだろう〟私は不安を感じたものだった。というのは、戦時中、軍人勅諭といえば軍人の生命にも等しいものだったが、敗戦の翌朝、私は便所の中で、尻拭き紙にちぎられている軍人勅諭集の残骸を見たのである。これと同じでイギオロギーのタガがゆるんだら、自由化が進んだら、この心の支

えは音を立てて崩れ去ってしまうのではなかろうかと。それがいま現実の姿となってあらわれているのではないか。

十三年前はまだ子供が多かった。私たちの周囲に集まって来て一緒に撮った写真も何枚かある。しかし今回はそうした子供に会うことは絶えてなかった。子供といえば親を従えた小皇帝としての姿だけだった。日本以上に過保護のように感じられた。十三億の小皇帝が十三億の大皇帝に成長したとき、中国はいったいどんな姿に変貌するのだろう。

交通事情も悩みのタネの一つ。バイクは規制されているためごく少ないが、自転車はすごい数である。ラッシュ時はまるで洪水のようである。経済が成長してこの自転車からクルマに代わる時が来たらどうなるのだろう。人口が多いだけによほど大きなスケールのもとに施策を講じなくてはパンクしてしまうであろう。

王先生は日本の成長ぶりに感銘し、息子を日本に留学させているほどの親日家で、お世辞ではあろうが、「日本に学ばなくては」といわれるのであった。

理事長は、「上海は総合的にみて中国最大の都市である。その上海の指導的地位におられる先生なのだから、グローバルな見地に立ってまず人材養成に心がけ、貴重な意見を糾合し、総合的な施策を講ずることに努力していただきたい。なるほど日本は短期間に成長を遂げたかも知れないが、真に総合的な施策を講じなかったため、経済は発展したが、反面人心の荒廃を招いてしまった。この轍は絶対に踏まないようにしてほしい」

と、おいしい紹興酒の酔いの勢いもあっての大熱弁をふるった。王先生もはじめは理事長の大熱弁にびっくりした様子だったが、理事長の熱意のほどを素直に受けとめてくれ、自宅に帰

られたあとも、李さんを通して電話で礼を述べておられた。

こうして中国第一日の日程は無事終了した。

寧波・天童寺　六月十六日

早朝ホテルで食事をとり、空港に向かう。六時少し前に着いたが、入口の扉は締っており、大きな荷物を持った大勢の搭乗客が広場に蝟集し坐り込んでいる。その光景は五十年前とあまり変らない。いや、それ以前のパール・バックの『大地』に描かれてあるあの光景である。

「払下げ」とか「買上げ」などという言葉がいまなお官庁の予算書に無神経にも平然と使われている日本は近代国家らしからぬ官尊民卑の国だが、この国はそれどころの話ではない。サービス精神など片鱗もうかがえない。まさに終戦直後のあの国鉄といったところか。

六時開扉と同時に群衆は、まさに非難民でもあるかのようにわれさきにと建物の中に吸い込まれてゆく。

上海と寧波（ニンポー）、地図で見れば指呼の間だが、さすがは大陸、飛行機で四十分を要する距離であり、乗客もほぼ満席だった。

寧波（ニンポー）はもと慶元（けいげん）府（ふ）とも呼ばれ、市内を甬（ヨー）江が流れているところから甬（ヨー）の地名もある。道元禅師がここから上陸されたことはご存知のとおりで、上陸地点も残っている。

寧波は昔より漁業、海運、農水産物の拠点で栄えたところだが、潮の干満の差が激しいので、上海にその繁栄が奪われたという。ここから天童寺まではクルマで約五十分、東へ三四キロの地点に在る。

今から十三年前の昭和五十五年一月三日、香港総持寺会の理事長林一生（ラムイーサン）氏ほか五名が天童寺を参拝した。そして住持広修法師に面接はしたものの、その頃の住職はまだ宗教事務所職員の

指示通りに動くロボット的存在でしかなかった。そこで林氏らは浙江省人民政府（省都は杭州）の宗教事務所長楊子林氏及び旅遊局長劉才傑氏に会い、同じ中国人として忌憚のない意志交換をおこなった。その結果、「天童寺は中日両国曹洞宗の祖廟」であるにより、「今後、両国仏教界の友好往来を盛んにし、さらに一層友誼を深めよう」と相互の要望を確認し会い、「総持寺参拝団をぜひお招きし、全行程責任をもって案内したい。ただ三月に入ると日程がつまっているので、なんとか二月下旬に来訪してほしい」と要請を受けた。

端的にいえば、—四人組を追放して、宗教に対する寛大な施策を打出したものの、人民がそう簡単には信用してくれない。そこで日本から大勢の参拝団がやって来て、敬虔な態度でお寺詣りしてくれれば人民も早く納得するであろうし、それはまた外貨獲得にもつらなり、一石二鳥の成果を挙げることができるというのであろう。

林一生氏からその旨電話で報告を受けた私は、とにかく来日して乙川禅師に直接報告しなさいと返答した。それにより一月十五日来日した林氏は乙川禅師を拝問、詳細を報告した。そこで乙川禅師は一月二十一日、松浦監院一行を特使として派遣することになり、私が一切をとりしきることになった。

まだ寒い季節でもあり、また出発まで間もないことなので、私は寒さに強く、そしてパスポートを持っているだろうと思われる人々に次々に電話して二十五名を確保したが、うち一名はカゼのため出発間ぎわに取止めとなった。

かつてマスコミが「中国は竹のカーテンを張りめぐらしている」といったが、その頃でも中国の事情はなかなかうかがい知れなかった。何か参考になるものはないかと探したが、ようや

く次のことぐらいしかわからなかった。

中国仏教は日中戦争、内戦、革命政権の誕生、文化大革命紅衛兵騒動で、唐の武宗の会昌大破仏を凌ぐ損害を受け、六十万の僧侶（男僧五十万人、尼僧十万人）は一九六〇年に十万を割り、いまやその十分の一すらおぼつかない状況である。人民政府は、外国人や華僑接待のためと文化財保存と憲法上信教の自由の象徴的存在という三目的のため、由緒ある寺院を若干残すのみで、僧侶は何等の発言力も与えられていない。

いや、はや、たいへんな状態なんだなあ、という不安と、体制の違う国にはいる緊張の交錯した気持で天童寺に拝登してまずおどろいたのはその宏壮な堂塔伽藍であった。ところがそれ以上に驚いたのは紅衛兵の徹底したその破壊ぶりだった。北京政府は莫大な予算（七十五万元、実質十億円）を投じて修復に当っているが、それでもまだ進捗率四七％に過ぎないという。

巨大な仏像はみな塑像で、まだ充分乾き切っておらず、ところどころに干割れがあったが、私ども参拝のため、わざわざ足場を取り払ってくれていた。

大雄宝殿（仏殿）の三世仏は、中央が釈迦牟尼仏（脇士は迦葉・阿難）、その右が薬師如来、左が阿弥陀如来で同型同寸（総丈一〇メートル）、法界定印を結んでいる。薬師・阿弥陀が法界定印とは？と思って訊ねてみたが、前の通り造ったので間違いないとの返事だった。

ここで一同、如法衣に身をかためて感激の拝登諷経をおこない、翌朝は四時から五時までの朝課に参列した。緋の袈裟をかけた広修住持を導師とした十数名の僧侶により『般若心経』『楞厳呪』『讃仏偈』が読誦され、ついで私ども参拝団のための祈禱会が設けられた。

この時の参拝でいま一つ忘れられないのは、私たちを迎えてくれる実に心のこもった気くば

りである。どうでも天童寺に泊ってほしいと、前もって連絡あったのも道理で、私たちのためにまず新しい寝具を整えてくれていた。真新しい木のベッドと毛布、ふとんを揃えてくれていた。間に合わなかったのであろう、ふとんは綿の上下に布地を置いただけのものだった。東司（便所）もようやく出来上ったばかりのところだった。

底冷えのする寒い夜だった。ベッドの下に便器が置いてある。朝排尿した容器を持ってドアを開けたら待機していた一人の青年がサッと便器を受取ってくれた。これにはおどろいた。彼らは室外に不寝番をしてくれたのであった。

たくさんのポットと新しいタオルが準備され、なにもかも新調して、出来得る限りの準備をして迎えてくれたのであった。

日中友好関係修復以来、いや戦後以来、天童寺に拝宿できたのは私どもをもって嚆矢とするであろうことを思うとき、その感激はひとしおであった。

無事下見を済ませた私は早速総持寺参拝団の編成に着手した。そして一八〇名の参拝団を編成し、五月二十八日、成田と大阪の二つの空港を離陸した一行は、夜、香港エクセルシオール・ホテルで合流して結団式を挙げ、翌二十九日、本隊は啓徳（カイタク）空港発チャーター機で杭州に飛び、大阪班のうち三十名は広州に向かい、広州から定期便で杭州に飛び、ここで本隊と合流、西冷（シーリン）賓館の大ホールで浙江省人民政府主催の歓迎会に臨んだ。

浙江省副省長陳作霖氏が省政府を代表して歓迎の辞を述べ、乙川禅師が謝辞を述べ、記念品を交換して、実になごやかなふんいきのもと、歓談の宴がもたれた。

翌日は杭州観光、そして三十日寧波に向かって出発。翌六月一日、乙川禅師は省政府さしま

わしのクルマで天王殿前に到着。住持広修法師はじめ一山の清衆は昔、皇帝を迎える際の古式による堵列をもって迎えられた。禅師は天王殿で五磬三拝ののち接賓に入り、型のごとく挨拶と記念品交換をおこなった。乙川禅師は献香料のほか二十三人分の法衣と曲彔、その他の仏具を寄贈してたいへんよろこばれた。

これで私は半年近く背負っていた重い荷物をおろした気持になり、ホッとしたものだった。

クルマの中で往時を回想していると、やがてなだらかな山道にかかり、峠の五仏鎮蟒塔が見えて来た。昔、ウワバミに毒饅頭を食わせて退治したという。そのため、いまもこの塔のあたりには饅頭の形をした石が散在し、割ると真ん中が餡そっくり黒くなっている。ここを過ぎると下り坂で、右によく整備された人造湖を眺めながら進むといよいよ天童寺第一の山門が見えてくる。もうこのあたりにくると、大勢の参拝客の姿が見えてくる。第一山門をくぐると両側は松並木、第二山門をくぐって第三門を通ると、右手は石積みの古塀、小さな池。その目の前にパッと展開するのが萬工池。昔、土砂崩れで池が埋まった時、一万人の人工で復旧したのでこの名があるという。この池の対岸に「東南仏国」と書かれた牆壁があり、その向うが天王殿。みな懐しい風景である。

クルマから降りると大勢の参拝客の視線を浴びた。中国僧とは違う僧形が珍らしいのであろう。こういう場合、韓国などでは必ず合掌する人がいるのだが、今日のこの国にはまだ帰依僧の信仰は芽生えていないようだ。それは無理からぬことで、ついこの間、僧侶は三角帽をかぶせられて街中を引きまわされたのだから。しかし、前回来た時は観光だけの群衆だったが、今回のは明らかに参拝客である。香花灯燭が供え

られ、敬虔に合掌する姿が多い。熱心に祈りを捧げている人の姿も少くない。

徳雲副監院が出迎え、接賓（せっぴん）（応接室）に案内してくれた。まだ三十歳台か。それもそうだと思う。中間層が欠落しているのだから。

早速訪問の趣意を伝えると、実は住持の明暘法師は私どもの訪問を心待ちしていたのだが、急の用向きで上海に出かけたとのこと。電話で連絡しましょうということで、早速電話をしてくれた。その結果、私たちの旅行日程に合わせて二十日北京の広済寺で会いましょうということになった。一時は上海に逆戻りしなくちゃならんかと気をもんだあとだけにホッとした気分になった。李さんは王生洪先生にも電話して、側面からの協力を依頼してくれた。

天童寺拝登の第一の要件はケリがついたので、次は身も心も威儀をととのえて仏殿にのぼり、声高らかに『般若心経』を読誦した。壇上の三世仏は金色燦然としてにこやかにほほえんでおられた。

拝登諷経を終えて、仏殿前の回廊に出ると、そこでひょっこり前住持の広修法師に出会った。広修法師は眼をわずらい、ほとんど視力が失われているとか、道理ではじめは無表情だったが、私が話かけると当時のことを思い出してくれ、「よく来てくれた！」と、堅く手をにぎってくれた。

改良服に衣替えして諸堂を拝観し、天王殿の前で徳雲副監院と記念撮影してお別れし、天童寺をあとにして寧波の宿舎に戻った。

杭　州　　六月十七日

今日は列車の旅。日本の汽車は中国では自動車のことで、汽車は「火車」という。駅は「火車站」。中国は土地が広大なので、土地に「糸目は付けず」、駅は実に宏大なもので、その威容に

圧倒される。

列車は新幹線と同じく広軌だが、プラットホームが低いだけに大きく高く見える。

列車は硬座車と軟座車、そして軟臥車にわかれている。私どものは軟臥車だった。旅行案内によると、「軟臥車は、日本の一等寝台にあたるもので、場合によっては飛行機より高い乗物だ云々」とある。これは素晴しい旅ができると胸を躍らせていざ乗車してみると、聞くと見るとの大違いで、旅行案内記の軟臥車は主要路線のものらしく、ローカル線の鈍行の軟臥車はなんのことはない、三段式寝台車の中段の寝台を垂らして背凭れにし、上段に荷物、下段に三人づつ向かい合って坐るだけのもので、窓際に細長い折りたたみ式のテーブルがあるだけ。お茶の好きな中国人は蓋付きのコップと茶の葉を携行している。お湯はポットで提供してくれるので各自コップに湯を注ぎ、茶の葉が開いて下に沈

む頃合いを見はからって飲み、また蓋をしてのどが乾いたらまた飲むといった具合である。

気温は三十五度、梅雨季なので実にむし暑い。しかし窓はあけられない。なぜなら列車のトイレは水洗式ではなく、また貯溜式でもなく、全くの垂れ流しである。窓をあけようものならすごい臭気の来襲を受けるという。それにしても暑い。窓の上に扇風機があるが、スイッチを入れてもビクともしない。たまりかねて李さんが乗務員室に連絡した。中年婦人の乗務員がやって来た。まことに態度が大きい。

中国には「怕太太（パータイタイ）」という言葉があるという。「怕」は恐ろしい、「太太」は夫人のことなので日本式にいえば恐妻というところ。こんな笑い話がある。ある処で男だけの会合があった。中の一人が「怕太太の者はこちらに集まってください」と言った。するとただ一人を残してみんながその指示に従った。残った一人に向って、「君は怕太太でないのか」というと、「いや、怕太太です」「ではどうしてこっちに集まらないのか？」「そのー、実は今日出がけに、人の誘いにのってはいけない、と言われたばかりなものですから……」ということで、一番の怕太太だったというのである。

両腕をうしろにして尻のあたりで組んでいるこの中年女性の乗務員を見ると、まさに男を威圧するかのような態度で、何等手をほどこそうともせず、「辛苦了（シンクーラ）！」といって出て行った。「辛苦了（クーラ）」これは「ご苦労さま」という意味だが、私は「なるほど、これが〝新クーラー〟か。没法子（メーファーズ）」と観念した。

寧波――杭州、わずか一八〇キロ区間を四時半かけて走るのだから時速は四〇キロ。九時の出発当時はまだよかったが、日が高くなるにつれ、むし暑くなってくる。アンダー・シャツ一枚でも汗びっしょり。

私は阿鼻（無間）地獄の火の車に乗せられているのではないかという気にさえさせられた。

「極楽の迎えは見えずして、本意無く（意に添わないこと）火の車を此れに寄す」（『今昔物語』）

阿鼻地獄の鉄車、火の車は生前悪事を犯した者を乗せて無間地獄に運ぶ。その距離二万五千由旬、地獄の悲鳴を耳にし、悶絶する……。その距離二万五千由旬というが、実はホテルを出て二万秒、そろそろ到着だなと思っていると、着いたところは地獄ではなかった。

昔から「上有天堂、下有蘇杭」（天に極楽、地に蘇州杭州）といわれるように、蘇州・杭州は、景色よし、酒よし、お茶よし、美人多し、とされている。蘇州は戦時中の流行歌の影響もあってか日本人には特に懐しい土地柄ではあるが、杭州の風景はそれに数段優るものである。

まず宿舎の香格里飯店にはいった。香格里とはシャングリラと読み、私どもバンコクでもよく利用する、中国人経営の有名ホテルであるが、ここで一悶着が起きた。

理事長は私の老体を案じ、万事に亘って細かな心遣いをし、特にホテルには気を配ってくださっている。ところが中国の旅行社がピンはねしているのであろう、支払った金額相応のホテルを提供してくれない。現に寧波のホテルは三ツ星（五ツ星が最高ランク）だったし、朝食もいたってお粗末なものだった。ここシャングリラは前述のとおり名の通ったホテルではあるが、キーを渡されたところで理事長が、「湖の見えるところだろうね？」と訊ねると、「いいえ、山際です」という。せっかく杭州までやって来て、湖の見えない部屋とは何事だとばかり、理事長は旅行社とホテルの係員を相手にその不当をただし、支払った金額だけの待遇をしろ、と迫った。係員、しぶしぶ返事して、次に出して来た

キイをみると、三人の部屋、階も違えば遠く離れたものだった。あきらかに意地悪をしている。さて、私の部屋は湖の見えるところではあったが、理事長の部屋は小さな上窓一つだけの薄暗い部屋だった。そこで又々ロビーでかけ合うことになった。事態を重くみた支配人が出て来て平身低頭して部屋を変えてくれた。なんのことはない、私の部屋の両隣りがちゃんと空いていたのである。

ホテル関係者は、白人に対しては卑屈なほどの応待ぶりだ。これは白人は気に喰わないことがあればズケズケなんでもいうからこわいのである。ところが東洋人に対しては、「われは中華の民なり」という自尊心があり、相手はまた文句をいわない。とくに日本人に対しては、成り上り者といった侮蔑と妬みの入りまじった感情をもってはじめから好意的ではない。だからここで三度部屋を取り替えさせたことは実に小気味よいことであった。

道元禅師も入宋直後のころ、外国人僧なるをもって末席に遇された。これは法臘（出家の年齢）によるべきだと寺当局に抗議したが受け入れられなかったので時の皇帝に上表してその意を達した故事もあり、やはり言うべきことはきちんと言うべきである。

杭州を訪れた最大の目的は如浄禅師のお墓詣りである。如浄禅師のお墓は、西湖の名所三潭印月の西の方にある、静寂そのものの名刹であり、誰もが簡単に如浄禅師のお墓詣りできるのかと思ったら、さにあらず、寺当局に申し出て、許可を得なくてはならぬという。旅行社の係員が交渉に出向いたが、なかなか戻って来ない。そのうち晩課（ばんか）（禅院における三時諷経（ふぎん）の一つ）の殿鐘が鳴り出したので仏殿の前の石段のところにいると、次々と仏殿にのぼってくる僧侶、歩きながら法衣をまとい、袈裟もつけず、キョ

ロキョロあたりを見ながらの読経、まさに「春の田の蛙の、昼夜になくがごとく」の感あり、威儀即仏法、作法是宗旨などどこにも感じられない。指導層もないのだから無理からぬことかも知れぬがこれでは中国仏教どこへゆくのであろう。奮起一番を望んで止まない。

係員の戻るのがあまりにも遅いので、これは献香料をさきに出すべきではなかったかと、話しているところに知客和尚がやっと来たので、献香料を差上げると実にスムーズに事が運び、墓前に読経をさせていただいた。

知客和尚は、如浄禅師は道元禅師の師匠様だということをさかんに強調される。同じ中国人として当然のことではあるが、私どもからすれば道元禅師が傑出した方であればこそ如浄禅師も高く仰がれるのである。

人間成功すれば、本人のみならず親や先生の名が世に出る。悪事をはたらけば、善人である親までが世の非難を受ける。同じように私どもがひたすらに仏祖の道を行ずれば、諸仏の行持が世にあらわれ、怠ければ諸仏の大道がすたれる。瑩山禅師の『伝光録』に、

ただ諸人の精進と不精進とに依って、諸仏頭出頭没せるのみなり、今日も頻りに弁道し、子細に通徹せば、釈尊直に出世なり。ただ汝等自己不明に依て、釈尊昔日入滅す。汝等已に仏子たり、何ぞ仏を殺すべけんや、故に急に弁道して、速かに慈父と相見すべし。

私どもの精進と不精進によって仏があらわれたり、隠れたりするのであるから、明日といわず、今日只今精進弁道すれば釈尊は直に出現される。私どもが真実に自己を明らめ悟り得ざるがために釈尊が雲にお隠れになったとすれば、私どもが釈尊を殺したこととなる。だから速かに弁道して慈父たる釈尊に相まみえなくてはな

らぬ――とある。

如浄禅師の墓前において、道元禅師の偉大さを思い、瑩山禅師のみ教えをかみしめたのであった。

杭州―北京―西安　六月十七日

今日は空の旅。

杭州一〇時五五分発　北京一二時四〇分着

北京一四時　五分発　西安一五時五五分着

これが搭乗予定なのだが、はじめから一沫の不安があった。というのは昨日午后、明朝の飛行機は飛ばないらしいという情報が流れた。搭乗券を売り出しておいてから妙なことをいうものだ、と思ったが、ここは中国、日本の物差しでは測り知れない。ことによると飛行機にエンジン・トラブルでもあって、欠航せざるを得ない状況にあるのではなかろうかと、不安だったが、朝、空港へ電話で連絡をとると予定どおり飛びますという。

空港に着いてみると、どうも様子が変だ。搭乗手続きがいつまでもはじまらない。二十分、三十分と時は遠慮なく過ぎ去ってゆく。「四十分遅れると乗り継ぎは出来なくなる」と、李さんは時計を見ながら気をもんでいる。その四十分もとっくに過ぎて、ようやく搭乗はしたものの、飛行は遅れに遅れて十二時を過ぎてようやく離陸した。

旧ソ連製の飛行機で、よくもこんな飛行機を飛ばしているものだとあきれるくらいの代物で、座席の背凭れはリクライニング出来ないものがあるかと思えば、一度たおすと戻らないものもあり、よく乗客から苦情が出ないものと感心ならぬ寒心させられる。

ロシア女性のスチュアデスが乗務していたが、彼女、サッカーの選手でもあったのか、床の上に落ちた物をまことに巧みに足で操作する。

とくにロング・シュートはお手のもの、いや、お足のもので、こういう女性と結婚する旦那は脛に生キズが絶えないだろうと案じられ、中国女性よりも怕(パー)だという感じを受けた。

皮肉なことに搭乗機が北京空港に着陸したのは十四時五分だった。全く同時刻に乗継ぎ予定の西安行きが離陸した。

〃さすが長安の都、簡単に行けないなア〃と嘆息した。

北京空港のロビーに降り立つと、旅行社北京支社の係員がのっそり姿をあらわした。一見して〃この男、旅行業者としてつとまるのだろうか〃と不安になった。暗くて陰気でのろのろして声は低く何をしゃべってるかわからない。あとでわかったことだが、西安から北京に戻った時、彼の暗い表情と動作に不審を感じた李さんが訊ねたところ、彼がもっとも頼りにしていた叔父が急逝したので、彼は悲観のあまり何度も自殺しようとしたのだが死に切れなかった、とのことだった。そんな状態の時だったので、とんだ手ぬかりがあって、彼は十六時発西安行きの飛行機の運行状況を確認せずに私たちの搭乗手続きを済ませて帰ってしまった。

搭乗待合室にはいってみると、十六時発の西安行きは「欠航」とあり、赤ランプが点滅している。椅子は満席で、床に腰をおろしたり寝ころんだりしている人でいっぱい。

〃これから五時間、どう過ごそうか。体がもつだろうか〃だんだん不安になってくる。理事長は、「ご老師、ご無理なら西安行きはやめましょうか」とおっしゃる。「いや、とにかく頑張ってみます」と強がりは言ったものの、全く自信はなかった。

こんな状況の中で張さんの大活躍がはじまったのである。張さんにとっては、昨日と今日は大厄日だった。昨日は理事長から旅行社の非を

手きびしく指弾され、今日は朝からトラブル続き。旅行社の職員として、また中国人民として、顧客である海外旅行者に対してどんなにか肩身の狭い思いをしたことであろう。彼女は会社の社長に直々電話して、「こんなように面子丸潰れでは即刻やめさせてもらうしかない」と声涙こもごも訴えた。社長もこれには驚いたに違いないが、そこは社長の貫禄で、張さんは慰留され、はげまされ、心機一転した。というのが李さんの報告。張さんはついで北京支社に電話して、旅行社とコネのあるレストランに私たちの夕食を準備して待機するよう連絡をとり、私たちを空港外に連れ出してくれた。おかげで立ちん坊の重労働から解放されることになり、ホッと精気を取り戻した次第。

二十時、ようやく西安行きの飛行機に乗ることができた。これも飛行機のやりくりがつかなかったらしく、急きょ国際線の飛行機が代替され、バスは遠く国際線のボーデング・ブリッジまで十分近くも空港内を突っ走った。今日一日の罪滅ぼしか、いい飛行機といいサービスが提供されて西安入りが実現した。

ホテルに着いたのは〇時を過ぎた頃だった。想えば長い旅だった。杭州のホテルを出て八時間で着く予定のものが実にその倍近くの時間を要したのであり、心理的時間の長さは計り知れない。さすがは大陸だなァという思いを深くした。

西安　六月十九日

西安は古都長安。洛陽と並んで中国史上もっとも著名な旧都で、漢代から唐代にかけてもっとも繁栄した、シルクロードの関門でもあり、遣唐使が儒学や音楽など多方面の学問を身につけたところとして有名である。

上海の時もそうだったが、ここ西安でも李さ

んの友人が私たちをあたたかく迎えてくれた。ことに西安では、乗り心地のよいクルマを提供してくれ、そしてプロのカメラマンが同行してくれた。

予定通りならば昨日の夕方には西安に到着するはずだったので、「餃子館」を予約して副市長以下、大勢の友を招き待機しておってくれたのだという。それが想像外の延着だったので、準備した餃子も食べきれず、残りは各自が折詰にして持ち帰ったという。だから今夜はぜひその「餃子館」へというわけで案内されたが、おどろいたことに餃子の種類が百八種といい、それぞれ味も形も違うのであった。二十種類はぜひ食べて欲しいということだったが、精々十二、三しか食べられなかった。

西安は麦の主産地なので、餃子も小麦文化が生み出したものの一つで、フランスのパンに匹敵するものではなかろうか。

これは夜のことをさきに書いてしまったが、ホテルで李さんの友人と初相見、そしてまず最初に案内されたのは華清宮だった。ここは周代からといわれるから凡そ三千年の歴史を持った温泉地で、華清宮と同名の池華清池がある。ここを最も有名ならしめたのは唐代の玄宗皇帝と楊貴妃の愛の物語であろう。楊貴妃は実は玄宗皇帝の実子である寿王の妻だった。それを玄宗が息子から取りあげ、親子ほどの年の離れた楊貴妃との愛に溺れ、政治をかえりみなくなったため、安禄山の乱を招いた。長安から蜀へ逃げていく途中楊貴妃は殺され、玄宗は悲しみのうちに蜀に落ちのびる。やがて政権が安定して後、長安にもどった玄宗は楊貴妃のことが忘れられず悶々の日を送り、その魂を探し求める。これを謡いあげたのが、かの有名な白居易(白楽天)の「長恨歌」である。この「長恨歌」の最後の方に、

天に在りては、願くは比翼の鳥と作り
地に在りては、願くは連理の枝と為らん

という名句がある。

天上においては、翼を連ね常に一体となって飛ぶ比翼の鳥、地上においては、枝と枝とが一つに結び合う連理の木となり、いつまでも一緒にいたいものである、という意味で、これを中学時代、漢文で聞いたとき、比翼の鳥も連理の枝も、ともに想像上の鳥であり植物であろうと思っていた。ところが五十年前軍隊で南京にあった時、連理の木が実在の植物であることを知った。二本の幹から出た枝が一つにとけ合っている木を現にこの眼で見たときの驚きは大きかった。そして、連理の枝が実在のものであるなら、比翼の鳥も実在したのではなかろうかと思うようになった。ちょうどその頃、アメリカのP38と称する双胴の戦闘機が時折南京の上空にあらわれ、機銃掃射をした。それを見た私は、

〝あッ、比翼の鳥！〟と思ったものだった。

華清宮で玄宗と楊貴妃のロマンを思い、この話をすると、李さんのいわく、

「P38の設計者は中国人なんです。そして比翼の鳥にヒントを得て生まれたのがあの飛行機なんです。それは設計者自ら著作で述べております」と。

これを聞いて私は半世紀にわたる疑問が解けた思いで、西安にまでやってきたご利益にしみじみ感じ入った。

ここ華清宮はまた、現代中国の政治舞台を大きく変えた一ページを飾っている。今から五十六年前、蔣介石はここで張学良に幽閉され、第二次「国共合作」に調印し、中国の歴史を大きく転換することになったのである。折も折、この華清宮で往事を偲んでいる時、日本の国会解散の報が李さんによってもたらされた。日本の政治舞台も大きく変るのであろうと痛感する。

西安といえば最近脚光を浴びてるものが秦の始皇帝の兵馬俑である。今から十九年前偶然発見され、二年後にさらに二つの俑坑が発見され、約八千体の陶俑陶馬と一万件の武器が出土しているという。これらは戦いに臨む実戦軍陣の姿で、整然とした隊列は始皇帝陵を守るための近衛軍団の縮図ともいうべく、まことに素晴しいものである。いまは、巨大なドームで覆われ、発掘されたまま展示されている。陶俑陶馬は東を向いており、これは秦国に征服された六国からの反撃を防備しながら監視する意を表しているのだといい、二千百年前の秦軍の雄姿が生き生きと私たちの眼前に再現されている。

秦始皇帝は現在では墳丘が残るだけだが、かつてはこの兵馬俑坑を含む、周囲六キロにも及ぶ広大なもので、地中には壮大な宮殿が造られていたという。現在でも発掘作業が続いており、やがてはいつの日にかその全貌が明らかになるのであろう。

長安というと、私ども仏教徒はまず玄奘三蔵を思い出す。玄奘三蔵の生誕の年にはいろいろ異説があるが、現地刊行の『長安懐古』によって西歴六〇〇年説によることにする。

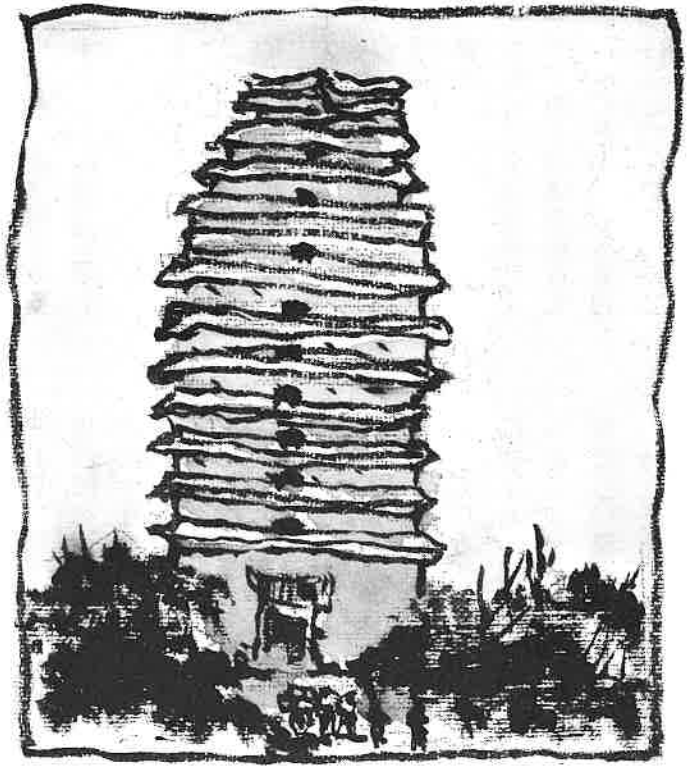
玄奘三蔵法師は十三歳で出家、二十二歳で得度し、その後兄に伴われて長安に来て、仏教経典を学ぶうちに仏教哲理にいろいろ疑問を感じ、その疑問の解決とさらに一層仏教を深く究めるため、国法を犯して長安を離れ、シルクロードを通ってインドに向かうのであった。

シルクロードといえばいかにもロマンチックで優美なイメージが湧くが、玄奘三蔵より二三〇年も前にこの道を辿った法顕(ほっけん)の『法顕伝』によると、「砂漠には悪鬼、熱風あり」「遇えば忽ち皆死して全き者無し」「空に一飛鳥なく、地に一走獣なし」「人骨、獣骨の類をもって行路の標識となすのみ」といった文字があるとおり、実

にけわしい危険な道で、インドに向かった坊さんのうち、無事中国に帰還できたのは一割にも満たなかったといわれる。それほど危険な道であり、シルクロードを旅することは国法で禁じられていた。

今や国内では学ぶべきものがなくなった玄奘は、本場のインドに出向き、お釈迦様の足跡を辿り、真実の仏法を求めなくてはと意を決し、幾度も出国を上奏請願したが、その都度却下された。そこで玄奘は二十八歳の時、国禁を犯して出国し、一年がかりでインドに到着し、インド各地に仏跡をたずね、仏教を学び、四十歳の時帰国の途についた。インドにあること実に十二年。帰国は四年がかりで、四十四歳の正月七日、長安の都に帰り着いたのである。密出国者であった十七年前の玄奘はここで凱旋将軍のような大歓迎を受けた。時の皇帝、唐の太宗は玄奘の帰朝を心から歓迎し、はじめ玉華寺を与えて翻訳に従事せしめた。五年後、高宗が太宗に代って皇位につくや、皇太子時代、母の慈恩を追慕して建てた大慈恩寺に、玄奘三蔵のために訳経院を造った。ここで玄奘三蔵は十一年の間に七十五部千三百十五巻の梵語経典を漢訳したのであるが、玄奘三蔵はこの寺の境内に塔を建てて仏像と経典を保存したいということを高宗に願い出た。高宗は玄奘三蔵の願いを聞き入れ、玄奘三蔵の建議によってインドの仏塔（ストゥーパ）を真似て、五層の塔を建てた。これは西暦六五二年、玄奘三蔵五十三歳の時だった。これが有名な大雁塔（だいがんとう）である。大雁塔は則天武后の長安年間（七〇一～七〇四）に大改造がおこなわれ十層となった。しかしその後の戦乱などで七層から上が崩壊し、現在は七層で、高さが六四メートルといわれ、今日西安のシンボル的存在となっている。

玄奘ほど有名ではないが、義浄（六三五～七



一三）もまたインドを旅した高僧であるが、義浄は薦福寺を経典翻訳の道場として西暦七〇六年から二十二年間、五十六部の経典を漢訳した。小雁塔はその頃経典翻訳の道場として造られた塔であり、もとは十五層だったが明代の大地震の際、上二層が崩壊し、現在は十三層、四三メートルの高さである。大雁塔が直線的男性的なのに対して、小雁塔は曲線的、女性的で、ともに西安を代表する塔である。

西安の二日間は、李さんの好意と、李さんの友人の心あたたまる奉仕によって、ほんとうに楽しく有意義なものだった。

北　京　　六月二十日

来る時とは全く違って、北京に戻る今日は予定通りスムーズに事が運び、いや、スムーズに運び過ぎて気が抜けたのか、李さんの友人から贈られた掛軸三幅をホテルに忘れてしまったりして、アッという間に北京に着いてしまった。

ホテルに着いて早速広済寺に電話すると天童寺住持明暘法師が待っておられるというので、早速出かける。

広済寺は北京でもっとも古い名刹の一つである。十三世紀の金朝末期に、この地に西劉村寺が建てられた。明代の成化年間（一四五六～八七）に再建され、その後に弘慈広済寺に改められた。ここも紅衛兵に破壊されたが、その後の大修復で荘厳さを取り戻した。

広済寺は現在の中国仏教協会本部になっており、明暘法師はこの寺を兼務、中国仏教協会の副会長をつとめておられる。午后からまた会議があるというので昼休みに参上したが、明暘法師は快く丈室に私どもを迎えてくださった。

理事長が、横浜善光寺留学僧育英会の名誉顧問ご就任をお願いし、役員名簿をお見せすると、両大本山貫首禅師、山田天台座主、中村元先生

等のお名前をごらんになり、「みな知ってる方々！」と、顔を綻ばせて快諾、日本にも何度か来られているので四方山の話に時の経つのも忘れて話込み、記念撮影ののち、堅く握手をかわし、再会を約してお別れした。

天童寺で不在と聞いたときは一時、〝ダメかな〟と思ったが、電話連絡の結果、「北京で会いましょう」ということになり、それがいま実現したのだからそのよろこびはまたひとしおで、ホッとした途端に空腹を覚えた。それもそのはず、早朝ホテルで粥食を食べただけだった。

天安門広場に近いレストランで昼食を済ませ、李さんの知人の勧めにより雍和宮を訪れることになった。

李さんの知人の女性の電話による指示に従ってタクシーを走らせて雍和宮の前に着いた。すると待機していてくれた彼女が飛んで来て私どもを門内に案内してくれた。よほど熱心な信者なのであろう、どこもフリーパスで方丈に案内してくれた。

ここ雍和宮は黄帽派チベット仏教寺院で、かつて清朝雍正帝の宮殿をチベット寺院にしたものである。現在のチベット仏教徒（ラマ教）はチベット族と蒙古族がほとんどだという。

筒袖の和服といった感じの栗茶色のころもに黄色の帯をした、いかにも如才のない好々爺があらわれた。「你好！」といって名刺を出してくれた。住持の加木揚・吐布丹法師である。そこへ精悍な蒙古の騎馬武者を想わせるような同じ服装の若い僧侶がはいって来た。名刺の肩書には「管家」とある。監院か副住職のことであろう。親子だとも聞いた。

理事長が、「こちらで修学しておられる嘉木揚凱朝さんが、日本に留学を希望しております……」と話し出すと、「それは聞いてません。本人から一言の連絡もありません」と、お二人と

もやや不機嫌な表情。

「実はまだきまったことでもないので」と前置きして詳しく事情と経過を説明し、「いまおうかがいしたのはその事とは関係なく、お詣りさせていただきたく参上したのです」と述べると、ようやく納得して歓談してくれた。

歓談終わって副住職の馬志徳法師が諸堂を案内してくれた。

宮殿内にはチベット仏教の代表的な仏像、仏画が数多く展示されていた。一番北側の万福閣には地上一八メートルの一木造りの弥勒像が立っている。一木造りとしては世界最大のものといい、ギネス・ブックにも載っているとのことで、そのことが大きなプレートに標示してある。

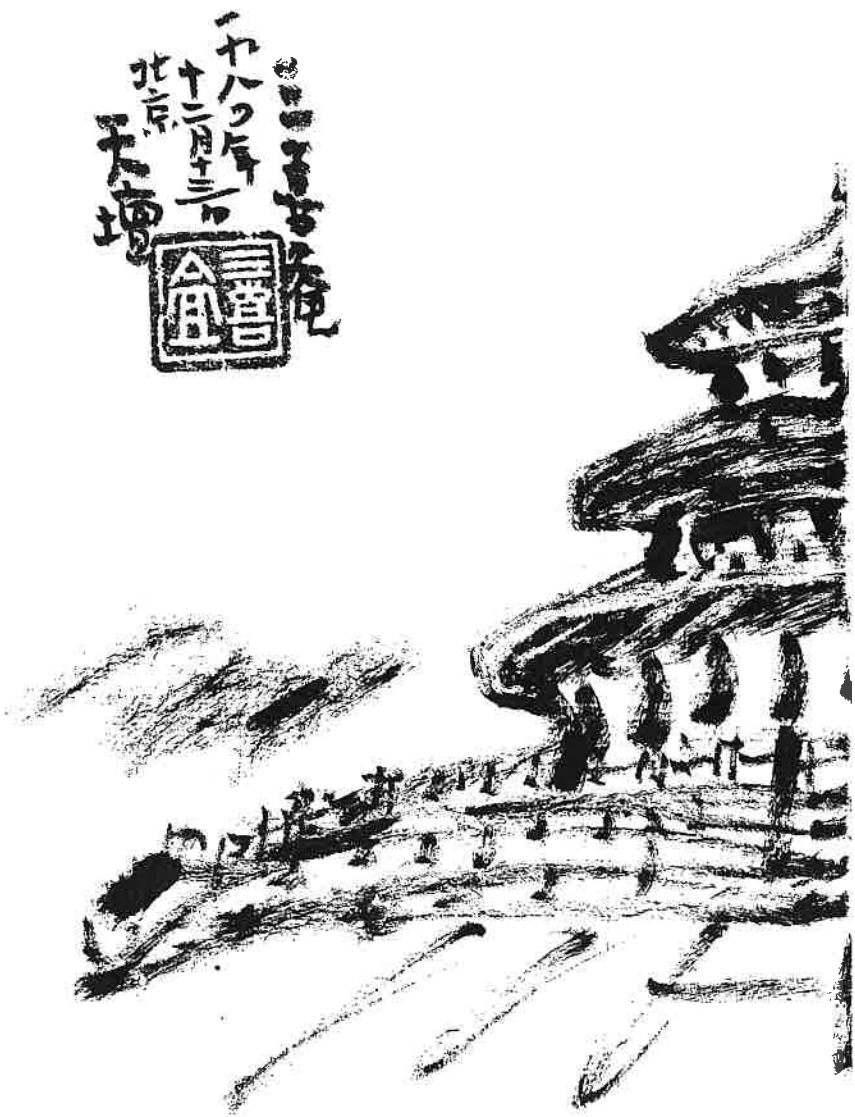
ご承知のとおりチベット仏教の仏像や仏画にはきわめて強烈な刺激を与えるものが多い。なかでも男女交合歓喜仏は他宗派ではあまり見られないもので、観光にくる中国人もこの仏像だけは熱心に見るようで、いつも人だかりがしているという。

雍知宮を辞してショッピングをしてホテルに戻ると、嘉木揚凱朝師がロビーで待っていた。彼は、手製の絹布をタオルぐらいの長さに切って、理事長と私にそれぞれ捧呈してくれた。長上に対する礼儀だという。雍和宮の住持と管家から許しを得て参上したのだといい、晴々とした表情だった。

「台北から林夫人が到着したらいっしょに話し合おう」ということで、林淑貞さんの到着を待つことにした。

話は三年前に溯る。台北大学での善光寺留学僧育英会の話を伝え聞いた林淑貞さんが、北京の雍和宮で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝師を日本に留学させたいと考えるようになり、一年ほど前から事務局に連絡をとって来た。

林夫人は当初、善光寺留学僧育英会に頼めば


一九八〇年
十二月十三日
北京
天壇

万事を処理してくれるものと考えたらしかったので、そういうわけにはいかぬ、入国手続や身許保証、育英金でまかない切れない分の学資負担等に責任を持ってもらわなくては採用はできないと連絡したのだが、言葉の障壁があってなかなかその意が通じない。そうこうするうち、北京の本人からは応募に必要な書類が送られて来て、審査の結果理事会もパスして採用決定となり、愛知学院大学からは聴講許可証が送られて来たが、肝心のスポンサー林夫人からはなんの連絡もない。さればといっていつまでも放置するわけにもいかず、北京に出かけるから、それに合わせて台北から北京に飛来するよう要請し、三者会談が実現したわけ。さいわい李さんの実に素晴らしい語学力のおかげで話は首尾よくまとまり、嘉木揚凱朝師は九月以降愛知学院大学に入学の見込みとなった。

愛知学院大学といえば、小出院長は顧問であ

り、それに助教授の引田弘道師は第五回留学僧としてオックスフォードに学んだ新進気鋭の学者で、嘉木揚凱朝師はじめ、今年度の留学僧スリランカのキリメティヤネ・ヴィマラワンサ師などの受け入れに親身になって協力してくださっていることを一言付記する。

北京滞在第二日は、仕事終っての気楽な観光となったのでまず最初に中日友好病院を訪れることにした。この病院は、留学僧育英会の顧問伊藤喜三郎先生の設計になるものだからである。ガイド・ブックにも「北京で病気になったら、まず迷わずに中日友好医院へ……」と書いてあり、また李さんの話によると、この病院が出来たことによって中日友好の気運が一段と高まったとのことであり、李さんの関係するK製作所の重役もここで開腹手術を受け、すっかり健康を回復して目下元気で活躍しているとのことだったが、縁とは不思議なもので帰国の飛行機の中でその重役の阿部さんといっしょだった。

北京といえば万里の長城。北京の北へ約七〇キロの山岳部、八達嶺からその尾根に沿って延々と続く万里の長城は、月から見える唯一の人工建造物だという。渤海湾（山海関）から遠くゴビの砂漠（嘉峪関）まで数千キロの長い長い城壁。これは紀元前五世紀以来、各地方の国々が北方の匈奴の侵入に対して防壁として造ったもので、それを秦の始皇帝がつなぎ合わせたものだという。

秦の始皇帝といえば残虐な専制君主で、古典を焼き捨てるなどしたが、反面、通貨や文字を統一し、道路を造成し、万里の長城を築き、分裂していた中国の諸侯や諸部族を統一するなど古来稀にみる力量を発揮した大君主であり、また死後の永遠の棲み家として巨大な陵を造り、実物大の兵馬俑、近衛軍団を造り、それが二千年後の今日発掘されつつあり、そのスケールの

大きな生涯はまだ評価し尽されないところであろう。

帰　国　六月二十二日

今回の中国旅行の目的はすでにおわかりのように、

一、天童寺拝観と住持明暘法師を名誉顧問に推戴すること。

二、杭州浄慈寺拝観と如浄禅師の墓前に詣でること。

三、北京雍和宮で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝師を留学僧として受け入れるについての最後の詰めをおこなうこと。

の三点だった。

いずれも首尾よく目的を達成することができた。

今回の旅行の成功は李幼麟さんの語学力、人脈、そして人柄に負うことがきわめて大で、善光寺留学僧がその力量を育英会のために発揮してくれた最初の成功例というべく、これは善光寺留学僧育英会としての画期的な成果だった。

◇六問のこたえ◇

1、ロサンゼルス
2、サンフランシスコ
3、シドニー
4、ファッション・ショウ
5、スプライト
6、カラーフィルム

中国八日間の旅

天童寺住持明暘法師を名誉顧問に推戴

天童寺・羅漢堂

寧波

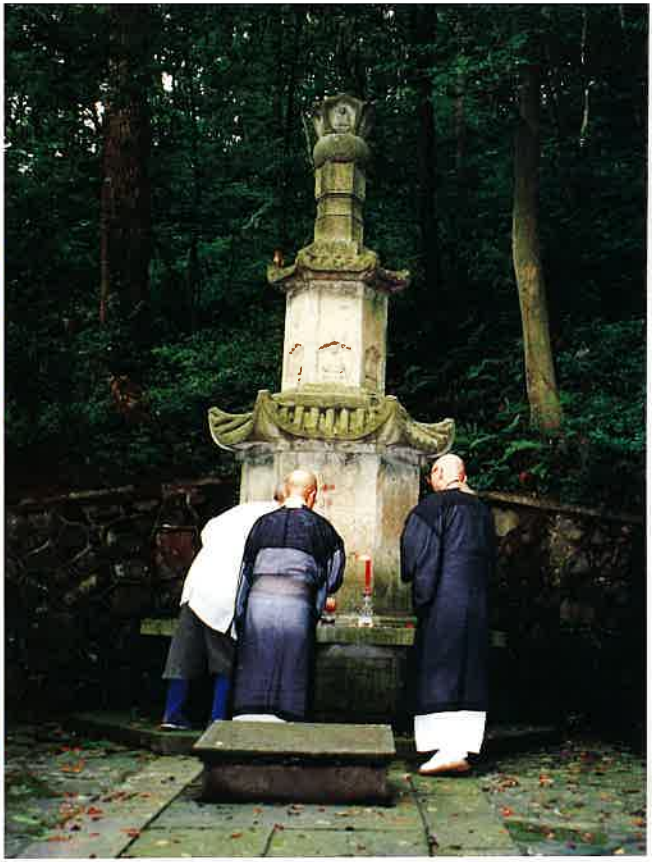
天童寺

道元禅師得法霊蹟碑前

拝登諷経

杭　　州

▲霊隠寺



▲如浄禅師墓碑

浄慈禅寺

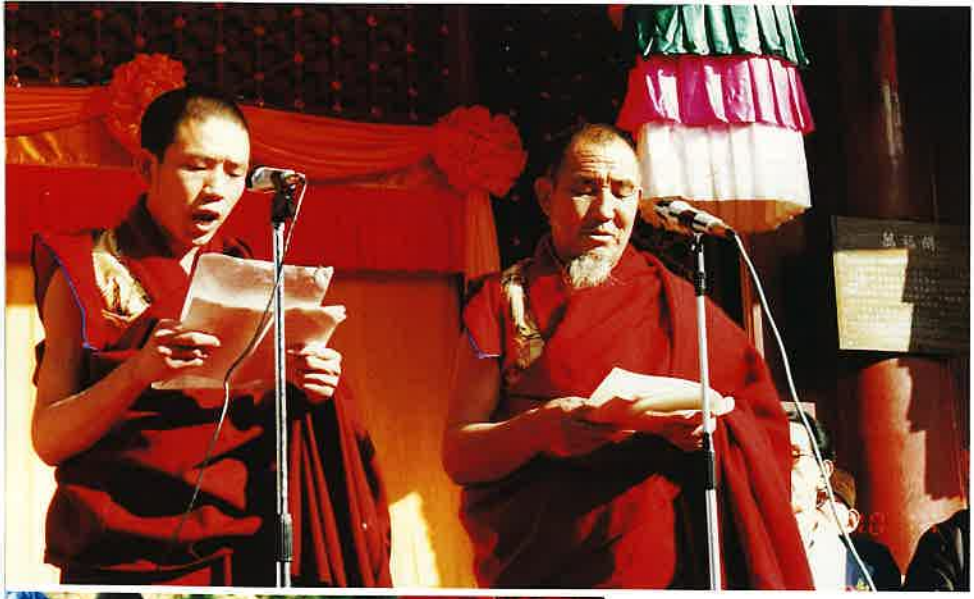
再び天童寺を訪ね
修祥天童寺監院と交流を深める。

黒田理事長は、10月に再び天童寺を訪ね、修祥天童寺都監兼監院様と親しくご歓談された。

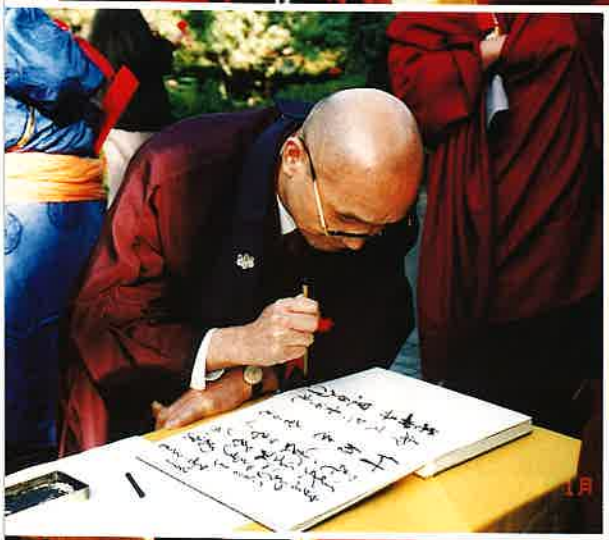
北京雍和宮弥勒大佛開光慶典記念

万福閣

黒田理事長夫妻



挨拶する加木揚吐布丹住職（右）



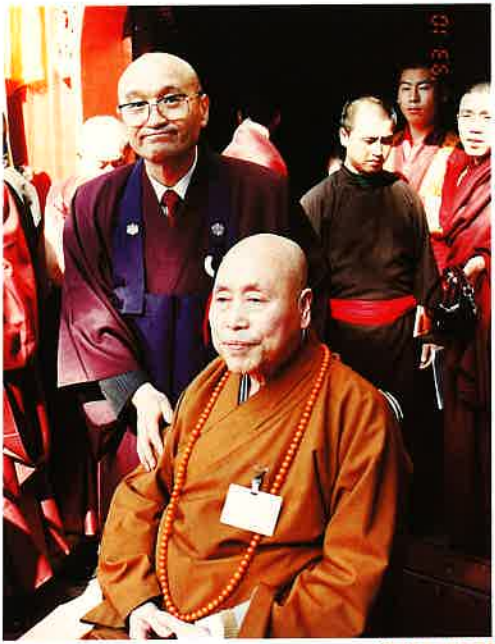
記帳する黒田理事長

供之物

擁和宮住職と嘉木揚凱朝師
中央が理事長

参列の来賓、後列中央が明暘禅師

明暘禅師と理事長



奏楽隊の前で

彌勒大佛

天童山景徳寺と如浄禅師と道元禅師

横浜善光寺留学僧育英会理事　東　隆眞

天童山景徳寺（太白山天童寺）

天童山景徳寺という名称は、今からおよそ七百五十年以上もむかし、わが国鎌倉時代に道元禅師がお書きになった『正法眼蔵』そのほかの撰述に出てくるところで、くわしくは、太白名山天童景徳寺とよんでいたらしいが、現在は太白山天童寺という。いまは、道元禅師にちなんで、そのころの寺名の天童山景徳寺をもちいることにするので、あらかじめお断りしておきたい。

天童山景徳寺は、中華人民共和国浙江省寧波市鄞県の東方およそ三九キロ、太白峯が、右に鉢盂峯、中峯を、左に聿旂峯、玲瓏峯を背景とする山麓にある。

今を去る一六九四年まえ、永康元年（三〇〇）、義興法師が開いた。義興法師が山中で修行しているところにどこからともなく一人の童子が現われて、身辺の世話をしてくれた。不思議に思って訊ねると、実は太白星（金星）の化身だという。そこで、人びとは、山を太白山、寺

を天童、法師を太白とよんだ。

それからおよそ四三〇年後、開元二〇年（七三二）、法璿禅師が法華経を読誦しているとき、ひとりの天童が来て供養してくれた。これによって、天童の名が生れたともいう。開山義興法師が草庵を結んだところは古天童といっていまの天童寺から右に二キロばかり離れており、法璿禅師が太白精舎として修行していたところは、太白嶺の東方に位置し、すなわち現今の天童寺がそれにあたるといわれる。

その後、咸通一〇年（八六九）天寿寺、景徳四年（一〇〇七）景徳寺と改名し、洪武二五年（一三九二）天童寺、順治一六年（一六五九）弘法寺とよんだこともある。

天童山景徳寺は、南方四明第一の名山といわれ、明代には禅宗五山第三位に列せられた禅宗系の古刹、名刹、大刹である。一九五〇年のころ、プロレタリヤ文化大革命、四人組によって破壊されたが、一九八〇年以後、中国政府の援助七五〇〇〇元（約一〇億円）によってほぼ旧に復した。

その敷地面積は五八、〇〇〇平方米、建築面積は二五、〇〇〇平方米で永平寺の約二倍に相当し、一二〇余棟が甍を並べている。

そのむかし、天童山景徳寺の住職であった如浄禅師に師事して道元禅師は決定的な宗教体験を得たのであった。まさに、景徳寺は日本曹洞宗発祥の聖地と言ってよい。日本の曹洞宗大本山永平寺は中国の天童山景徳寺を模範として建造されたといい、中国側では永平寺を小天童とよんでいるとのことである。如浄禅師に私叙した日本の曹洞宗太祖瑩山禅師の開創地能登の洞谷山永光寺（石川県羽咋市酒井町）の開山堂は如浄禅師を高祖としておまつりし、天童山とよんでいる。

道元禅師の寂後、その門下、門流は、天童山

景徳寺に拝登をつづけ、交流を密にして今日に至っている。

私は、ほかのところで二度ばかり書いたことがあるが、ここでも再び三度び記して、天童山景徳寺の存在意義を宗門の伝統史の上から顕彰しておきたい。

かつて天童山景徳寺では、この寺院を雪山（せっせん）（すなわちヒマラヤを指す）。更にいえばインドの釈尊のお寺としてうけとめられていたようである（鎌倉の浄土宗大本山光明寺法主藤吉慈海上人が昭和九年夏、天童山を訪れた時、羅漢堂の柱に「此処便是雪山」などと書いた札が下がっていた。いまも大雄宝殿の須弥壇のうらの魚藍観音像の上部の扁額に「大雪山」と記してある）。インドの釈尊のお寺といえば、それは祇園精舎である。中国の祇園精舎は天童山景徳寺である。天童山景徳寺を模した日本の吉祥山永平寺と、天童山と名づける開山堂をそなえる洞谷山永光寺は日本の釈尊のお寺である。こうして、釈尊の教えが一貫してインド（雪山）、中国（天童山景徳寺）、日本（吉祥山永平寺と洞谷山永光寺）と脈々と流れ、その余芳を私どもは頂礼しているのである。

私は、昭和六二年三月二五日から四月二日まで、第一回道元禅師祖跡巡拝訪中団を編成して、日中友誼の実を深め、道元禅師ゆかりの祖跡を巡拝した。その間、四月一日、午前五時に起床し、団長としての私は、天童寺大雄宝殿（仏殿）で、導師となり、般若心経一巻、本尊上供をおつとめした。大雄宝殿のご本尊は、中央正面は釈尊である。その左右に薬師如来、阿弥陀如来がおまつりしてあるらしい。また、中央正面のご本尊釈尊の左右に阿難尊者、摩訶迦葉尊者が脇仕となっているようである。難値難遇の法縁に恵まれて本尊上供の導師をつとめている私の脳裏をよぎった観念は、釈尊を原点として、イ

天童山十景　その３

ンドを受けつぎ日本につらなっていくその分岐点、中心点としての天童山景徳寺の存在感であった。

天童山景徳寺と如浄禅師

道元禅師の仏法は、天童山景徳寺、そしてこの寺院の住職であった如浄禅師を無視してうけとめることは出来ない。すでに触れたとおりである。

これまで如浄禅師の生涯については、必ずしも明らかでなかったが、先年上梓された恩師鏡島元隆先生（前駒沢大学総長）の大著『天童如浄禅師の研究』（昭和五八、春秋社刊）は、詳細をきわめる唯一の研究書である。

如浄禅師は、紹興三二年（一一六二）、浙江省紹興府に生れたようである。一九歳以前に出家したらしいが、一九歳に至って求道の旅に出た。臨済宗系の松源崇岳、無用浄全、拙菴徳光、遯庵宗演らに歴参し、やがて曹洞宗系の雪竇山に住む智鑑（一一〇五～一一九二）に師事する。そして、智鑑禅師の後継者となるが、どのような経緯、証悟の内容であるのか、その時期はいつか、定かではない。

如浄禅師が曹洞の流れを汲む雪竇智鑑禅師のもとでどのように師資証契したかという点については、『続語録跋』（伝道元禅師撰）、『天童如浄禅師行録』（面山瑞方撰）、『五灯会元続略』）などにしるすが、その史実は定かではない。面山の『行録』の説は、瑩山禅師の『伝光録』、『洞谷記』と同調であるが、瑩山禅師は、これを道元禅師に端を発し、懐奘、義介にとつらなる室中の口伝から得たものであろう。いま、その『伝光録』の記事を訓読文になおして、左に掲げておく。

天童浄和尚、雪竇に参ず。

竇問うて曰く。浄子、曾て染汚せざる処、いかんが浄得せん。

師(如浄禅師)、一歳余を経て、忽然とし豁悟して曰く。不染汚の処を打す。

師は越上の人事なり。諱は如浄。十九歳より教学を捨て祖席に参ず。雪竇の会に投じて、すなわち一歳を経る。尋常、坐禅すること抜群なり。ある時、ちなみに浄頭を望む。時に竇問うて曰く、曾て染汚せざる処、いかんが浄得せん。もし道い得ば汝に浄頭を充ん。師、措くことなし。両三箇月を経るに、なお、いまだ道い得ず。ある時、師を請して方丈に到しめ問うて曰く。先日の因縁道得すや。師、擬議す。時に竇示して曰く。浄子、曾て染汚せざる処、いかんが浄め得ん。師、答えず。一歳余を経る。竇また問うて曰く。道い得たりや。師、いまだ道い得ず。時に、竇曰く。旧窠を脱して、まさに便宜を得たり。いかんぞ道い得ざらん。しかしより師聞きて力を得、志を励まし功夫す。一日、忽然として豁悟し、方丈に上りて、すなわち曰く。それがし道得すと。竇曰く。這回、道得せよ。師、不染汚の処を打すという。声いまだ畢わらざるに、竇すなわち打つ。師、流汗し礼拝す。竇すなわち許可す。

如浄禅師は、嘉定三年(一二一〇)四七、八歳ごろから、広慧禅寺(南京)、瑞巌浄土禅院(浙江省)、浄慈報恩光孝禅寺(浙江省)、瑞巌開善禅寺(浙江省)、浄慈報恩光孝禅寺(浙江省)に歴住し、そして天童山景徳寺の住職となった。すなわち、嘉定一七年(一二二四)秋入院し、宝慶三年(一二二七)冬、退院した。道元禅師は、如浄禅師を天童山景徳寺の第三十代住職(『正法眼蔵梅華』)であったとし、瑩山禅師は、第三十一代住職(『洞谷記』)であったと記している。また、開山義興法師から数えて三十二代(白石虎月『禅宗編年

史』）に置く説もある。

その言行については、門人たちの編録した『如浄語録』がある。また、その人となりは「欣然豪爽」（欣然は、生き生きとしてわらいよろこぶさま。豪爽は、気性が強くさっぱりしているさま）ということばで伝えられている。

法嗣に、孤蟾如瑩、石林　秀、無外義遠、田翁　頃、自庵師楷、癡翁師瑩、雪屋正韶、以道尊（以上、中国人僧）とわが道元禅師（日本人僧）の九人がいる。

門人に、虚堂智愚、寂円、文素、妙宗、唯敬ら三十人余がいる。

無際了派、無準師範、浙翁如琰らと親しく交流があったようである。

病いにかかり、天童山景徳寺住職を辞任し、同寺の涅槃堂において、嗣承の本師・故智鑑禅師のために焼香し、後任に枯禅自鏡禅師を予言して遷化した。

遺偈は、「六十六年（一本に六十四年とする）罪犯弥天、打箇跿跳、活陥黄泉、咦、従来生死不相于」（罪犯、天に弥し、箇の跿跳を打す、活きて黄泉に陥つ、咦、従来、生死あいかかわらず）と伝えられている。

示寂の年時には、宋の紹定二年（一二二九）七月十七日と瑩山禅師の『洞谷記』には記されている。ほかに紹定元年説（一二二八）、宝慶三年説（一二二七）もある。

如浄禅師の墓塔については、私は、南屏山浄慈寺（浙江省、西湖の東南に位置する）の法堂とおぼしき建物の裏山にある「如浄禅師之塔」にぬかずき、導師となり、日本から持参した香一片を供えて読経回向した。とき（昭和六二年）の住持霊月法師のご案内をいただいた。

なお、浄慈寺には、昭和六一年、日本の曹洞宗が寄進した大梵鐘（高さ二、六〇メートル、口径二、三〇メートル、重量一〇、一七トン、杭

州製気機廠鋳造)が天王殿右手の新築した鐘楼におさまっている。鐘楼一階の壁面には、浙江省仏教協会副会長俞昶熙氏の「浄慈禅寺再建鐘楼記」がはめこまれている。浄慈寺は道元禅師の祖跡であり、霊月法師によれば如浄禅師は同寺第十三代の住職であった。あたりは西湖十景のひとつ「南屏晩鐘」として有名。

如浄禅師と道元禅師

二四歳(数え年)の道元禅師は、貞応二年(一二二三)、宋の嘉定一六年五月はじめ、日本を出て、宋国の明州慶元府(いまの寧波市)に到着した。

南宋時代、外国貿易の中心はやはり海港であった。それは明州(寧波市)であった。そして国内経済の中心地としての杭州であった。戸数三十万家、人口はおそらく百五十万人にも達する世界最大の都市であった。(植村清二氏著『万里の長城　中国小史』)。道元禅師がインドや中国の洛陽、長安に足をのばさなかったのは、今更その必要がなかったのであろう。

慶元府の船舶中に停泊することほぼ二か月、同年七月、天童山景徳寺にのぼり、住職無際了派禅師の会下に身を投じた。

この秋、近くの阿育王山広利寺の門を叩いているが、その翌年の嘉定一七年一月二一日、天童山の了然寮で知瘦という僧から無際了派禅師の嗣書を見せてもらい、その冬、諸方遍歴の旅に出る。

翌嘉禄元年(一二二五)春、再び天童山景徳寺に登り、ときの住職如浄禅師に相見し、五月一日、面授の堂奥を許され、夏安居に身心脱落の大事を了畢し、安貞元年(一二二七)すなわち宋の宝慶三年の秋、如浄禅師から、宝鏡三昧、五位顕訣、芙蓉道楷禅師の法衣などを受けて、天童山を辞去した。この秋八月、如浄禅師の門

弟寂円（のちに越前大野の宝慶寺開山となる）ほかとともに帰国したのであった。

さて、道元禅師は、如浄禅師に出会って、「身心脱落」という決定的な宗教体験をえた。道元禅師は如浄禅師について「人に逢ふなり」と感激をこめて、書きしるしている。

道元禅師は、如浄禅師の「身心脱落」の話頭を聞きえて、仏道を成就した。如浄禅師は、門下に対して、つねづね祇管打坐を説いている。祇管打坐は、迷いを捨てず、悟りを求めず、ひたすらにただ坐禅のみをひとすじに行うことである。祇管打坐こそ身心脱落である。それゆえ、道元禅師は、その膝下に集まってくる修行者たちに、身心脱落を体験することを口を極めて勧誘している。

道元禅師の坐禅仏法を祇管打坐としておさえると、その本質は自受用三昧であり、その形相は結跏趺坐であり、その機能は身心脱落である。祇管打坐は正身端坐（身）であり、沈黙（口）であり、非思量（意）である。

道元禅師が如浄禅師に師事したメモは『宝慶記』として伝わっている。加藤宗厚氏の調査では、道元禅師の代表的撰述『正法眼蔵』九五巻のなかで如浄禅師について触れてあるのは三五巻の多数にのぼるという。『正法眼蔵』だけではなく、その記録である『永平広録』一〇巻、『正法眼蔵随聞記』六巻などにも如浄禅師の言行は記されている。それらは、かの『如浄語録』とは若干ちがっており、どこまでも道元禅師によってとらえられた如浄像といった趣きがつよい。

それを要約すると、如浄禅師は、当時の俗化した教界にするどい批判を投げかけ、自己をきびしく律し、仏法に対するたしかな見識をそなえ、修行僧をあたたかく親切に指導した、まれにみる高僧であった。

しかし、このような高僧の遺風は、道元禅師

太白峰
鉢盂峯
中峯
迴光樓
迴照樓
七塔院
內萬工池
外萬工池

との師弟の契りが結ばれたことによってのみ、わが日本国に伝えられたのであった。弟子は師によって育てられるが、師は弟子によっていよいよ顕彰されるといもいえよう。

ところで、さきにも触れたが、私は第一回道元禅師祖跡巡拝訪中団の団長として、昭和六二年三月下旬から四月はじめにかけて、日中友誼を念願し、道元禅師ゆかりの祖跡を巡拝させていただいた。

太白山天童寺を拝登したとき、女性通訳の高麗萍さんによれば、道元禅師は寧波港の小白河（しょうはくか）（いまは暗渠になっている）に上陸して天童山に向ったという。天童山まで約二〇キロメートルはあるであろう「五仏鎮蟒塔（ごぶつちんもうとう）」のあたりから、五体投地の全身礼拝行をくりかえしながら天童山に辿りついたのだという。そのことを確めるにはあまりにも遠い過去の彼方の話ではあるが、史実の如何はともかくとして、今もそのような話が中国に伝えられて残っていることに、にわかに天童寺に親近感をおぼえたのであった。更に、天童寺に入ると、薬石罷に、西禅堂（坐禅堂）に案内され、堂内に入り、数十名の僧侶とともに一炷の坐禅を体験することとなった。このとき、案内の僧が指さして、あの場所が道元禅師が坐禅したところだという。後方の左の隅の位置である。西禅堂の建物は最近建造された印象をうけたが、案内僧のことばは、妙に現実感をともなって、私に迫ってくるのであった。

『伝光録』のしるるところによれば、天童山景徳寺如浄禅師の会下で、およそ一五〇〇人を数える修行僧たちとともに、毎日、午前三時ごろから午後一一時ごろまでの約二〇時間にわたる猛烈な祗管打坐に専念して、「身心脱落」（身と心を束縛する我執が脱落して、真実の身心を自覚する）という決定的な宗教体験を、次のように伝えている。

永平元和尚、天童浄和尚に参ず。
浄、一日、後夜坐禅に衆に示して云く。
「参禅は身心脱落なり」と。
師（道元禅師。以下同じ）聞きて、忽然として大悟す。
方丈に上りて焼香す。
浄、問うて云く「焼香の事、作麼生」。
師、云く「身心脱落し来る」。
浄、云く「身心脱落、脱落身心」。
師、云く「這箇は、これ暫時の技倆。和尚、妄りに某甲を印することなかれ」。
浄、云く「われ、みだりに汝を印せず」。
師、云く「いかなるか、これ、みだりに某甲を印せず」。
浄、云く「身心脱落」。
師、礼拝す。
浄、云く「脱落、脱落」

また、雲水堂の一隅に、昭和五五年一一月一七日、曹洞宗管長・大本山永平寺貫首秦慧玉禅師の名による「日本道元禅師得法霊蹟碑」が建立された（高さ二、七メートル、幅一、四メートルの自然石。四名山産の梅園石）。

表面の碑文は、

「日本道元禅師得法霊蹟碑　公元一千九百八十年秋吉日　日本曹洞宗管長大本山永平寺貫首比丘秦慧玉率衆朝礼天童山祖庭樹碑以表彰遺徳　震旦居士趙撲初敬題並為頌曰　卓々禅師、早参尊宿、禅教兼通、梯航入宋、訪道天童、身心脱落、得法長翁、伝衣太白、建刹傘松、正法眼蔵、演義開宗、七百年後、徳沢弥隆、雲仍聯袂、来礼遺蹤、立碑献頌、永仰高風」

とあり、裏面の碑銘には、

「ソレ凡七百五十年前吾ガ道元高祖初メテ中

国ニ入リ先ズ当山ノ了派禅師ニ参ズ次イデ諸山歴澈一年後当山ニ還ル途次了派禅師ノ示寂ヲ知リ失望帰国ヲ決ス偶々新住如浄禅師ノ高徳ヲ聞キ喜ビ随身ス一夜坐大衆睡眠ス浄祖喝シテ云ク参禅ハ須ク身心脱落ナルベシ只ダ打眠シテ箇ノ何ヲ為スニカ堪エント高祖聞イテ豁然大悟直ニ方丈ニ上リ焼香ス浄祖云ク焼香ノ事如何高祖云ク身心脱落シ来ル浄祖云ク身心脱落脱落身心ト高祖礼拝ス此時証契即通曹洞正脉嗣承実ニ一二二五年高祖二十六歳七月二日也高祖更ニ弁道二年後浄祖ノ嗣書頂相袈裟ヲ正伝帰国即チ知ル当山ハ日本曹洞宗発祥ノ聖地也浄祖若シ高祖ニ嗣法セラレザレバ吾ガ宗ノ今日ハ如何ナラン古来日本ハ中国ヨリ無量ノ文化ヲ伝受ス寔ニ報恩謝徳ハ仏教ノ家常ナリ吾等弥々仏道ニ精進シ以テ中日友好ノ円成ニ寄与セン至祝至禱聊カ勒シテ後ニ備ウ維時一九八〇年秋吉日　日本曹洞宗管長　永平寺現住慧玉比丘敬誌印印」（原文のまま）

とある。

如浄禅師と日本の曹洞宗との関係の二、三を付記しておくと、まず、先述のとおり曹洞宗大本山永平寺（福井県永平寺町）と洞谷山永光寺（石川県羽咋市）には如浄禅師が奉祀されており、竜雲寺（岐阜県岐阜市）には如浄禅師の塔（脩重元如浄塔）が建立されており、薦福山宝慶寺（福井県大野市。開山寂円禅師はもと如浄禅師の門に学んだが、のち道元禅師を慕って来日し、その弟子となり、帰化した）には伝如浄禅師画像が伝承されている。また、大乗寺（石川県金沢市）には、如浄禅師愛用の払子（ほっす）が伝えられている。

なお加えておくと、平成二年（一九九〇年）十一月二十四日、曹洞宗大本山永平寺七十七世貫首丹羽廉芳禅師とその一行は、天童寺へ拝登。新装成った西桂堂に、「寂円禅師参学霊蹟碑」「先

覚如浄禅師崇恩碑」の二基が建碑され、その除幕式が挙行されたのであった。「大本山永平寺友好訪中団随行記抄」（熊谷忠興師稿。「傘松」五六八号収録）によれば、両石碑の碑文に関して次のように記してある。

「さて、西桂堂両石碑の銘文を次に掲げておこう。先ず右側の『寂円禅師参学霊蹟碑』は趙樸初先生の揮毫、二基共に三メートル弱か、裏面の内容は

寂円禅師ハ一二〇七年洛陽ニ生レ年少ニシテ当山ニ登ル吾ガ永平道元禅師モ当山ニ在リテ共ニ住持如浄禅師ニ随身ナリ師夙ニ道元ノ学徳ヲ慕イ宝慶三年道元帰東ノ時随ワント欲スルモ道元云ク浄祖老イタリ且ク湯薬ノ事ヲセラレヨト同年七月十七日浄祖示寂ノ後師ソノ遺骨ヲ持シテ翌一二二八年渡東道元ヲ京都ニ訪ネ師事シ興聖寺越前永平寺ニオイテ須臾モ離レズ道元示寂ノ後一二六一年大野銀盌峰ニ入リ時ノ大守伊自良氏ノ帰依ヲ受ケ一宇ヲ創建薦福山宝慶寺ト号ス門風大イニ振イタリ一二九九年九月十三日大宋国ニ帰ラント遺言シテ円寂サル九十三歳ソノ嗣義雲和尚ハ当時衰微セル永平寺五世ヲ董シ寺門ヲ復興シテ中興ト称セラル誠ニ寂円禅師ノ遺徳ハ永ク日東ニ輝キ正法ヲ護リ給フコト無量ナラン

維時一九八九年秋吉日

日本曹洞宗管長永平現住廉芳比丘敬誌

願主　宝慶寺　住持北野良道

協讃大本山永平寺、大野市、大野市日中友好協会

と、また、この日法要の為、宝慶寺開山寂円禅師木像の写真が石碑の前に安置されていた。これは宝慶寺の団体が捧持されて誠を巾んじたもの、一方、この亭の壁には天童寺側によって次の銘文がはめこまれていた。

「寂円禅師参学霊蹟碑因縁記略」

本山寺僧寂円（一二〇七年至一二九九年）
宋朝宝慶三年東渡日本国扇揚曹洞宗風七十余
年並在大野郡銀盌峰麓創建宝慶寺成為日本曹
洞第二道場日本宝慶寺尋源潮本知恩報徳発願
集浄資伍佰萬日元於公元一九九零年歳次庚午
仲秋敬立寂円禅師参学霊碑記此因縁俾垂永久
天童禅寺常住謹啓　印

と、これに依って石碑建立に因み五百万円が宝慶寺から、それと永平寺側からも同等の額が浄財とされて、両碑が円成したことが知られる。

次に左側の如浄禅師の碑には横に「先覚如浄禅師崇恩碑」と趙先生が揮毫され、その下に天童寺明暘法師が次の如く述べられている。

曹洞宗第十三世如浄禅師嘉定年間住持天童時
有日本国僧人道元禅師前宗参学習禅在浄師座
下得法同国後創立日本曹洞宗今日本曹洞援奮
追懐源流盛恩根徳稱浄資日元五百萬立崇恩碑
因縁殊勝功徳無量
師資道合勝前因　頌徳崇恩碑盡陳
中日深誼徳萬載　淡交相洪利人民
庚午中秋吉日　釈明暘恭賛□□

と、此にも永平寺から五百万円の助資のことが記録されている。そして裏面には「如浄禅師奉覲碑」と題して

天童如浄禅師ハ一一六二年浙江省明州府ニ誕生十九歳ニシテ捨教帰禅諸方ノ叢林ヲ歴遊シ後曹洞ノ雪竇知鑑ニ嗣法ス五大宝刹ニ晋住即チ健康清源寺台州瑞巌寺臨安浄慈寺明州端巌寺再主浄慈寺明州天童寺ニ唯務打坐スソノ家風清廉ニシテ峻厳一二二八年病ヲ示シ偈ヲ書シテ曰ク六十六年罪犯弥天打箇跻跳活陥黄泉咦従来生死不相干ト七月十七日示寂世寿六十六歳ソノ法嗣無外義遠永平道元等九人参学人寂円等アリ昔吾ガ道元高祖中国ニ到ツテツイニ大白峰ノ浄禅師ニ参ジテ一生参学ノ大事コニ畢リヌト即チ一二二五年五月仏祖正伝菩

薩戒ヲ稟受シ帰国スコノ大法相続ノコト高祖ノ著述正法眼蔵等ニ悉出セリ正伝ノ大法道元高祖ニ嫡々相承シ爾来七五〇年浄祖ノ法乳今ニ霑ス遇々一九八〇年秋日本曹洞宗ノ法孫道元禅師得法霊跡ヲ建立セリ今亦法縁熟シ酬恩塔ヲ発願ス伝フルニ浄祖ハ天童山ノ南谷庵ニ塔セリト雖モ詳カナラズ日本の雲孫幾度カ旧跡ヲ覓メ竟ニ杭洲浄慈寺裏ニ如浄塔ヲ認メ一九八三年秋重建セリシカレドモ天童寺霊域ニ浄祖ノ碑ナキヲ憾ミ仏祖ヲ挙括シテ奉覲スル底ノ挙トナレリ此ニ些カ来由ヲ誌シ後備トス

維時一九九〇年秋吉日　日本曹洞宗大本山永平寺現住比丘廉芳　敬誌

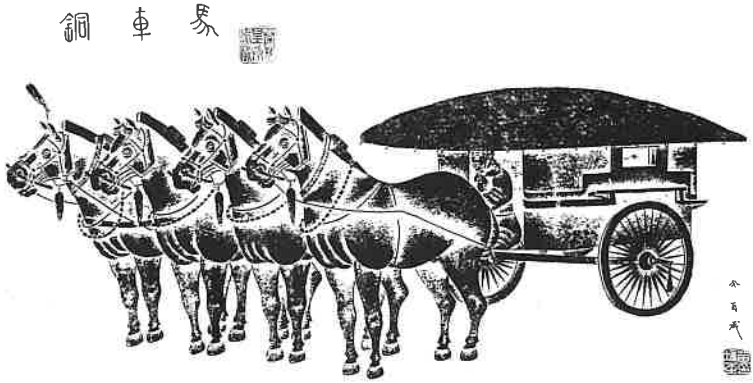
と、これに依って日中友好の契り、愈々天童寺参拝の者をして両碑を仰いで得法修行の姿をば悼び新にされることであろうと思われた。「(駒沢女子大学副学長、教授。駒沢学園女子中学高等学校校長。文学博士)」

参考文献

左記の文献を参考ないし引用させていただいたことに対し深い謝意を表すものであります。

天童寺参拝記（大本山總持寺刊）
洞門の祖廟をたずねて（大本山總持寺刊）
道元禅師旧蹟紀行　小倉玄照著（誠信書房刊）
中国仏教の旅（美乃美社刊）
中国仏蹟見聞記第二集（駒沢大学中国仏教史蹟参観団刊）
洞谷記に学ぶ　東　隆眞著（曹洞宗宗務庁刊）
天童寺志・天童寺続志（太白山天童寺刊）
道元小事典　東　隆眞著（春秋社刊）
中国仏教の寺と歴史　鎌田茂雄著（大法輪閣刊）
天童寺拝登記　磯田英雄著（故丹羽廉芳禅師刊）

中国仏教の儀礼　鎌田茂雄著（東京大学東洋文化研究所刊）
道元禅師祖蹟巡拝記（道元禅師祖蹟巡拝訪中団事務局刊）
道元禅師祖跡巡拝(1)(2)―中国編―　東隆眞稿（「無憂華」㉕㉖　駒沢学園刊）
永平寺参拝　東　隆眞編著（駒沢学園刊）
天童如浄禅師の研究　鏡島元隆著（春秋社刊）
天童寺世代考（三）　吉田道興稿（「禅研究所紀要」第十七号　愛知学院大学禅研究所刊）
正法眼蔵のなかの仏祖　加藤宗厚編（公論社刊）
傘松　平成三年一月号（五六八号）―永平寺友好訪中団特集―　発行所大本山永平寺（本誌の提供、資料の整理等については中野良教師、安藤嘉則師の御協力をえた。とくに記して感佩する）



くらしの中で読む『正法眼蔵』

――面授の巻――その三

小倉玄照

眼をみる

さて、仏法の単伝のありようを「面授」ということばで、道元禅師は示されたのですが、では、「面授」を完璧ならしむるためには、師と弟子とは、どのような態度で修行をすればよいのでしょう。「面授」ということばはやや抽象的なきらいのある表現ですが、それを具体的な行動に移したらどうなるかと申しますと「眼をみる」という行為になります。

釈尊は、迦葉尊者をみることによって、その心を伝え、いのちの本質を授けられたというのです。もちろん、この場合、みるのは、迦葉尊者の面(顔)ですが、面の全体というよりは、眼をみると言った方がよいかもしれません。

迦葉尊者も、釈尊をみます。弟子が師をみるときは、単にみるのではなくて、「礼拝奉覲してまつる」のです。「礼拝」は、五体投地の拝です。頭と両ひじと両ひざを地面につけ、ひれ伏して師を拝むのです。「奉覲」は、まみえたてま

つること。敬意を内に秘めて相手の眼をじっとみることです。

師の偉大さを信じきって大地にひれ伏して敬礼し、次にすっくと立ち、背筋をまっすぐに伸ばして、師の眼をじっとみるのです。それが「礼拝奉覲」です。朝な夕な、ことあるごとに弟子は師に礼拝を行じ、師の眼を敬意を込めてみるのです。「その粉骨砕身、いく千万変といふことをしらず」というのですから、何年も何年も、毎日毎日それを続けるのです。このようにして、師のまなこをわがまなこにうつし、自らのまなこを師のまなこにしっかりとおうつししようと「礼拝奉覲」の行をつづけていく間に、いつの間にか師のまなこ（眼）と弟子のまなこが一体化してしまう――それが面授であり、面受であると道元禅師は仰せになります。もちろんこれは、自らの切実な体験の中から生じた教えです。

如浄禅師をみる

道元禅師は、正師を求めて貞応二年（一二二三）、二十四歳のとき入宋されました。中国各地の名刹に、これはというわさの高い師を尋ねあるかれました。およそ二年間をかけて、七人の師を訪ねたと伝えられています。しかし、道元禅師を心服させる師には出会えなかったようです。『建撕記』は、その間の消息を次のように記しています。

「この七人の長老達の眼睛、吾よりも劣れりと思い給いて、さては日本大唐の間に吾れにまされる大善知識はなけりと、大憍慢を起し、帰朝せんと思い給うなり」（瑞長本）

この文章で、注目すべきなのは、道元禅師が師の真贋を判別するに際して「眼睛」を問題にしておられる点です。つまり、師のめんたまを凝視することによって、正師であるかどうかを

直観的に見抜かれたということです。これは、存外、昔から伝えられた人間を判別するための常套手段であったのかもしれません。

もはや帰国もやむなしと、覚悟を決められた道元禅師に、老璡という一人の中国僧が、言いました。

「大宋国裡に知識多くましませども、如浄和尚ただひとりのみ明眼の知識なり」（『建撕記』〈瑞長本〉）

と。眼がしゃんとした人物だから、ぜひ如浄禅師に会ってみろ、と勧めたわけです。道元禅師は、あまり乗り気ではなかったようですが、たまたまそのころ如浄禅師が天童山の住持職を拝命したために、道元禅師との出会いの場が生まれました。まさに「希代不思議の機縁」（『建撕記』〈瑞長本〉）というべきでしょう。

お二方の初めての出会いは感動的なものでした。『建撕記』は、

「師（道元）初めて浄和尚に見え、浄、一見してはなはだこれを器重す」（延宝本）

と簡潔に記していますが、両者の眼と眼が至近の場で交叉したとき、たちまちに両者のかたい信頼関係が成立したのです。

そのときの感動を「面受」の巻の冒頭に、道元禅師は、

「大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙高台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。そのとき、道元に指授面受するにいはく、仏仏祖祖面授の法門現成せり。」

と「面授」の巻の冒頭に記しておられました。師と弟子が眼力のある場合は、最初の出会いで、師のまなこと弟子のまなこがぴったり一枚になってしまう消息がうかがわれます。「いく千万変といふことを知らず」という「礼拝奉覲」の修行は、師と弟子の眼がぴったり一枚になるとい

う目的のために行ぜられるようにうかがわれる表現ですが、単にそういう有目的な行でもないのです。如浄禅師と道元禅師の場合は、最初におたがいがみたときぴったり一枚になり、それ以後「いく千万変といふことをしらず」という「礼拝奉覲」の行が続けられたのを見落としてはなりません。

母と子の場合

三歳児のY君は、やたらに友だちに噛みつきます。弟のT君は一歳児ですが、これもよく友だちに噛みつきます。弟の方は、友だちの手や足が、口に触れると、咄嗟にがぶっと噛みつくのですから、担任の保母さんは気が気ではありません。両親は、共かせぎで二人とも夜十時を過ぎなければ帰宅しません。きっと、お母さんの肌に十分触れて育っていないから、人肌のぬくもりに飢えていて、そういうぬくもりが口のあたりに近づくと思わず本能的に噛みついてしまうのでしょう。

Y君やT君の心情を思うと、かわいそうな思いにかられます。しかし、噛みつかれる方の子どもは、いい迷惑なので何とかしなければなりません。Y君は、もう三歳になっているのだから、少しは聞き分けが出来るかもしれぬと思って、或る時、友だちに噛みついた時、タイミングよく現場にかけつけて職員室に連れて来ました。「地震かみなり火事おやじ」級の園長イメージを子どもたちは抱いているらしく、悪いことをしたときに私にみつかると大概の子は泣き出します。Y君も例外ではありませんでした。

しかし、職員室でY君と話をしていてすぐに気づきました。叱られているときはもちろんですが、心おだやかになっていろいろ約束ごとの話をしていても、いっこうに眼を私の方へ向けません。キョロキョロとあらぬ方向を視線はさ

まよっているのです。これはどうも新生児のときの授乳から誤っていたのではないかと私どもは想像しました。こういう場合、つい単純に人工栄養を疑うのですが、このごろは、母乳の大切さが喧伝(けんでん)されていて、完全に人工ミルクで育った子は、めったにいません。Y君も、粉ミルクで補充しながらも、そこそこには母乳も飲んで育ったようです。

せっかく母乳を与えながら、お母さんはテレビをみていたらしいのです。新生児には視力があるのかないのか、医学的にはいろいろ論議があるのでしょうが、たとい視力がないにしても、お母さんは赤ちゃんの眼をみながら授乳をするのが自然だと私は思います。ロブソン(一九六七)は、「人生初期の六ケ月以内の見つめ合いが、母子関係に大いに影響する」(『まなざしの心理学』福井康之著、創元社、昭59)ことを強調しているそうです。「目と目の接触は、乳児にとって人間どうしの接触の根源となり、社会性の出発点となる」(同書)らしいのです。

赤ちゃんのつぶらな瞳の奥に、その心を読みとろうとお母さんがつとめながら授乳をしてやらなければ、赤ちゃんは心満たされないのでしょう。見えない目でお母さんの瞳を捜し求めている赤ちゃんの心情はけっしておだやかな筈がありません。お母さんのみつめているらしいテレビの音の方に見えない眼を求めてキョロキョロしている間に、視線の定まらない子どもになって行くのでしょう。

そういえば、母乳だけで育ったという三歳児のA君も、行動が乱暴でききわけの悪いところがあります。私の手もとに呼んで話をしてみるのですが、いつも視線があらぬ方向に向いています。

「おい、A君よ。園長先生の眼をみてお話しをしようや」

と、いえば一瞬、私の方をみるのですが、すぐに目をそらしてしまいます。

このごろとみに多くなった多動傾向の子どもは、総じて視線を合わせて会話が出来ないようです。お母さんが、テレビを見ながら授乳して育てた子のような気がします。

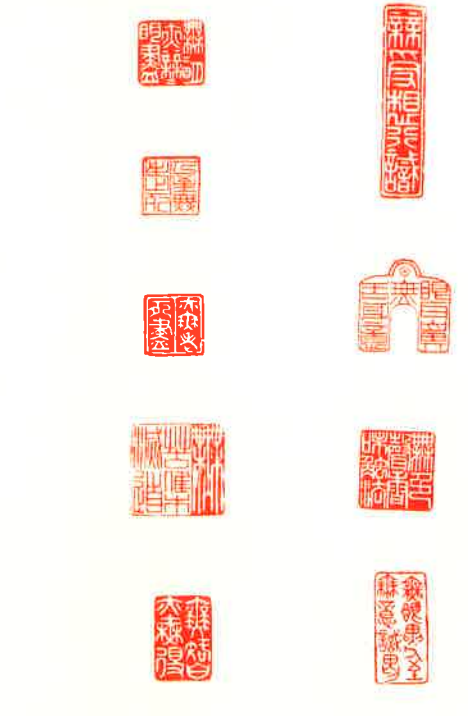
すぐ、友だちに噛みつくY君やT君も、存外お母さんの乳房を噛みついた時、その痛みでハッとしてお母さんがテレビから赤ちゃんに目を移してくれる、その快感が忘れられないままに習い性になったとも考えられます。

いや、事態はもっと深刻なのかもしれません。母親が乳房を中心にした身体接触を十分保障し、ある程度の満足感を乳児に与えていないと、羨望の念が昂じて、乳房を拒否したり、不快、不満の原因を羨望のあまり、すべて乳房に投影してしまい、良い乳房までを駄目にしようと攻撃するようになる、という専門家の研究報告もあります。（『まなざしの心理学』）

Y君やT君の場合は、お母さんが赤ちゃんの眼をみながらゆったりとした気分で授乳をしてやらなかった為に、乳房の肌ざわりと似ている友だちの肌にまで攻撃を加えるようになったと考えたほうがよいのかもしれません。

眼をみあわせることによって師と弟子が心を伝えることの大切さを強調された道元禅師の教えは、現代の育児にも反省を迫っているように思えます。

摩訶般若波羅蜜多心经



歲在辛巳六年初春

雲慧居士尊成壽山善光寺唐刻

善光寺所蔵印材

篆刻『般若心経』開創二十五周年記念

今年、開創二十五周年を迎えるにあたり、記念に、中国人篆刻家・王新徳氏に依頼して『般若心経』を制作していただいた。

王氏は一九五二年天津に生まれ、九歳から楷書を学び、十七歳から著名な古文字学者・康殷氏に師事して、秦漢の古印の模刻、篆書・鐘鼎の碑文を修得し、中国の新聞・雑誌に多くの作品を発表。一九八八年に来日して、各地で実演、講演をしておられる。

『般若心経』について

数多いお経の中で『般若心経』ほど広く親しまれ、多く読まれてきたお経はほかにありません。それは、本文がわずか二六二文字というごく短いお経であるにもかかわらず、その内容はきわめて深遠で『大般若経』六〇〇巻の精髄であり、これを読み、また写経すれば無量の功徳、不可思議の霊験があると信じられてきたからであります。

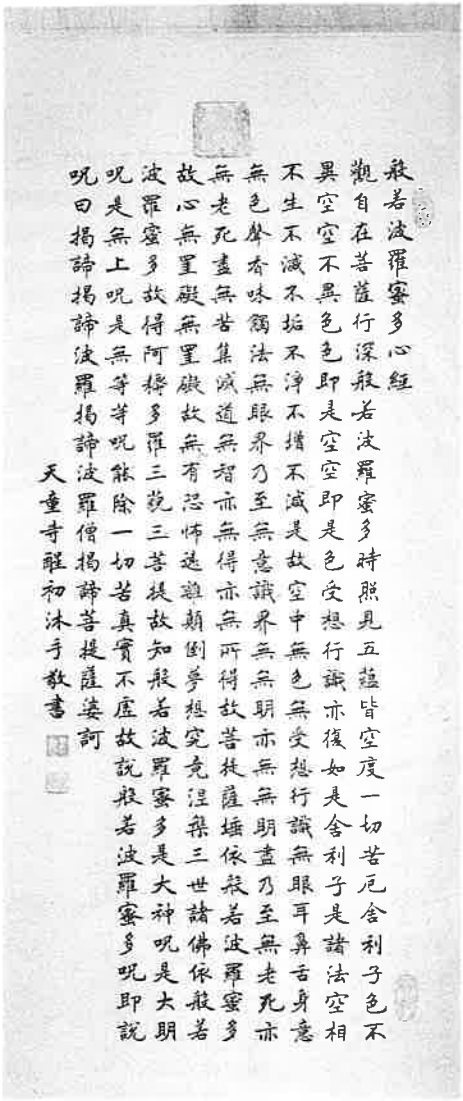
『般若心経』は正式には『摩訶般若波羅蜜多心経』ですが、略してただ『心経』ともいいます。非常に優れた（摩訶）智慧（般若）によって悟りの世界に到る（波羅蜜多）肝心肝要の教え（心経）、あるいは智慧の完成の極意の書ということであります。

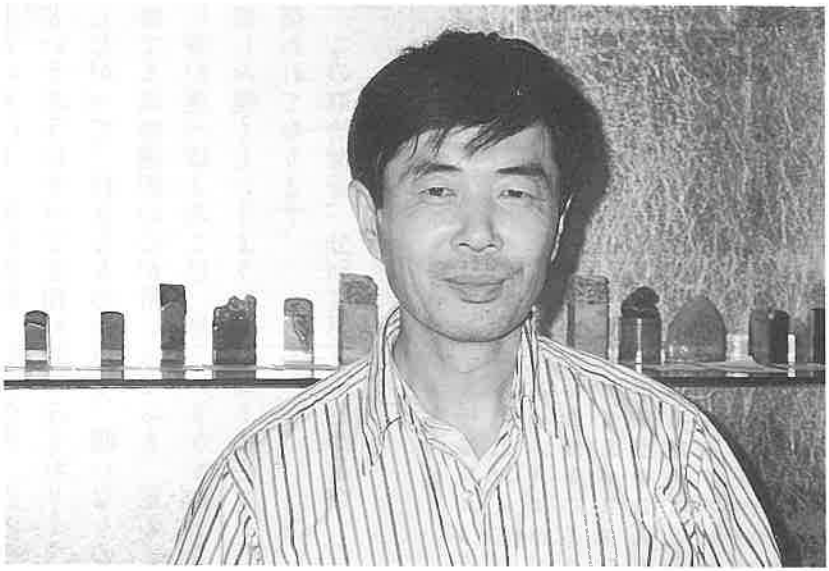
私たち人間は、東といえば西、右といえば左、

上といえば下、是非善悪、利害得失、吉凶禍福というふうにすべてを相対的にみております。したがって、好きなものは取り、嫌いなものは捨てる取捨選択の心が常にはたらき、意のままに事が運べばよろこび、思うにまかせぬときは悲しみ嘆くというように、事ごとに心をとどめ、捉われております。

この取捨憎愛、分別妄想を「色即是空」のふるいにかけて、「空即是色」とクリーンなものにしない限り、心の休まることはありません。したがって、一切皆空の道理を体得して実践すれば、苦しみ悩みはおのずから消滅するのであります。

『般若心経』は、否定的表現を縦横無尽に駆使して、私どもの取捨憎愛の心を徹底的に打破するのであります。そして最後に、その悟りの


般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不
異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相
不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意
無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦
無老死盡無苦集滅道無智亦無得亦無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多
故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若
波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪是大明
呪是無上呪是無等等呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜多呪即說
呪曰揭諦揭諦波羅揭諦菩提薩婆訶
天童寺雅初沐手敬書



王新徳氏

智慧、般若のこころを呪文によって結んでおります。

羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶

ゆきましょう　ゆきましょう　捉われなき世界へ　すばらしいところへ　一人残らず　さとりよ幸あれ

という意味ですが、呪文ですから「羯諦羯諦……」と原語で唱えたほうがよく、いつも唱えて智慧の完成を実践してくださるよう祈念します。

王　新　徳

在日中国書畫篆刻家連盟理事
中国書法家協会会員
北海道篆刻会理事

東郷　敏

出　逢　い（その二）

「先生、ご指導においでくださいませんか」

それから堰切られた水のように、もう止りません。矢継ぎ早に申し上げました。「私共は会社で坐禅をはじめます。先生ご指導においでくださいませんか」と。――これは断じて本心ではなかった、思いもしなかった〈ことば〉が、飛び出してしまった。咄嗟に嘘だとは言えなかった。もう取り返しがつかない。みんなビックリして何も言葉がなかった。先生から、「ハイッ、結構ですよ！　何日何時ですか？」「明日の朝からです」と、また言ってしまった。「ハイ、承知しました。じゃあ、間もなく私も、追っかけて参ります。」先生のご都合なんぞ考えもせず、御尋ねもせず、口走っている。先生も先生で、「Ｎｏ！」とは言わ

ない、実にスムーズである。打てば敏々ひびく。私は前後の見境もなく、独り歩きしてしまっている。そして大変な約束をしようとしている。成り行きに少し気付いて戸惑っておりますと、呆気にとられた先代社長が、「まあ先生、この者たちが無理を申しあげてスミマセン。礼儀も弁えておりません。どうぞ御許しくださいませ。何かとドウゾよろしく御願い致します」と、深々と頭を下げられる。「ハイッ、伺わせていただきます」と、これまた丁重なご返事をいただいてしまっている。これが先代（のち開基）と黒田雲水の歴史的出逢いであり、初めての〈ことば〉の交流であったと思う。

この時点で、私は自分が何を言うているのか、どれ程、大変なことを約束してしまっているのか、わかったようでまだよくわかっておりません。あまりの激変に、心の整理もつ

かず、ほんとうに困りました。勿論周囲はもっと困っていたに違いない。稍あって、今度は先生から、「二、三御尋ねしたいことがあります。明日から、会社で坐禅するとなれば、或る程度、坐禅のできる環境が必要です。タタミですか――、じゅうたんですか――。また坐禅するための道具が最低限必要です。」それもそうだと思った。続けて、「坐布団（坐蒲）はありますか。鐘は、木魚は、線香台は……！」何もかもあるはずがないのに、頭の中がボヤーンとしているところに、止めを刺されてしまいました。「警策と経本は、必要なだけ、私の手持ちのものを持参致しましょう」とおっしゃる。さあーァどうする、事態はどんどん進んでいる、困りました。

「先生申し訳ありません。何もかも衝動的で、私共には御尋ねのようなものは、何にもありません。先程の取決め、二、三日先送り、させてくださいませんか。会社に帰って準備整い次第電話させていただきます――」「じゃあ、私が最小限の準備をさせていただきましょう。大阪で準備できるものを除いて、それ以外の道具は、福井の永平寺門前に、日本一の佛具屋さんがあります。丁度私の知り合いですからそこにお願いして、直接送っていただきましょう。出来るだけ勉強していただきましょう。」なかなかこの先生、経済的なことをおっしゃる。今度は逆に押しまくられているような感じもする。しかし、これは私の気のせいかもしれぬ。何はともあれヨカッタ。ホッとしたところに今度は「何名分ぐ

らい用意致しましょうか？」「えーッ」みんな顔を見合わせてしまいました。

「キミたち、中途半端はダメだョ。やるんなら徹底して、やんなさい」と、先代からハッパが飛んでくる。「では、取り敢えず、五〇名分、いや一〇〇名、あゝ一五〇名分、お願いします」と言うてしまった。ことごとく売上でも読むような具合である。会社の企画担当不在のときでありますから、まことに行きあたりばったり、私共のいい加減さは、どうにもなりません。「ああそうですか。一五〇名分用意するのですネ。参禅者七名分ではないのですネ」と、驚いた様子で、確認のため御尋ねになる。

当然なことです。目先の数字が、あまりに目まぐるしく変化してしまうものだから、一体、どこの、誰を、どこに坐わらすのか、見当もつかない時分です。まだ出逢いから、五分か一〇分ぐらいのことであります。私も、具体的にどうするかという考えなしに走ってしまった結果でありますから、スキ間だらけ。その間、環境の影響や圧力もあって、どんどん変化してしまっていることはどうしようもない現実でした。

今度は、また先代が私共に向って、「キミたち、やるんなら徹底してやんなさい。自己流はいかん。何なら三日位会社を休んでもよいから、必要なものは、全部準備しなさい」と来てしまった。さらに先生に向って、「うちの社員がこんなに、自分から、やりたい、というのを見たのは、先生初めてです。先生の、

おっしゃる通り何でも、全て協力致しますから、ヨロシク、お願いします。」
嬉しいじゃありませんか、先代社長に、こんなに喜んでもらい、協力まで、約束してくださるなんて、思ってもみない成果でした。ですから、即、昇給、ボーナスアップは、間違いなく保証されたも同然でした。
先代は続けざま、「サアー、君の希望通り、先生のご協力が得られそうだ。この期間中、君達がこんなに、坐禅のよさを感じていてくれたとは思ってもみなかった。やっぱり連れてきてヨカッタ。こうして素晴しい先生との出逢いもあったし、僕もほんとうに運がいい。先生どうぞ、うちの社員のこの一生懸命にご協力くださいませ」と深々に、これまた、合掌低頭されるではありませんか。先生も、また、坐り直して合掌低頭、私共もあわてて合掌低頭。私は、この光景を眼の当りにして、これはエライことになってしもうた。私が今どんな立場に立たされ、何をお頼みしたのか、痛い程、わかりかけてきておりました。あんなに否だった坐禅ではなかったのか。雲水が飛び込んで来てしまったために運命が変ってしまった。先代の見抜く力、説得力で、三六〇度ひっくり返ってしまったのだ。それだけではない。弾みが弾んで会社の中まで、坐禅を続けようというのである。それも、本気で御願いしようとしている。
ただ、一時的行事でするような話ではない。本山と同じ様に、毎朝するということまで話は、完璧に進んでしまった。嗚呼！　どうしよう。これはもう悪

（君子は）本を務む（学而第一―2）　徳ある君子というものは、物事の根本に力を尽す。根本さえ確立すれば、自然に道は生ず。（孔子の教えの基礎を成すもの＝務本の学）

夢です。調子がいいと言えばそれまでですが、その為に、これまでどれ程、得をしたか、損をしたか、計り知れません。

私は先代の性格や考え方をだれよりも、よく承知しておりました。中途半端は断じて許さない方でありますから、先のことがどういうことなのか、この話に対する、先代の、這入り方と、口添え表現の在り方は、脇役を装いながら、スッカリ主役になってしまっている。実に巧妙な這入り方である。この事は、全て私自身の意思によって進めたものであり、決して他の意思や、強制が働いたものでないことをしっかりと確認されてしまっている。

〈自主性を尊ぶ〉先代の網に掛かってしまった。先代は常に『本（もと）を務む』（註）ということが根底にあり、いかなることも基本に忠実ということが絶対条件となっている。何度も「自己流はいかんヨ」というのはそのことである。

状況は、やんわりとけしかけられ、微妙に威されたりしているではありませんか。これは、先代の御人柄が充分発揮されたところだと思いました。ここで少し、先代の〈人なり〉に触れて参ります。

先代の人となり

〈教える　育てる〉ということについては、単に一事業家としてではなく、その域を超えて、徹底された御方であります。この思想は多分に、論語の影響を、強く受けられ、自ら〈学ぶ　習う〉ということには、尋常でないものがありました。誰に対しましても『性相近く、習相遠し』(註)、『教へありて、類なし』(註)を旨として、チャンスがあれば、たとえ道端の人であろうとも、誰にでも、公平に、自分の限りを尽して、直言され、教えてあげ、直してあげ、正してあげる。また社員であれば、言うて聞かぬ者には、泣きながら叩いて気付かせてあげる在り方、並の者ではありませんでした。私もすでに父を亡くしてしまっていつだったか、「君の父さんに替わって」と、随分叩かれたことを思い出します。人はいつでも、「素直さを求め、また、親を大事にすること、大事に思うこと」が条件として求められました。この思想に適う人は、会社でも、どんどん上げ用い、その心と実行が乏しければ、その人の可能性を信じ、出来るまで待ち、なかなか、用いようとはされませんでした。

性相近く、習相遠し(陽貨第十七―2)　人間の天性(気質を含めて)は大差ない、似たり寄ったり。ただその後の習慣によって、大きな距離ができてしまう。習慣は第二の天性。人の性行を左右するものである。

教へ有りて類なし(衛霊公第十五―38)　人は教育の善悪によって支配される。貴・賤・老・少・気質・習俗は関係ない。

（今、我等）宿善の助くるに依りて、…（修證義第一章）　前世の善い行いの助けを得て…。宿善＝前世、過去につくった善根功徳。善根が花を開くこと（宿善開発）。

啐啄の妙　雛がかえろうとするとき、雛が内から殻をつつくのを啐、母鳥が外からつつくのを啄という。すなわち、機をみて両者相応ずること。逃がしたら、またと得られない時機。

一樹の陰、一河の流れも、多生の縁　深い佛教的縁観。袖振り（すり）合うも多生（他生は誤り）の縁＝偶然の出会いも前世からと思う宿縁、仏教的深い哲学。

従って、自らには、とても厳しく〈下学して上達〉の精神を貫き、信賞必罰が、見事に出来た方でした。〈人が育つ、人が救われる〉ということであれば、わがことのように思い、相当な、自己犠牲をどんな形でも思いきって払われる方でしたから、そのための、そなえが、いつでもあり、〈教え導く〉ための網が、そこら中に張り巡らされておった様に思います。常に、それをすべきだとは言わず、また思わせず、それをしない訳にはゆかぬ積極的な心づくり、を教えてくれました。運命の糸で、編みあげられたこの網に『宿善の助くるに依りて』（註）、先生も、また、かかってしまわれたのかもしれない。〈世のため、人のために尽くす〉という同じ命運のもとに方向、価値観を共有された、先生と先代。共に投げ合う網に、『啐啄（そつたく）の妙』（註）とでも申しますか、こうして、掛りあう知遇はまことに深い因縁であり〈宿縁〉としか言いようがございません。かつて『一樹の陰、一河の流れも、多生の縁』（註）とあらわされた諺も、こんなことを示唆し教えているのかもしれない。

流れに身を任せ……

偶然ではなかった、この出会いも目に見えぬ、大きな力で、ぐんぐん手繰り寄せられ、思いとは裏腹に事態は進展するばかり。既にこの時点で、私が気付くには、あまりにも遅すぎてしまいました。ここまで来てしまえば、この流れ

に身を任せるより仕方がない、もう行くところまで行くしかありません。しかしです。みんなの顔を見ますと、会社に帰ってからの状況が、私より早くから承知していたようで、二度と味わいたくない、持ち込んでほしくない、切なる願いと、五日間の厳しさが、ダブッているのか顔色が失せ、心なしか、血の気が引いているではありませんか。此奴、もういい加減、引いたらよかろうにとの暗黙のサインが発せられていることに、気付かない私ではありませんでした。

ここまできた、経緯からして、方向を変えることも、逃げるスキも、期待も持てない状況に、少しでも私がたじろぐところがあれば、私を凝視している、先生の目、先代の目が許さない。もうやるしかない。私は腹をくくりました。

「ならば、先生、徹底して取り組みますので、食事の応量器も、作務着も、板から鐘や太鼓までも、大小とりまぜてお願い致します。それから、警策は、三〇本お願いします。私共は、会社の中に寺でも、ぶっ建てるつもりで参りますから――」とここまで来た時、先生も、ことのあまりの急展開と成り行きに、いささか案じられたのか、「まあ最小限、私におまかせくださいませ。本山とも、よく相談した上で、出来る協力をさせていただきましょう。」ということで何とか一件落着。何だかようやく終ったようでございます。

予期せぬ大きな商談が成立したかのように思いますが、一向に喜びが沸いてこない。何の利益にもつながらない、損の道。しかも、何処まで続くかわから

ない、厳しい道。それを、進んで選んでしまったこの現実。僅か、二〜三〇分のことではありましたが、五日間に優るとも劣らず、へとへとに疲れきってしまいました。

お坊さんになる訳でもないのに、事の弾みというものは、恐ろしいものです。でもまあ、よかったことにしよう。ここまで話し込んできたのに、どうしたことか、未だ名も告げず、名も呼び合わず、よくもここまできたもんだ。お互いの、心と心の葛藤が、見えない糸で、しっかり結ばれて、強い絆となっている。特に意識している訳でもないのに、妙に胸が高鳴り、何か気になりかけておりました。そんなころ先代は、笑み満面で、「私が、社長のムラオカミツヨシです。これは息子（現社長）で、常務をしておりますアリナオです。」夫々の自己紹介もおわり、やがて総持寺をあとにした時は、もうあたりは、すっかり人影もなくもとの静寂に包まれておりました。

再び戻るまじき、総持寺であったはずなのに、四季も折々、それから、それへと手を伸ばし、足を伸ばして各本山でとり行われる摂心会に、続けざま参禅するなど、思いもよらず、また、四トン積みトラック一杯の道具が、会社にドーンと送り込まれることなど、さらに、さらに想像だにせず、兎にも角にも下山と相成った次第でございます。

いずれにしろ、黒田先生と会えたことは大きな収穫には、違いなかった。人

ナリス化粧品の成寿殿での講演風景

の出逢いとは、こんなものか、〈葛藤と闘い〉の初体験ではあったが、過ぎてみれば、痛みも、辛さも、遠い過去に、飛んでしまった。何か大きな、山でも越えたような、言い知れぬ安堵感を思う。また一方、思いのほか、意志の弱い、忍ぶ心の乏しい、自分をイヤという程知ることができた。大概のことは我慢できると思っていたのにアテにならないこともわかった。自分以外の人は、驚く程、忍耐強いことも、内心恐れをなした。また、あんな、環境を求めて修行している、変り者がいることもわかった。先生もその中の一人だ。それが偉い人、立派な人だとは、その時、私にはなかなか思うことができなかった。なにもここまでしなくても、人間になる方法は、いくらでもあると、自分に言い聞かせ、一生懸命そう思おうとしていたことも、今は懐しい。坐禅以外なら、これから、何があろうと起こ

ろうと、越えられそうだという、自信と期待と気持ちが持てたことは、何よりも、よかったと思いたい。以来、随分色々なことが期待通りあったが、私は都度、今をその時に引き戻し、辛さを天秤にかけてみる。いつでもやっぱり坐禅の辛さが勝利する。人間、死んだがマシだと思うことは、そう何度もある訳ではないのだが、この習慣のお陰で、自分が救われたと実感した事がいくどかあった。よい尺度を手に出来たもんだ。その上にこの上なき、先生を〈知る〉ことにもなった。これは何とも、ありがたいことだ。さて走りすぎました。話を汽車の中に戻します。

まあ、色々なことを思いながら、車窓に目をくれていますと、いつの間にか窓ガラスにもう一人の自分を見てしまった。その男は、また、頭の中が、突然パニックに陥っておりました。どう考えても、二つの大きな問題と心配事を抱え込んでしまっている。一つは、いよいよ会社にまで、坐禅を持ち込んで、毎朝となれば、ただごとではない。今一つは、一体費用が、どれ位かかるのか親方日の丸になってしまい、安心して確認もできていない。全く見当もつかない。予算と実績を、毎日やかましくしている経理責任者の顔が、引きつって見える。

どうしよう。電車の中では、みんなが、大丈夫かなあ、ほんとうに明日からまた坐るのか、まだ坐るのかと、これまた、徒事ではない。考えてみれば、無理もない話だと思う、まっただ。

先代と常務は、先程から、もうホロ酔い気分である。小田原駅で買い込んだちくわをポンポンと投げてくださる。ルンルンと、いい気なもんだ。今まで見たこともないエビス顔なのだから、たまらない気持であった。安堵と不安の中で、引くに引けず、帰るに帰れず、あの時の心境今でも忘れることができません。〈ウソから出たマコト〉とは、こんなことか。

先生は昭和三十七年から三十八年にかけて、全国托鉢行脚して、修行から修行、荒行の真直中に私共は、タイミングがよくも悪くも、出くわしてしまったらしいことがあとでわかった。食うや食わず、極限からの生還を遂げたばかりの野人、黒田雲水なのである。さらに承りますれば、再々重々にも、弟を思う美しいばかりの兄弟愛。将来の大を願って、アメリカ修行への道を、ことごとく砕いてくださったらしい、アメリカ禅センターの兄・博雄師。ために念願の渡米一向に実現せず、断られてばかりの御気持、決して穏やかでなかったこと伺えます。いささかその腹いせを、素人の私共に、ぶっつけておいでだったのかもしれない。まあ、いずれにしても、はげしい出逢いであったことは確かだ。

人生は、まことめぐり逢い、出逢いであると言う。いつ何処で、どんな人と

めぐり逢うかによって、人生は決まってしまう。先代社長しかり、今またこの御方に『遇い難くして　いま遇うことを得たり』わが師、わが友、黒田武志雲水である。

道元禅師の『まこと人と逢ふなり』（註）とは、こんなことを謂うたのかもしれない。これが私共と、成寿山善光寺・黒田大圓和尚との、熱く、燃えた、第一日目であり、今日の第一歩となったのでございます。

（第一部　完）

人と逢うなり　中国でご修行中、最高の名僧・如浄禅師に逢ったことが運命を変えた。その衝撃を「人と逢うなり」と述懐された。

物と心の結び目

「亡　禅　尼」

東野光生

うち続く梅雨の曇天の下、仕事部屋に活けた大輪のあじさいの花が美しい。そのみずみずしいぬけるような青さを眺めていると、季節が花をもたらすのではなく、花が季節をもたらす、それが本当のようにかんじられる。

あじさいをまえにして、ふと昨年亡くなった一人の老禅尼のことを想った。

黒田嘉。法名安徳院殿嘉祥妙慶禅尼。

禅尼が逝去されたのは九十歳だった。葬儀は栃木県大田原市の光真寺で行われた。

葬儀の儀記のしるす禅尼の略歴は以下の通りである。

●明治三十六年　長野県井上村(現須坂市井上)の安養寺にて前角朴翁・安意の長女として生まれ、後、須坂興国寺にて育つ

●大正九年　長野高等女学校(現長野西高等学校)卒

●大正十三年　女子美術学校(現女子美術大学)卒

●大正十四年　光真寺三十六世黒田白純と結婚、

男子八名出産。以来光真寺復興発展に貢献

●昭和二十四年　栃木県西那須野町那須寺の開創に貢献

●昭和三十年　東京都品川区桐ケ谷寺開創開基

●昭和三十九年　学校法人ひかり幼稚園創設

●昭和四十四年　横浜市港南区善光寺の開創に尽力

●昭和四十五年　米国ロスアンゼルス仏真寺開基

●昭和四十六年　米国仏真寺開単式参列・メキシコ等歴訪

●平成三年　静岡県小山町不二寺開基

●平成四年一月三十日　行年九十歳にて逝去

死の前年までいくつもの寺の開基に携わった禅尼の生涯は、余人の及び得ぬまことに有為なものだった。そして会葬者の誰もが心より逝去を悼む盛大な葬儀は、故人の人柄をよくあらわしていた。

禅尼は草花が好きだった。地元にあじさい公園を作ったのは、昭和四十二年のことである。だが、これは儀記にしるされた略歴記載事項からは漏れている。

公園を作り、たくさんのあじさいを植え、それを育て梅雨時の園内を清々しい青に染め上げるそのことは、寺の開創開基にくらべれば、禅尼にとって、いかにも何気ない無為の行為だったのかもしれない。人は逝き、公園には今年もあじさいが咲く。

〈まさにしるべし。
空は一艸なり。
この空かならず華さく。
百艸に華さくがごとし。〉

禅尼の生涯にひとむらのあじさいの花を重ね合わせてみる時、この道元の言葉は胸を打つ。

禅尼は横浜の善光寺住職黒田武志老師の御母

堂である。黒田老師は私がしばしば親炙の機会をいただく傑出した禅僧で、善光寺は四半世紀前に老師が無一物から興したものだ。

私はあじさいの傍で、穏やかに微笑む柔和な色白の老師の顔を思い浮かべた。

老師は仏教を通して、国際社会の安定と世界平和の実現を目指す法の実践家である。老師が理事長をつとめる善光寺海外留学僧派遣育英会の着実なすぐれた育英活動については、知る人も多い。ひとつの寺が私財をなげうって独自に運営するという、他に例を見ないこの育英会の交流は、すでに十四ケ国に達する。宗派や国籍、男女の別を問わないその留学生の数は数十名をかぞえる。

留学生の中には、フランスやイギリスに赴く者がいる。スリランカの大学へ行く者がいる。アメリカの禅センターへ足を向ける者がいる。また反対に、日本の大学院で学ぼうとする韓国からの留学僧がいる。内戦の続くカンボジアで孤軍奮闘する者がいる。

社会の未来に向けた展望のかなめは、いつの世にも教育と人材の育成である。私は世界平和を目指した人づくりに一身の情熱を傾ける老師の洞察のちからに、心から敬服する。そして老師と親しく接するたびに、その炯眼を実践しつづけようとする生涯の誓願にたいして、畏敬の念を深くする。

老師はかつてタイのワットパクナムで安居生活を送り、日本中を乞食行脚して廻った人である。ひとつの育英活動を通して世界の未来を見据える老師の国際的視野は、虚飾を払ったその謹厳な修行の日々の培ったものだ。

私は目の前のあじさいの花を眺めながら、老師がかかえた生涯の誓願、その人生の拘泥を想った。

一人の有為の若者を育てることは、一本の草

を育てることだ。そしてそこに花を咲かせることだ。

〈空は一艸なり。
この空かならず華さく。
百艸に華さくがごとし。〉

空を一草と観ずる心は、老師にとって、その生涯の誓願と実践の成就にほかならない。

私はそんなことを考えながら、ふと老師が禅尼と重なり合うのをかんじた。そして我執を離れた老師ののっぴきならぬその人生の拘泥が、私の内で、あじさい公園を作った禅尼の何気ない無心の行為とつながっていくのをかんじた。

老師は今後この現世という無辺の公園に、どれほど多くの人の草を植えつづけるのであろうか。そこにどれほど多くの花を咲かせるのであろうか。

私は禅尼と、生前ついぞ謦咳に接する機会を持たなかった。私の知るその篤実な姿は、葬儀で立てかけられた黒いリボンの巡る一枚の写真だけだった。

だが、私は目の前のあじさいの花によって、そしてまた老師の生涯の誓願とその精力的な活動によって、禅尼がゆくりなく自分の内で生きはじめるのをかんじた。

故人はひとつの機縁によってよみがえり、その在りし日のいのちを、つと今に現出させる。死者は人を訪い、そこにいのちの灯をともすのだ。

禅尼はどんな時にも黒衣のように目立たぬ、控え目な人だったという。人にたいしてつねに感謝を忘れぬ、やさしく慈悲深い人だったという。

あじさいの花は七色に変化するといわれる。そのぬけるようなみずみずしい色が茶ばみはじめる時、代わりに青いそらが顔を見せ、夏もま近い。

（日本芸術新聞・第83号より転載）

インドネシアの旅
ボロブドールを中心にして

ニューヨーク州立大学
政治学教授　伊藤　博

一九九一年の夏、横浜善光寺の黒田方丈の勧めでインドネシアに三週間訪問することができました。目的はジャワ島中央にある仏教遺跡を見ることでしたが、その他にもスラウエシ島のトラジャ部族の葬儀を見たり、トラジャアラビカコーヒー農園等も視察することができました。

インドネシアの首都ジャカルタとバリ島には十四年前に訪れたことがあるので、ジャカルタでは前と同じホテルに泊ることにし、ホテルの主人にその旨伝えると、大歓迎してくれました。彼の親はオランダ系ユダヤ人で、第二次大戦中は家族全員、日本軍の捕虜収容所に入れられ終戦を迎えたそうです。終戦と同時に暴徒化し、

荒れ狂ったインドネシア人が収容所に押し寄せて来て、無法状態になったのを、日本兵が無防備の女子供を護ってくれたので、日本人を恨めないとも漏らしていました。インドネシア独立後、彼は帰化してホテル業を始めたが、観光産業しかないバリ島の人達に職を与えるだけでなく、ホテル業の教育を受けるためにも、バリの住民を雇い、ホテルの雰囲気もバリ風にしたそうで、彼の性格の一端を垣間見ることができました。

インドネシアは日本以上の人口を持つ国で、しかもその九〇パーセントが回教徒です。ユダヤ教徒はインドネシア全国で五〇人位しかなく、ユダヤ教の教会もなく、牧師もいないそうです。数年前ジャカルタ近郊のユダヤ教徒十数人を集めて、オーストラリアから牧師を招いて、このホテルの一隅で初めての礼拝を行ったそうです。その時の写真や書き物を我々に見せて、熱の籠った調子で、いかにこれから彼の努力でユダヤ教会を作りたいか話しておりました。回教徒以外の宗教に対する政府の弾圧はないが、中近東のアラブとイスラエルの紛争の余波として、インドネシアの回教徒の中にはユダヤ人を敵視する者もいるので、表立って活動はできないし、たとえそれが可能でも、今後それ程ユダヤ教信者が増えることはなかろうとの予想です。

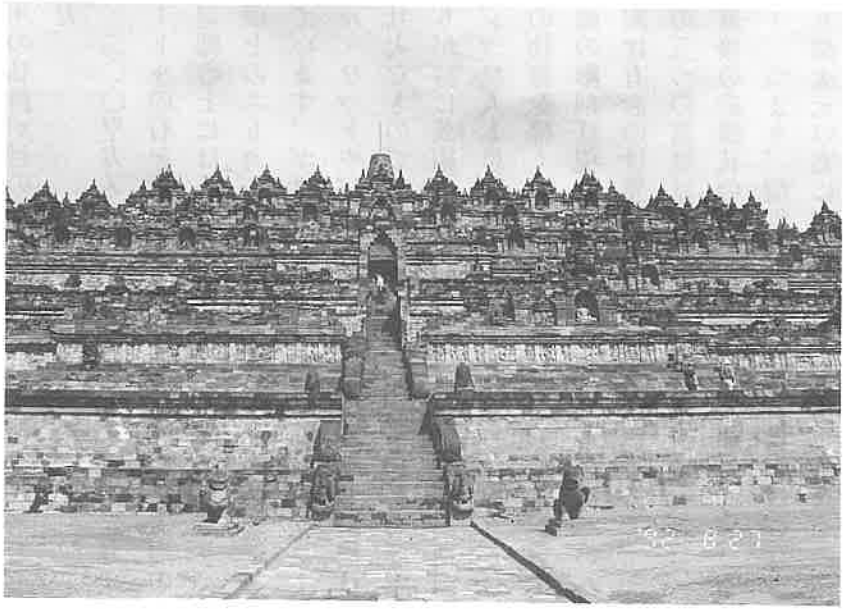
ボロブドールの仏跡

ジャカルタから飛行機で一時間程行くと、日本でしたら京都のような古都ジョクジャカルタに着きます。そこから四〇キロ離れた所に、八世紀後半に建てられたというボロブドールがあります。ボロブドールは丘の上の寺院という意味で、まさしくジャワ中央部のケドマー平野にある小高い丘の上に建ち、高さ三一・五メート

ルの仏跡が目の前に広げるパノラマは圧巻でした。

二〇〇平方メートルの基盤の上に六万立方メートルの石を積み重ねてあり、六つの正方形の廻廊の上には三つの円形の基壇が載っており、頂上のストゥーパには四方からの階段で繋がっています。ボロブドールはその外観もアンコール・ワットやビルマのパガンの寺院群と同様に壮大なものですが、各基壇の側面や廻廊の浮彫りが特に芸術の高さを物語っています。当地のジャワ人と思われるふっくらとした体つきで仏の物語を描く様に彫られています。一番低い廻廊の彫刻は現世の欲望を表わし、次の四つの廻廊は有形の世界で権力の象徴を描いており、次の三つの基壇は無形の世界で無権力を表わし、最後の釣鐘状の大塔は無の世界を表わしています。つまり、現世から始まり、日常の善行はより高次元の姿に変身して報いられ、情欲や欲望

東側から見たところ



の世界での悪行は対次元の変身により罰される
という仏教徒の極楽である涅槃に到達する過程
を一連の絵巻風に石に画いた宇宙の未来への構
想として考案されています。この意味でボロブ
ドールは宗教的にも芸術的にも記念すべき遺跡
だと思います。

全部歩くと五キロもあり、時計の針の方向に
歩くと物語が解るようになっています。狭い通
路を廻ると一五〇〇枚程の石の浮彫りが一千年
前のジャワ人の生活様式をよく描いています。
円形の基壇には七二の仏塔が載っており、その
中には一つづつ仏像が安置されています。特に
仏塔の一つには手を延ばして内部の仏像に触る
と縁起が良いそうで、観光客が沢山仏塔に手を
入れていました。最上段にある仏塔には何も入
っていません。どうして中に仏像が入っていな
いのか、かなり論争されておりますが、一説に
依りますと、その仏塔の側に未だ完成していな

い、目も鼻もない仏像が見つかり、しかもその大きさが調度この仏塔に入る位だったので、多分どの様な顔の仏像にするかを決定しかねて安置しなかったのではないかといわれています。そして、この顔のない仏像は近くの博物館に飾ってあります。又、ボロブドールには全部で五〇〇体の仏像がありますが、その中、二〇二体は頭がなくなっています。真偽の程は別として、地元のガイドの話では頭は特別なものと考えられ、その中に金が隠されていると思われて盗まれたそうです。

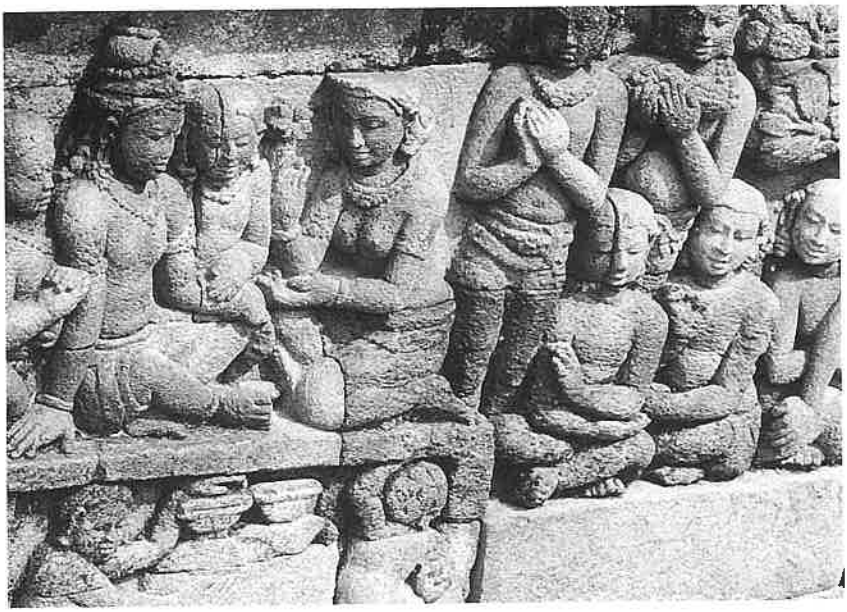
古代インドネシアにいつ、どの様にして仏教と、それよりも古いヒンズー教が入って来たか明らかではありませんが、最古のヒンズー教の絵はスマトラとスラウエシ島で三世紀の物が見つかっています。一つはっきりしている事は、七世紀にスマトラを基点として起ったスリブイジャヤ王国がインドネシア仏教の中心地だった事です。今でもスマトラ島の一部に仏教が残っているそうです。インドのデラマンが貿易商人達に続いて伝道師としてインドネシア半島に入り、サンスクリットを伝えたともいわれていますし、又古代インドネシアの貴族達がインド文化に魅され、しかも、ヒンズー教と仏教の神秘性と秘術の力を借りて、地元の支配階級の政治を裁可するために、デラマンを宮廷に招いて文化の伝道に一段買ったのではないかともいわれています。いずれにしても、日本への仏教の伝来の動機にも似て、インドの宗教（ヒンズー教と仏教）の文化的要素が優れた影響力を及ぼしたのは古代インドネシアの宮廷と政治を司る人達に対してであった事に違いありません。

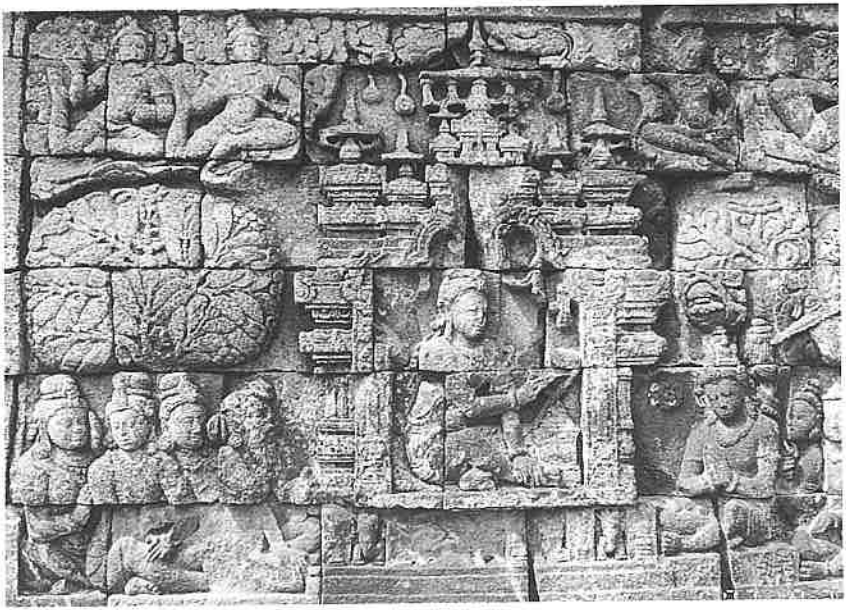
ボロブドールはインド以外の地で見られる一番大きな仏跡ですが、いつ、誰が、どういう目的で建てたかは謎に包まれています。有力な説に依りますと、中央ジャワにあったジャイレン

ドラ王国のサマラツンカ王が、八世紀の後半に建て始め、少なくとも八〇年位かかって彼から三代目の王が仕上げて今の形になったそうです。

エジプトのピラミッドは王家の墓として造られ、メキシコのピラミッドは神に捧げる祈りと生贄の祭壇として使われましたが、ボロブドール遺跡には穴もなく、専ら、柔らかい石を積み重ね、その上に彫刻をした大乗仏教の教えと、祈る目的の為に建てられたといわれています。最上位のストゥーパは修行者が僧侶になる儀式の時使われましたし、ボロブドールを支えていた仏教集団は初期のタントリック教徒か、バジラズナ教徒で、彼等はマンダーラを通り抜ける為に使ったらしいとも考えられています。当時は文字の読める人は極く少数の上層階級に限られていたので、絵物語にして仏の教えを表す事は、仏教普及に大きな意義があったものと考えられます。同じ様な事はイタリアのフィレンツエ（フローレンス）の大寺院の大扉に彫られたキリストの物語にもいえます。大衆伝道の一手段としての役割は大きかったと思われます。ボロブドールは時計の針の方向に廻って各基壇を上って行きますが、階段は小柄なジャワ人にとって、一段一段がとても高くできていますが、ガイドの話では極楽に行き着くのは楽でなく、努力しなければ到達しないという教えが入っているためだそうです。

ボロブドールは西暦一〇〇六年のマラピ山の噴火により破壊された石の多くは河原に飛び散ってしまい、十八世紀まで土の中に埋まっておりました。一八一四年に英国の総督ラフレスが遺跡を発見し、修復に努めました。一九〇七年から四年がかりで、オランダ政府も本格的な修理工事に携わりましたが、それでも排水設備がなかったのと、盛り土の地盤沈下の為、浸食作





用が激しく、一九七三年から十年がかりで、国連のユネスコの援助で基礎工事からやり直し、排水設備としてパイプを入れたり、各段の間に鉛の板を入れたりして、又特別な接着剤で石を貼り合わせ、やっと四三メートルあった遺跡は三一・五メートルの点で沈下が止まりました。この修復工事には日本も参加したそうです。遺跡の囲りには多くの木々が植えられ、公園の様に整然としています。荒野に苔むした遺跡を想像して見に来る人の中には余りきれいに修復されたボロブドールにがっかりする人もありますが、インドネシアだけでなく世界の文化遺産として、毎年何百万人もの人達が見学に来るためには、又後世に永く残すためにも、過剰修復も仕方のない気がしました。

メンデット寺院とパウォン寺院

竹薮の中の寺院という意味のチャンディ・メンデットはボロブドールから東に一キロ程離れた所にあります。ボロブドールが建築学上ストゥーパと呼ばれるのに対してメンデット寺院はチャンディと呼ばれています。チャンディの語源は死の女神からきているともいわれて、仏教の習慣では一種の崇拝の儀式に使われ、ヒンズー教では王や聖人の遺品を保存する神殿として建てられました。ボロブドールと同時期の八世紀後半に建てられ、内部には三つの仏体が安置されています。特に中央の仏体は三メートルもの高さで、いつもの座った姿でなく、両足で立った姿勢でいます。寺院の外側にはヒンズー教とジャワ芸術の最高峰をいく浮彫りがほどこされています。メンデット寺院よりも小さいがボロブドールの一隈をなし、前寺ともいうべきパウォン寺院は灰という意味で、亡くなった仏教徒の宗教上の儀式、おそらく古代王家の葬儀に使われたものと思われます。

私達はこの他にも、プランバナンを始めとするいくつものヒンズー教の遺跡を見て来ましたが、建築や彫刻から見て、ヒンズー教と仏教を区別するのがとても難しいことがしばしばありました。事実、プランバナン寺院もボロブドールより五十年遅い九世紀の中頃に造られており、しかも両者は四〇キロしか離れていない事から見ても、二つの宗教が古代インドネシアの為政者達には現世と後世の目的のため神秘性と秘術を兼ね備えており、互いに類似して見えたものと思われます。

バリ島に残っているヒンズー教も古代原始宗教と混ざっており、インドのものとは全く異っており、インドネシアの国教とも思える回教にしても、中近東、特にイラン回教とは思想・形態が変っています。おそらくスマトラの一部に残っている仏教にも同じ事が言えると思われますが、今から千年もの昔に、ボロブドールの様な違大な遺産を生んだインドネシア半島の人々の宗教心は今でも生きている様な気がしました。二つの宗教を建築学的、芸術的に組合せたのも創造力の豊かさを反映している事になります。

トラジャ部族の葬儀

ヒンズー教や仏教が入って来る前のインドネシアの宗教は先祖崇拝を中心とした自然神を信じる原始宗教でした。しかもプランバナンのヒンズー教やボロブドールの仏教の中にはこの原始宗教が根強く残っており、これ等を区別するのも難しい程でした。私達はジャカルタから飛行機で一時間程でインドネシアの五番目に大きいスラウェシ島、南部の中心地であるウジャンパンダンに行き、そこから乗合バスに十時間程揺られて山岳地帯に住むトラジャ部族の集落に着きました。歴史的には東南アジアの海洋民族

シンノウの花が
春を運んで来た。
三喜龍

が移住して来た人種で、今でも舟型をしたすばらしい家の屋根を特徴としており、死後はこの船で天国に行くという伝説を信じています。トラジャ部族の村はかなり険しい山の中で比較的外の世界から隔離されていたので、部族の八〇パーセントもがオランダの宣教活動でクリスチャンになったにも拘らず、未だに密教的な祖先崇拝を行っています。特に興味があるのは葬儀です。

死者が裕福だったか、社会的地位が高かったかどうかにより規模は異なりますが、典型的な裕福な家族の葬儀を見る事ができました。家族のおじいさんが亡くなったので、遺体を木の箱に入れ、家族と一緒に家に置いてあったそうです。その間、豚か鶏をいけにえとして殺し、密葬を行いましたが、未だ死んだとは看做さないそうです。その家の格に見合った立派な葬式をしないと、死者は天国に行けず、この世に留まって、生きている人々を苦しませると信じていますので、葬式の費用が溜まるまで家の片隅に安置されています。今はホルマリン注射で腐敗を防げるので良いのですが、昔はかなり悪臭がひどかったらしいですが、不愉快な顔でもすると、死者に大変失礼になるといわれたそうです。

家の格に見合ったお金が溜まった時点で、何十頭もの水牛や豚を殺し、何十人、時には何百人もの客に御馳走します。遠来の客には竹の館を造り泊めて持て成します。いけにえにする前には闘牛や闘鶏も行い、毎夜特別な歌と踊りで死者を慰めます。私達もタバコを二ケース買って喪主に贈り、葬儀を見せてもらいました。この儀式は時には一週間以上も続くそうです。

最後に遺体は正式な棺に入れられますが、棺は特別誂えの繊細な見事な色彩と模様に塗られています。そして式場の中心に建てられた特別な櫓の上に祭られ、ここからは悲しみの儀式と

いうよりは、死者が天国に行けるという楽しい行事に変ります。賑やかなお祭りになります。客達の前で水牛の喉を刀のひと振りで切りいけにえがささげられ、後で皆に分けて御馳走します。一番初めに刺された水牛は足を縛っていたロープを切り、私達の方向に突進して来て、危うく惨事を招くところでした。

その後、埋葬の場所へ全員で行列しますが、洞屈の中が普通です。死者の地位が高ければ高い程、人の手の届かない、何者にも荒らされない所に棺を安置します。それから洞屈の外壁に棚を作り、その上に死者の等身大の木彫りの人形を飾り、公式な葬儀が終ります。その後も一週間位家族が入り替り食事や花の供物を持って墓に訪れます。

収穫の後は金銭収入があるためか、我々の行った七月から八月にかけては、この様な立派な儀式を行う家族が多く、道を歩いていても、客のための特別作りの竹の家が目につきました。

又、式に呼ばれた人達が地元のお酒を一メートル以上もある竹筒に入れて何本も背中に担いで行く姿も見かけました。

インドネシアは豊かな資源と文化を持った発展途上国で、日本の対東南アジア政策上、一番力を入れている国です。遅かれ早かれ、インドネシアにも産業化・工業化、そして物質文明の波が押し寄せて来る筈ですが、その時、伝統と歴史の遺産が失われない様に願って、私達はインドネシアを離れました。

ボロブドール

円壇テラスのストゥーパと頂上のメインストゥーパ

全　景

仏陀像

第一回廊の主壁上段
摩耶夫人がルンビニー園へ向かう図

回廊の両壁を埋めるレリーフ

トラジャ

トラジャ部落の埋葬

トラジャ部落

インド留学記

その11

二度目のインド国内旅行（3）

大学教授
沢岩
金助島

ベナレスのチベット人デモ隊

残されたわれわれ男性四人は、その日午前一一時のバスでベナレスへ向かう。堅い座席で半日ほど揺られて、いいかげんお尻が痛くってしょうがないと思うころ、夜の一〇時にベナレスに到着。その夜は、安宿（Herman Hotel）に、四人相部屋で泊まる。一人三ルピー五〇パイサ（一〇五円）だ。

翌三月九日朝八時半に起き、新婚旅行中の義理の妹夫妻に会いに、ホテル・ド・パリス（Hotel de Paris）へ。昔は藩王の迎賓館だったところとかで、広い庭園のある立派なホテル。今の僕にはまったくの別世界だ。朝飯だけを御馳走になって早々に退散。近くの宿探しに出かけ、政府経営の安宿（Traveller's Lodge）に決める。午

インド全図およびその周辺地図

後は乗合観光バスで、サールナート（鹿野苑）へ。ここはブッダ・ガヤーで悟りを開かれたお釈迦さんが、はじめて説教された（初転法輪）ところだ。やはり観光バスだと印象が薄くなる。ともかく型どおり一回りして再びベナレスへ。夕方はまたホテル・ド・パリスで豪勢な食事。当然おごりだ。帰りにはおみやげのナポレオンまでもらってしまう。

翌日（三月一〇日）はなんだか疲れが出て一〇時起き。ガンジス河近辺を一回りする。狭い路地から路地へ、寺院の間を通り抜けるようにして、ガンジス河へ。沐浴風景を見ても、河原の死体焼き場で死体を焼いているのを見ても、「ああ、やってるな」と思うだけで、なんだか何も感じない。ぶらぶらしていると、途中でチベット人デモ隊に出会う。反中共デモだ。今の日本で見かけるメーデーなんかの、静かなデモとは相当雰囲気が違う。もちろん日本でも、七〇年前後には、全共闘が街頭でジグザグ・デモをやって機動隊とぶつかるということもよくあった。だがそれともどこか違う。一人一人が拳をふりあげながら、大声で叫びつつ、進んでいく。一人一人から「俺たちは本当に怒っているんだぞ」という気迫がひしひしと伝わってくる。当然交通はマヒだ。彼らはどうしてそんなに怒っているのだろうか。

中共がチベットに侵入したのは、一九五九年のことだった。それまでのチベットは、ダライラマが国の政治的頂点（王）でもあり、宗教的頂点（法王）でもある、神権政治の仏教国だった。中共の侵入により、ダライラマ一四世は国を追われ、多くの僧侶とともに貴重な経典類をたずさえて、インドに亡命した。そして今では、インド西北部のダルマサーラに住んでいる。

そのおかげで、そののちチベット仏教研究は急速に進んだ。というのは、それまでチベット

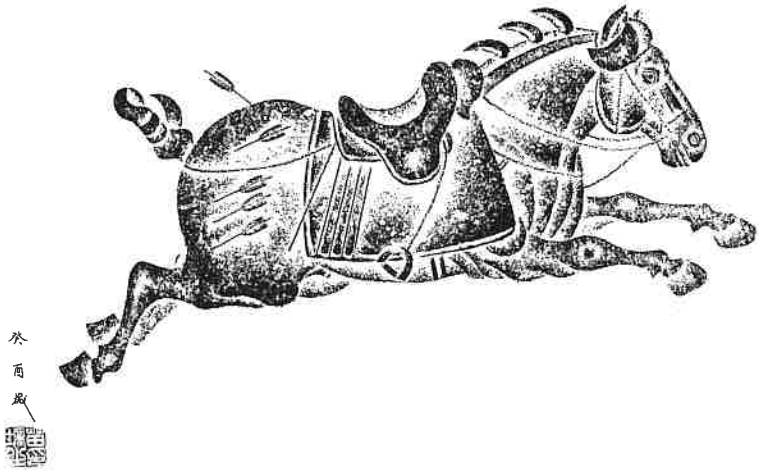
はほぼ鎖国状態で、チベットに入るには決死の覚悟がいったからだ。日本人でも、河口慧海（『チベット旅行記』旺文社文庫）、多田等観（『チベット』岩波新書）、青木文教（『秘密の国西蔵遊記』中公文庫）などが、チベット仏教などを学びにチベットに入った。だがそれらはすべて、ばれれば殺されるかもしれないという危険を冒して、チベット人に化けて潜入したものだ。それが、チベット学僧たちのほうが、世界各地に亡命して直接チベット仏教を教えるようになり、またこれまで目にすることのできなかったチベットの経典類が彼らとともに国外に持ち出されて、公刊されるようになったのだ。だから、そののち研究が急速に進歩したのも当然のことだろう。

だが今問題なのはそういうことではない。今ここで亡命したチベット人たちが、怒りに満ちて反中共デモをしているということが、問題なのだ。大学でチベット語を学んだとき、現代チベット語の読本として、チベットの新聞記事から抜粋されたテキストを読んだことがある。そこには、中国の人民解放軍がチベットを解放したことで、これまでダライラマを頂点とする僧侶たちに搾取され続けてきたチベット人民の生活が、いかに自由にかつ豊かになったかということ、それを実現させた毛沢東思想がいかに偉大であるか、また解放軍兵士とチベット人民がいかに仲良くやっているか、などというようなことが延々と書いてあった。中国の侵入によって結果的にはチベットの一般の人々の生活が良くなった。そういうことは確かにあるのかもしれない。しかしそのことが、これみよがしに新聞記事として次々と掲載されていくという状況は、いかにも異常で、うさんくさい。チベット人と中国人（漢民族）とは、民族も異なるし言葉も文化もまったくといっていいほど違う。ま

た歴史的にも、チベットは、七、八世紀に吐番王国を作り上げて、中国と戦って勝ったことさえある国だ。そしてその後も、神権政治の前近代的国家という形ではあったが、まがりなりにも一つの国を形作ってきていた。そこに中国が侵入してきたのだ。そして今ではチベットは、中国の自治区の一つだということになっている。チベット人の子供たちは、いま学校で、チベット語以外に中国語も学ばなければならないはずだ。人民解放という大義名分があるにしろ、やはりこれは侵略だと言うべきだろう。だから彼らはこんなに怒っているのだ。こんなことをぼんやり考えながら、チベット人のデモ隊が目の前を通り過ぎるのをながめていた。

仏陀の悟りの地ブッダ・ガヤー

一〇日の夜に汽車でガヤーまで行き、その日はそこに泊まり、翌朝一〇時に乗合リキシャで、



ガヤーからブッダ・ガヤーへ。ネーランジャラー（尼連禅）河沿いに約一〇キロの道のりを、リキシャはのんびり走っていく。すぐにブッダ・ガヤーに到着。ここの中心はもちろん、今から千五百年ほどまえに、仏陀がその下で悟りを開いたとされる菩提樹（成道の木）だ。菩提樹の下には、仏陀がそこで禅定にふけったとされる赤砂岩板の金剛座がある。その樹の下に立つとさすがに感無量だ。個人的には自分のことをそれほど熱心な仏教徒だとは思わないが、やはり仏教徒の血が色濃く流れていたのだ、と思わざるをえない。菩提樹の隣には、高さ五三メートルの大塔マハーボーディ寺院がある。この大塔は、いくども再建と改修を重ねたものだが、もともとは、インドに一大帝国を建設し仏法に基づいて国を統治したアショーカ王によって、紀元前三世紀に建てられたものだ。

この仏陀の悟りの地にはまた、仏陀の遺徳をしのんで建てられたアジア各国の寺院がある。まず上座（小乗）仏教圏からはスリランカ寺院とタイ寺院が、次に大乗仏教圏からは、中国寺院と日本寺院が、そして密教圏からはチベット寺院とブータン寺院がというように。このようにアジア各国から、仏教徒たちがこの地を慕ってやってくるのは壮観だ。インドで発生した仏教が、長い年月をかけてアジア各地に広まったのだ、ということがまさに実感として迫ってくるというところがある。しかし肝心のインドでは一三世紀に仏教は滅びてしまった。今ではインドは、ヒンドゥー教徒が人口の八割を超すヒンドゥー教の国だ。

この日の泊まりはまた政府経営の安宿（Tourist Bungalow）。相部屋で、まるでハンモックのようなベッドに寝袋を広げて寝る。だが宿代は格安だ。なんと一泊五〇パイサ（一五円）。私がインドで泊まった最安の宿だった。

◇第十回育英生決定◇

横浜善光寺留学僧育英会は、第十回育英生を左記のとおり決定いたしました。昨年、すでに嘉木揚凱朝氏、プラ・シャーンシャイ・キッティワンゾー氏、脇領至氏の三氏が決定し、派遣先に留学しており、このほど新たに七名を認定しました。本年は育英会創立十周年にあたり九名が決定。これで関係国は十六カ国、育英生は五十六名となりました。

氏名	国籍	派遣先	備考
嘉木揚凱朝	中国	日本(愛知学院大学)	ラマ僧侶
プラ・シャーンシャイ・キッティワンゾー	タイ	スリランカ(オプン大学)	タイ僧侶
脇領至	日本	インド(プーナ大学)	真言宗
ディリップ・クラール・バルア	バングラディシュ	日本(愛知学院大学)	
サンガ・ラタナ	スリランカ	日本(駒沢大学大学院)	マヌラーダプラ・ビク大学助教授
モルテン・シュルター	デンマーク	日本(駒沢大学大学院)	イエール大学大学院博士
碇雄神	日本	タイ(ワット・パクナム)	青岸渡寺勤務
孫順鎬	韓国	日本(佛教大学)	
金英子	韓国	日本(龍谷大学大学院)	

永平寺貫首　丹羽廉芳禅師さま御遷化

大本山永平寺貫首・丹羽廉芳禅師さま（曹洞宗管長・横浜善光寺留学僧育英会名誉顧問）が九月七日午前一時十五分、老衰による心不全のため、静養先の静岡市・洞慶院でご遷化になった。八十八歳だった。逮夜は十二日午後六時から、密葬は十三日午前九時から、いずれも福井県・大本山永平寺で、宮崎奕保新貫首の導師により営まれた。

明治三十八年二月二十三日、静岡県修善寺町の生まれ。十二歳の時、洞慶院の丹羽仏庵和尚について得度し、二十二歳で仏庵和尚の室に入って伝法。東京帝国大学文学部印度哲学科を卒業後、京都・紫竹林学堂に掛搭し、内地留学生として大谷大学で天台学を学んだ。

永平寺本山僧堂を修了。静岡県清水市の一乗寺に住し、洞慶院専門僧堂開単とともに宗乗担任講師となる。清水市の龍雲院住職を経て、洞慶院住職に転住。昭和三十五年六月、師の仏庵和尚の後をうけて東京・西麻布にある永平寺東京別院の監院に就任し、本堂、庫

裏、さらに戦災で焼失した大観音を復興した。

昭和五十一年六月、大本山永平寺の副貫首に当選。六十年一月、七十六世秦慧玉貫首の遷化に伴い、宗制の定めに従って即日、永平寺七十七世貫首に就任した。在任中、中国の浄慈寺大梵鐘落慶法要を親修したのをはじめ、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世と相見、スリランカに坐禅堂を建立寄進し、中国・天童寺で如浄・寂円両禅師の建碑開眼法要を営むなど国内外を広くご親化。また、梅花流詠讃歌の発展に尽くされた。

生涯独身の清僧として膝下に多くの弟子を育てられ、著書に『みんな如来様だよ』『梅花開――わが半生――』などがある。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

——横浜善光寺留学僧育英会——

二人を追加採用

ドイツへ一人と台湾から一人

横浜善光寺留学僧育英会は平成五年度留学僧として、ドイツのキール大学に留学の佐藤誠司氏（東北大学大学院博士課程）と、台湾から東京大学人文科学研究科に外国人研究生（印度哲学・印度文学専攻）として留学した董燕燕さんの二人を追加採用した。これにより留学僧は世界十四カ国・一地域に四十七人を派遣または受け入れたことになる。今回の追加採用で派遣国はアメリカ、タイ、インド、スリランカ、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、韓国、カンボジア、ドイツの十一カ国、受け入れ国はアメリカ、スリランカ、韓国、中国、フランス、バングラデシュ、日本、台湾の七カ国・一地域に及ぶ。

貴重な民間の育英制度

「広く世界に活眼を開く人材養成」を掲げたこの育英事業は毎年留学僧の海外派遣と受け入れを行なっていて、今年、創立十周年を迎える。一カ寺の事業としてはかつてない破天荒な活動

として国内外から注目されており、ことに日本で仏教を学ぶ外国人留学僧にとって、仏教精神に基づく貴重な民間の育英制度となっている。

同育英会は、住職である黒田理事長が善光寺檀信徒に毎食一口だけ節約する「一口運動」を提唱し、喜捨された浄財により基本的に運営されている。その他にも、目的に賛同する篤志家も現われており、最近も日本有数の倉庫業会社社長が亡妻の供養として多額の寄付を行なった。

追加採用された佐藤氏は東北大学文学部を卒業後、同大学院文学研究科博士課程（印度学仏教史学専攻）に入学し、前期二年を修了して現在は後期三年に在学中。ネパール仏教の研究では世界の先端をいくドイツでの基礎研究を志し、キール大学のベルンハルト・ケルヴァー教授のもとでネパールの仏教史及び他宗教との関わりを中心に研究するため渡独した。

また、台湾の董さん（女性）は輔仁大学外国語学院日本語科を卒業後、さらに仏光山叢林学院専修部で学び、卒業。同学院講師、国際学部日本語クラスの教務担任を経て、東京大学の大学院外国人研究生として日本に留学した。

提出論文のテーマは、佐藤氏は「国際貢献のより所とは何か」、董さんは「世界平和と仏教徒の請願」であった。

（中外日報より）

七月二十六日、育英会辞令が佐藤誠司氏と董燕燕さんに、東北大学名誉教授・宝仙学園短期大学学長・文学博士の塚本啓祥先生より、安藤義則先生立会いのもと手渡され、両氏とも感無量の面持であった。終わって塚本先生の講演があり、感慨も一入であった。

〔目　　的〕

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする

〔派　遣　先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)
   "923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 USA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
   "Box 197, Mt.Tremper, NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
   "Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派 遣 期 間〕

平成7年4月より一年間

〔給　　費〕

アメリカ・タイ及びその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提 出 書 類〕

1. 論文(次項による)
   ○論題
   ①これからの国際交流と仏教の役割
   ②世界平和と仏教徒の誓願
   ③留学僧として私はこれを学びたい
   ④異文化の中で仏教を学ぶ
   いずれか一題を選ぶこと400字詰原稿用紙5枚以上(A4版タテ書き)

2.保証人と連署した願書　3.卒業証明書
4.履歴書　5.推薦書　6.健康診断書

〔募 集 人 数〕

平成7年度　2〜3名

〔願 書 締 切〕

平成6年12月10日、事務局必着のこと

〔発　　表〕

平成7年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

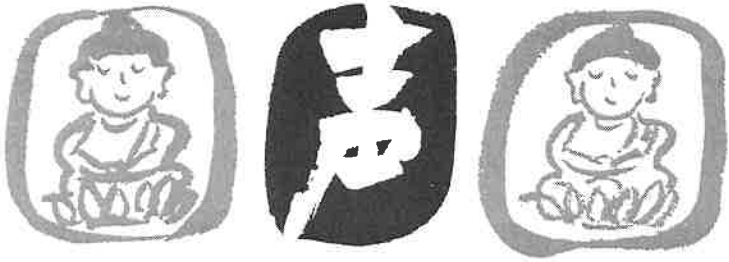
第11回生

横浜 善光寺 留学僧募集

平成7年度・1995

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程並びに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA



「マレーシアに永住しても」の覚悟

マレーシア　大和　輪光

マレーシアに来て早くも一週間が過ぎました。出発前は忙しい中、本当にお世話頂きましてありがとうございました。又、心ならず落涙してご心配をおかけしました事、心からお詫び申し上げます。あの時は決して叱られてくやしくて泣いたのではありません。釈迦殿に於いて、離国の挨拶と祈りを捧げておりましたところ、方丈様の叱責が恰も慈父の言葉、厳父の叱りにも似て、仏の一言一句のようにも聞こえ、そのお気持ちが有難くもあり貴くもあり、方丈様との別れに、どうにも涙がこらえられなくなってしまったのです。自分でも何年ぶりで泣いたのか覚えておりませんが、止めどなく涙があふれ、その有難さに顔をくしゃくしゃにしながら、車を運転しておりました。方丈様のご苦労、人への優しさ、そして挫折感、痛いほど解るような気がしたのです。大変ご心配をおかけ致しました。

さて、マレーシアは思った以上に過しやすく、リンガム夫妻も献身的にメッタ・ビラ

の運営に頑張っております。朝四時のまだ暗く涼しいうちから坐禅に励んでおります。この十年間以上、三日以上の連続した休みをとった事のなかった私が、このような充実した、すばらしい、一生を決定づけられるような体験ができたのも、偏に方丈様の寛大なお気持ちがあったからこそと、改めて感謝している次第です。

マレーシアに於ける曹洞禅・大乗仏教の現状を鑑みますと、私のような微力な者でも何とかして仏法を弘め、坐禅のすばらしさを弘める事ができたら、何とすばらしい事かと思います。そして一人でも仏教によって救う事ができたら、何と偉大なことでしょうか。そして将来、このマレーシアの地に、メッタ・ビラの敷地内に、善光寺別院の禅堂ができ、東南アジアの禅堂の中心になる事ができたら、何とすばらしい事でしょうか。その為ならば方丈様のご指導のもと、永住しても良い覚悟です。正に「行く先に我家ありけりかたつむり」の念で、このメッタ・ビラの毎日を過しています。　本当に感謝をこめてこの手紙を認めています。いずれ方丈様に帰国報告ができる日を楽しみにしております。

多くの方々からの恩恵に感謝

タイ　落合　隆

先日の一時帰国の際には大変お世話になり、感謝にたえません。一日だけですが、両親の住む都営住宅で、一泊致しました。九十二歳になるほとんど目の見えていない父と、老人ボケの母は、それでも私に会えたことを大変喜んでくれました。両親、そして姉たちも私の出家を喜ばしい事と、歓迎し理解してくれております。しかしながら、現実の、

父が母の面倒を見、食事まで作っている姿を見ると、私自身の気持にも複雑なものがあります。

私は中学二年のころ、軽度の自閉症になり、半年ほど登校拒否の状態になった経験があります。その原因を父親の物質的、精神的な貧しさと思い続けて来たのですが、私のためにと朝食を作ってくれる父を見て、何か聖なるものが私の目の前にいる、といった思いにさせられました。

姉たちも私を気遣い、両親の事は何とか自分たちで、と考えてくれておりますが、それぞれが家族のあることですので、今後、難しい面も出てくるかと推測しております。便所掃除の仕事をしながら私を育ててくれた母。病弱な体で大工仕事を続けてきた父。恩といえばこれほど大きなものはないのですが、出家者として未熟な私は、何かと迷う面もあります。

出家しているという事実だけで、内容的にははなはだ心許ない私です。方丈様はじめ、多くの方々からの恩恵を受けていることを感謝するばかりです。

成寿二十一号の「風の葬送」は幼稚な文章ですが、タイの貧しい村人の姿を少しでも伝えられたなら幸いです。

七月下旬から十一月の始めまで、ワット・ルンポーソッドというところで雨期安居を過ごします。

どうぞ皆様が健康で幸福な日々を送られることをタイ国よりお祈り致します。

宗門のためにご尽力 本当に感動

茅ヶ崎市　波多野牧通

毎季『成寿』をご恵送いただきながら何もお手伝いせず、日頃から心苦しく思っております。特に留学生をお育ていただいている事は、今後何時

の日か大きな花が開くものと、黒田様を尊敬して止みません。

さて、大本山永平寺の傘松会から文を頼まれ、何にするか迷ったのですが、七月号に一文を載せる事となりました。私の宗門との関係で黒田様をはずすことは出来ず、お名前をお借りしたお詫びと共に、今までのご無沙汰のお詫びのつもりで、一冊お送りさせていただきます。ご笑覧下さい。

私も三菱石油から関連会社に移り五年経ち、本年六月末から顧問となりました。

これからの人生をどうするか、今年一年ゆっくりと考える年令になりました。

お陰様で黒田様に可愛がっていただいた長男の処には、長男、長女（五歳と二歳）の孫がおり、又、帰国子女でご相談にのっていただいた私の長女は、結婚して、子供はありませんが夫（三和銀行）の転勤で、六月中旬、ロンドンに転居しました。本人は、高校を出たところなので懐かしがっていると思いますが、やはり日本が恋しいようで、電話をかけてきています。

黒田様のところでも昨年はお母上を亡くされた由、成寿で知りました。お参りもせずご無礼致しました。本文にてお詫び申し上げます。

奥様はじめ皆々様、特にお子様が皆様宗門のためにご尽力されている由、本当に感動致しております。日頃のご無沙汰のお詫び旁々御身体にご留意の程お願い申し上げます。

お知らせ
住所の表示が変わりました

十月十八日から住居表示が実施され、住所の表示が変わりましたのでお知らせします。

実施前　横浜市港南区日野町一六〇四番地
実施後　横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号

善光寺方丈が神奈川県交通警察懇談会委員に委嘱される

神奈川県交通警察懇談会は交通警察の重要な諸対策を推進するに当たり、広く各界各層からの意見を、交通警察の運営に反映させていくという趣旨で昭和五十六年四月に設置されたもので、善光寺黒田方丈が平成五年度の委員に委嘱されました。

交通問題は官民一体の検討や対策が急がれていることでもあり、多忙の中、一年間の委員を務めることになりました。

現職研修会で黒田方丈が講演

七月二十一日(水)、曹洞宗茨城県宗務所主催の第一回現職研修会において、黒田方丈が「実践法話・世界に目を向けて～〇(ゼロ)からの出発～」と題し講演しました。現職研修会は宗制に定められたもので、四十歳未満の寺院住職・副住職には受講義務があり、本年度は「教化と寺院経営」を主眼として行われたものです。黒田方丈は、〇(ゼロ)から出発し、世界に目を向けて善光寺留学僧育英会を創設したいきさつや現状など、日頃の活動を熱っぽく語り、若手の僧侶に感銘を与えました。

阿部慈園先生が『インド四季暦』を上梓

横浜善光寺留学僧育英会参与の阿部慈園先生（明治大学文学部助教授、東方学院総務兼講師）が東京書籍㈱から石川響画伯の画入りの『インド四季暦　春・夏そして雨季』と『インド四季暦　秋・冬そして寒季』を上梓されました。

「春・夏…」ではかつてインドに学び暮らした若き日々をたどりながら、インドの季節観、祭りや恩師の思い出などインドの文化・社会と季節のめぐりを、「秋・冬…」では、さまざまな宗教と習慣、釈尊の足跡を訪ねる旅やインド各地の旅など、情緒豊かに綴ってあります。

インドに旅したことのある人にはより深くインドを知るために、また、インドに初めて接する人には、優しく、濃やかな表現が嬉しい。そして何よりも、石川響画伯（前横浜国立大学講師、日展評議員・審査員、東方学院講師）のイラストが随所に散りばめられており、見て読んで楽しいイラスト&エッセイの好著となっています。

七月十九日(日)より二十二日(木)までインド大使館一階講堂で本著の原画展(約三十点)が開催され、最終日には出版記念パーティが催されました。

感謝状の贈呈や記念式典の審議
総代会開かれる

九月六日(月)、成寿山善光寺平成五年総代会が開かれました。第一部は釈迦殿において本尊上供のあと、開基家、黒田住職、伊藤喜三郎檀頭総代の各挨拶、つづいて大津正二総代に感謝状が贈呈されました。第二部は議事に移り、今年度の行事報告、平成四年度決算報告、護持会会計報告が行われ、次に、善光寺開創二十五周年記念式典についての審議。新美師から育英会の現況報告がありました。「開創二十五周年記念式典」については本誌22頁をご参照ください。

奈良康明氏が
「曹洞宗特別奨励賞」を受賞

十一月十日(水)に開催された曹洞宗宗学・教化学大会の開会式の席上、平成五年度の「曹洞宗特別奨励賞」の発表があり、教化学部門で駒沢大学教授・文学博士・横浜善光寺留学僧育英会理事の奈良康明氏が受賞されました。テレビで放送の『原始仏典を読む』のテキストや書籍の出版など「広く大衆のために仏教を布衍し、人生のどうあり得べきかを示唆した」として選ばれました。

教化学大会で育英会の歩みを
黒田理事長が発表

十一月十一日(木)、駒沢大学で行われた第三十三回教化学大会において、黒田理事長は「横浜善光寺留学僧育英会十年の歩み」と題し、教化論・海外開教関係の第二部会で発表しました。発表者の持ち時間が二十分という制約の中で、黒田理事長の熱意は十分に伝えることができました。

留学僧育英会の総会開く
今年度は創立十周年記念

横浜善光寺留学僧育英会の第八回総会が十一月二十日(土)午後二時から善光寺で開催され、黒田理事長はじめ役員、留学僧らが出席しました。

釈迦殿での開会諷経や理事長の挨拶のあと議事では、昨年度の行事報告に続いて、今年度の行事計画が発表されました。創立十周年を迎える平成六年は、三月に記念式典や、また、書籍の出版なども予定されています。

なお、二月五日(土)に辞令伝達式を執り行う予定です。

バングラディシュの
ギャナ・ドュティ師が来寺

十二月一日(水)、バングラディシュのワラプニヤ寺住職、ワラプニヤ佛教孤児園園長ギャナ・ドュティ師が、曹洞宗南米布教総監の森山大行老師の案内のもと善光寺を訪問されました。横浜善光寺留学僧育英会からワラプニヤ佛教孤児園に寄附金が贈られ、バングラディシュとの今後の交流を誓い合いました。

平成六年度成寿山善光寺行事表

行事	日時
新年祈禱会	1月12日(水)　午前11時
節分会	2月3日(木)　午前11時
開山忌	2月5日(土)　午後2時
春彼岸法会	3月19日(土)　午前11時・午後2時
育英会創立十周年記念式典	3月30日(水)　午前11時
花まつり	4月8日(金)　午後2時
不動明王祭　大般若法会	5月28日(土)　午前11時
開創二十五周年記念式典(大本山総持寺に於て)	5月30日(土)　午前11時
大施食法会	7月1日(金)　午前11時(初盆) 7月2日(土)　午前11時・午後2時
棚経　(お盆供養)	7月13日(水)～16日(土)
秋彼岸法会	9月21日(水)　午前11時・午後2時
成道会	12月8日(木)　午後2時
参禅会	毎月第2日曜日　午前6時
茶道教室　(裏千家)	毎月第1・第3月曜日午後1時
書道教室	毎月第1・第3土曜日午後1時
『成寿』発行	年3回発行不定期

ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

越石　重博殿　三十万円
我妻　ウメ殿　三十万円
中村　淳子殿　十三万円
日泰寺　鷲見弘明殿　十万円
細井　進殿　十万円
中沢コトヱ殿　五万円
岡島　時代殿　五万円
黙仙寺　阿部慈園殿　三万円
大和　銀子殿　三万円
久保　賢一殿　三万円
斎藤　準一殿　三万円
山口今朝雪殿　三万円
匿　名殿　三万円
匿　名殿　二万九千円
中畑　勝善殿　一万円
貞昌院　亀野哲雄殿　一万円
大年　隆夫殿　一万円
植芝　弘子殿　一万円
越前　竹子殿　一万円
井上　葉智殿　五千円
中嶋　一雄殿　五千円

〈成寿賛助〉

山本　勇一殿　十万円
明光堂　柳下明殿　一万円
伊藤　幹雄殿　一万円
昼間　光威殿　一万円
落合　一恵殿　一万円
椎名　宏雄殿　一万円
竜　福　寺殿　一万円
島田垚久子殿　一万円
築　田　寺殿　一万円
蓮蔵栄治雄殿　一万円
匿　名殿　二千円
萬福寺　村上博中殿　五千円

成寿殿のメモリアムドームが完成

ナリス化粧品兵庫工場
村岡　哲郎

この度、私共の長年の夢であり課題でありました成寿殿のメモリアルドームが完成しました。そして先代社長の在りし日の書斎も、苦労を共にし社長を心からお慕い申し上げた永年勤続者の熱い思いにより、成寿殿の一角に復元出来る事となりました。それに伴い先代社長関連の想い出深い品々を整理いたし、その安置場所として黒田先生の御元しか思い及ばず、先生の御慈悲にすがる事となりました。私共の心をお汲み取り下さいました先生には心から感謝申し上げます。

また、仏像につきましても後日ご連絡させていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日々ご精進の先生の御心に少しでも社員としてお応えできますように、毎日を大切に過ごしてまいりたいと思っております。

黒田先生の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げ、社員一同またお目にかかれます光栄を願い、御礼と御願いをさせていただきます。

布教のご努力に頭が下がる思い

東京都武蔵野市
今野　康彦

知人の御葬式と言う様な事でもないと仲々お会い出来ぬ事、誠に無情と申せましょう。貴禅師の後姿を、又御尊顔を拝し、父白純老師の再来かと思いました。遠い過去、吉祥寺での若き時代過ごした事も夢の如く懐かしき次第です。

此度成寿を拝読致し、並々ならぬ御導師としての布教の御努力に頭が下がる思いでした。今後とも頑張って下さい。

私は七十二歳として未だ煩悩の境を出ず、世俗に毒されて生意気なことばかり言っております。よく人は言いますが、馬鹿は死ななきゃ直らないと…。七月四日イタリヤ旅行以来疲労回復せず体力の衰えを知りました。貴山御興隆と貴僧の御安泰を切にお祈り申し上げます。

ご縁の深さを感じた成寿の記事

東京都杉並区
斎藤　稔

瑩山禅師の二大誓願を拝読させて戴きました。昨年の秋、妻と娘夫婦と共に五泊で北陸方面を旅し、能登を一周いたしました折、タクシーの運転手に案内を請い、總持寺をお参りして来ました。私共にも縁のあるお寺であり一夕感無量でありました。今回の成寿にたまたまこの記事を拝読し、何となく御縁の深さを感じた次第です。

多大な浄財を育英資金に、感謝感激

宮城県
佐藤　吉政

此度は、愚息誠司に貴重な浄財を多大に育英資金に賜りまして、誠に有難うございました。浅学非才な若者にご援助をいただき学問を続けさせ

て戴くことは、誠に感謝と感激でいっぱいでございます。早速電話にて本人に知らせましたところ非常に喜んでおりました。私共はこのご恩に報いる為に、仏教を国際的に広めることができるような人に成るよう勉学に励むよう申し聞かせました。

今後共よろしくご指導賜りますようお願い申し上げます。

知人が制作した御釜興味深く拝見

東京都大田区
奥村　公規

「成寿」御送り戴き有難く拝読致しました。当方秋の展覧会出品作品制作の為、すっかり御礼が遅くなりました。お許し下さい。

黒田方丈が玄庵にて席主をされた折御使用の中川先生の御釜、知人が制作したものでとても興味深く拝見致しました。

成寿二十一巻、いろいろ御苦労がおありだった事とお察し申し上げます。バックナンバー、もし残部がおありでしたらお譲りいただけないでしょうか。勝手なお願いで申し訳ありません。

益々の御発展御祈り申し上げます。

一筋なる姿勢を彩る正法転輪

千葉県
椎名　宏雄

『成寿』は毎号すばらしい内容の機関誌にて感銘するばかりでありますが、これだけのものをおつくりなされるご苦労もいかばかりかとお察し致します。

それでも人というものは、表面に現れたものでしか他を判別出来ないのですが、『成寿』誌の如きは恐らく黒田老師にとっては氷山の一角に過ぎず、これを支えておられる海面下の大変なご活躍とご精

進極まりなき日常底がある事と拝察致します時、本当に尊い教化者の姿を稽首致します。二十巻のあとかたは、正しくこうした老師の一筋なる姿勢を彩る正法転輪であります。又、留学僧達が今後どれだけ法輪の輪を広げてゆくか、古今無比の大菩薩道であります。

不肖こと、目下、中国大陸から駒大の仏教修士課程の入学を目指して猛勉強中の趙良国君（三十四歳）を激励し、必要書類を送り続けています。来春、私が身元保証人として受験しますが、このような稀有の大陸人を何とか育ててあげたいと念願しています。

これまで、韓国人は何人か保証人として引き受け、駒大はじめ各学校を修了して帰国し、それぞれ活躍しているのは大変うれしいものですが、こんなのは所詮老師の足許にも及びはつきません。

時節がら、老師には猶一層ご自愛専一にも益々ご活躍なされます様、陰乍らご祈念申し上げます。

あこがれの総持寺祖院の写真に感激

東京都世田谷区
島津　源之

一心頂礼　方丈様のご活躍のご様子につきましては、予てより中外日報紙上で拝読させていただいておりました。同紙上で貴誌の最新号のご発刊を知り、ご照会申し上げましたところ、早速にご恵送賜り、ありがたく厚くお礼申し上げます。私のあこがれておりました総持寺祖院様の写真を拝見し、感激いたしました。充実した内容を一気に読了させていただきましたが、表紙とカットの絵がとてもすばらしく存じます。

実は私こと、タイへ留学された山本浄月師と仏教英語研究会で知り合い、お付合いをさせていただいており、又、同会の講師の小笠原隆元師と

も懇意にさせていただいております。芦辺鎌禅師の耕雲寺様の坐禅会へも参加いたしております。これもご仏縁と深く感謝いたしております。

布教伝道の根本理念を実行実践

京都府 村上 博中

十年近くの御法愛を得て、唯々感謝あるのみ。布教伝道の根本理念を完全に実行実践されて、頭のさがる思いであります。旧友佐藤師の芳名をたびたび拝見するにつけ一層親しみを感じ勉強させていただいております。

資金といい時間といい、莫大な奉仕精神、日々に積み重ねられて行く黒田老師の熱意。各宗派を越えた大大乗的な立場。これが本当の宗教人であることを会得しています。どうぞ御法体ご健勝にて二十年も三十年も生ある限り、御尽力を念願する者であります。

慈悲の路を拓き、御導き下さる大恩に感謝

仙台市 伊藤 道哉

『成寿』毎号拝読いたす毎に、老師の血滴々が普く私どもを利益し、道益々興隆する感を深くいたします。とりわけ、愚昧の学生の為に、親しく慈悲の路を拓き、御導き下さる大恩は感謝の言葉もございません。

快活は須らく痛処より得べし。即今翻って憶う棒頭の緩なりしことを。何卒今後とも、三十棒学生の為、伏してお願いいたします。

一日一日を霊性高く大切に

東京都豊島区 飯島れい子

「成寿」を発刊されて十年。方丈様の並々ならぬ情熱。未来を託せる若者に無限なるエネルギーを注いでいらっしゃ

ることに、深い感動を覚えずにはいられませんでした。私も魂は永遠に生きつづけることを知って、一日一日を霊性高く大切に過していきたいと心に強く思いました。

しみじみと感じる家庭環境の大切さ

東京都葛飾区　林　博明

此の度、特集「瑩山禅師の二大誓願」を興味深く拝読させていただきました。この世が続く限り、永遠に道元禅師の教えを守り広げていくという『白法守護』の願と女性の心を尊重する、これはお母さんと祖母の明智優婆夷の熱烈な観音様信仰による家庭環境の中で育てられたことであります。家庭環境の大切さをしみじみと感じています。

祖院のカラー写真に息をのむ思い

川崎市　平塚智枝子

八月に義弟の法要のため善光寺に参りました折、成寿二十一巻を拝見することができました。第一頁を開いてアッと驚きました。祖院のカラー写真があったのです。

十五年前、旅行の折に祖院をお参りする機会に恵まれ、古めかしく、又心の中まで洗われる思いでした。二度とお参りすることもかなわぬと思っておりましたので、御誌の上で再びお参りすることが出来た喜びに、息をのむ思いが致しました。いつも心の中で念じておりましたのでその願いがかなったのでしょうか。本当に有難うございました。

先ず目で楽しみ

川越市　今泉　源由

マレーシア・タイの屋外坐禅堂の素晴しさ、四人の子どもの得度式の可愛らしい姿、

お茶を楽しむ方々の平和な雰囲気等々、先ず目で楽しみその世界に身を居く心地にひたります。

雨の毎日で庭の草がたくましくのびています。緑の真っ只中というところです。いろいろと有難うございました。

観桜茶会の記事良い記録に

東京都練馬区
倉林　孝子

『成寿』早速に拝見いたしました。ご発刊以来十年、二十一巻を数えられるという伝統をお持ちでございますので、素晴らしく素敵な編集をなさっておられておよろしいと存じます。日々庵での観桜茶会の記事を拝見いたしましたが、良い記録になられることと存じ上げます。

今後も益々ご壮健であられますことと、成寿が益々のご隆盛をおさめられますよう心より祈念申し上げます。

多くの師と精神文化に導かれた感謝を新たに

宮崎市
日高　武

成寿二十一号有難うございました。黒田様の偉大なる目標に向かってひたむきに精進され、国境を越えての人類愛に大山を仰ぎみる思いで敬服し、天は理にそったら必ず力を貸されることを知らされ、勇気をもらいました。又、東郷敏氏の「出逢い」を大変興味深くなつかしく拝読し、先代の声が新たに響いてくる思いでした。神道育ちの私共に初めての仏縁をもらい、禅の体験もでき、昭和四十二年先代よりいただいた修證義は、いつも事あるごとに洗心となります。ナリスとの出逢いで多くの師と多くの精神文化に導かれた感謝を新たにし、余命を学びつつ育ち合う日々でありたいと願っています。

次号も楽しみにしています。

充実した御誌にいささか脅威

東京都渋谷区
本間康一郎

ますます充実した御誌にいささか（編集者として）脅威を覚えます。二十一号では東郷敏氏の「出逢い」を興味深く読ませて頂きました。

昭和三十九年の総持寺での夏季摂心会のこと、私もその二、三年前学生でしたが参加したことがあり、驚策が何本も折れるような厳しい数日間を思い出しました。足の痛さをこらえるのと、叩かれる恐怖との戦いでしたが、今になってみれば有意義な体験をさせて頂いたと感謝しています。あのときの怖かった坊さん、もしかして黒田師だったのかな？

合掌

心して拝読し保存、再読

東京都大田区
太田　好信

一九八九年、黒田住職様、佐藤老師様にお供し、タイ宗教文化の旅でご一緒頂いて以来、『成寿』をご恵贈頂き、有難く御礼申上げます。各巻とも心して拝読し保存、再読しております。仏跡は一九八六年以来今日で六カ国の各地を順拝いたしましたが、み仏の慈光の中、無事故で帰国さして頂いて、有難いことと感じております。

今後共お導きの程、御願い申上げます。

今も心に残る御母堂様

栃木県大田原市
早川ヤス子

突然のお便り失礼かと存じましたが「成寿」お讀ませて戴きまして一言方丈様にお悔みと御礼申し上げたく拙ない筆を取らせて戴きました。先日、妹より成寿を讀ませて頂きお母さまを思われる方丈様

のお心に涙が止まりませんでした。

私も御母堂様を存じ上げておりますので若い頃と申しましても五十半かその前後の頃かと思われます。商家の私は光眞寺様に出入りをさせて戴いておりまして子供を背に参りますといつでもお勝手の前の小川でたすきを掛けて洗い物をなさっておられました。お顔はいつも笑顔にてどんなにおいそがしくても手を拭きながら用件を聞いて下さいました。そしていつでも背の子にお菓子を下さっては優しい言葉を掛けてくださり、さむい北風の吹く日も心あたたかく帰らせて戴いた事を思い出させてくださいました。私も子供六人戴いております。つらい時苦しい時いつも心の燈として御母堂様をおしたいして参りました。お蔭様にて今日があると思っております。

此の十年ぐらい御無沙汰いたしており、一度御目にかかりたいと思いつつ御逝去の報に驚いております。

妹の縁により方丈様にお礼申し上げる事が出来まして心がいくらか軽くなりました。御生前にこの事が申し上げられたらと残念でなりません。でも御母堂様は蓮華の台に小さいお体をのせられ微笑を浮かべながら見守って下さっていられる事でしょう。

「出逢い」に寄せて、たくさんのお便りを有難うございました。

★『成寿』ありがたく読ませて頂きました。何とほのぼのとした御本なのでしょう。善光寺と黒田和尚さまの豊かな御人柄を感じてなりません。「出逢い」の編の中で出会いとはいつどこでどんな人に出会い、それがどのように続いていくのかなと思いました。自分の受け止め方でその人との出会いが一生になるか、その場限りで終わってしまうのか、考えさせられました。愛の人とはどんな人かと言われる事も、どんな人かも少しわかった様に思います。何度も何度も読ませて頂きました。私も人を心から愛せる人間になりたいと願いつつ、本当の自分を見つめ直したいと思います。

岡山県　寺嶋みどり

★三十年近くナリス化粧品に御縁を頂き、日々楽しく販売に携わっております私にとって、今月号の「出逢い」を読ませて頂き、感激は又、一入でございました。先生の御人となりを、又々深く感銘いたしました。お写真の中の先代社長さんや外の方々の若さを、改めてびっくりしながら、何回も読ませて頂きました。

枚方市　井口すが代

★幸いにして、私の師であります中村淳子先生とご一緒に東郷敏先生を通じて黒田先生にお会いさせて頂き、温かく、優しいお人柄に感銘致しておりましたが、東郷先生の「出逢い」を読ませて頂き、あらためてそのすさまじいばかりの御信念、御人格に仏さまの権化に出合ったような感動を思いました。一宗一派にとらわれない豊かな人間性に出合い、きっと、これからの仏教界を解りやすく導いて頂ける

最高のお方ではないかと…。私の今の感激と喜びは、申し上げようもありません。ますますの御活躍お祈り申し上げます。

神戸市　佐伯　暢子

★『成寿』春季号で黒田和尚様の「明日に生きる」を拝見し、とても素晴しい御方、お寺と思っておりましたが、この度の「出逢い」編に接し、ただただ感激致しました。会社の事は知って、分っていたつもりでした。違っていました。新たな気持で仕事をすすめてゆけるような気がして、胸がつまる思いでいっぱいでございます。是非一度、お参りしたいと思いました。

豊橋市　近藤みち子

★何しろ無学な私ではありますが、まだお会いしたことのない、又、この目で見させて頂いたことのない善光寺、そして黒田先生の素晴らしさが東郷様の「出逢い」という文章から、少し解ったような気もします。私もナリスに身を置く一人として、黒田先生のお話しは、以前にも聞いておりました。許されるならば一度、善光寺様へ行ってみたいものだと思います。

岡崎市　土井　早苗

★『成寿』二十一巻をナリス化粧品の東郷敏さんから送っていただき、初めて拝読しました。

カラーグラビアの美しさもさることながら、初めて聞く言葉がたくさんありましたが、充実した内容にも感銘しました。私達夫婦（夫は昭和四十に参禅、五十年に死亡）はナリス化粧品に勤務していたこともあって、読んでいくうちに懐しい顔や名前が次から次へと出てきて、感激しました。ご本を送って下さった東郷敏さんはじめ黒田老師様に感謝いたします。

松江市　津戸　公子

★東郷敏氏の「出逢い」の〇からの出発で、黒田武志先生との想いでを拝読させていただきました。成寿山善光寺開創のころからのことが書かれて黒田先生とのお話の中に、先生の偉大な御人格が伺われます。夏季号との出逢いで私の心が洗心されます。何回も拝読させていただきます。

鹿児島市　崎山　邦徳

★「出逢い」の一文は、善光寺と黒田先生、先代（開基）さまと善光寺の関わりが、東郷先生の筆にて見事に表現され、感激致しました。本当に素晴らしい方々の出逢いに感動致しました。次号を待ちたく思います。

黒田先生、どうぞ益々広く世界にご活躍下さいませ。そして、よい世の中をつくって下さいませ。

岡山県　佐藤千鶴子

■カラーグラビア撮影

松本栄一（まつもと・えいいち）

1948年、神奈川県生まれ。日本大学芸術部中退。現在、日本写真家協会会員、日本西蔵学会会員。主な写真集・著書に『印度』『西蔵』『中国』（いずれも毎日コミュニケーションズ）、『極限の高地チベット』（小学館）、『ダライ・ラマ』（河出書房新社）、『女神群舞―アンコール遺跡の神々―』（時事通信社）などがある。

おたよりを募集します

いつも温かいおたよりを有難うございます。『成寿』では、読者のページをいっそう心触れ合う豊かなものにしていきたいと考えております。そこで皆さまから、さまざまなテーマのおたよりを募集し掲載させていただきたいと思います。どうぞ何でも結構ですのでお寄せください。お待ちしています。

◎テーマ例

「私の新発見」「お料理アイディア」「うちの素敵な家族紹介」「うちの近所のユニークなお坊さま」

詩・俳句・短歌・写真

成寿のご感想・ご意見・等々

成寿山善光寺
『成寿』編集部

留学生からのたより

ドイツ　　佐藤　誠司

謹啓　このたびは、奨学生とならせて頂き、本当に有難うございました。授与式の際には、母が過分なおもてなしと励ましのお言葉を頂いたと感激しておりました。本当にお礼の言葉もございません。この御恩に報いるために私が成すべきことは、ひたすら学問に打ち込み、真理を追究することと、決意も新たに努力する所存でおります。

また『成寿』21巻と励ましのお言葉、有難うございました。『成寿』は日本でも読ませて頂きましたが、異国で読むのもまた格別です。理事長のお考えと実行力に改めて尊敬いたすと共に、善光寺に集う方々の、深い信仰心や厳しい修行の姿に大変感銘いたしております。そして私が頂いた奨学金がいかに有難く貴重なものかということを心に刻ませて頂きました。

いずれ帰国の際に改めて御挨拶申し上げますが、まずは書面にてお礼を申し上げます。本当に有難うございました。　　敬　具

1993年7月27日

留学生からのたより

オランダ　　早川　敦

理事長先生におかれましてはますます御清栄のことと御推察申し上げます。

６月半ばから試験期間で、本日最後の試験が終わりました。結果のわかっているものは全て合格しております。結果のわかっていないものについても、おそらく確実に合格はしていると存じます。９月からはヴェーダの演習とサンスクリット文学の演習に出席し、更に修士論文を提出する予定でおります。論文のテーマは、ヘーステルマン、ボーデヴィッツ両教授と話し合いまして、ヴェーダ期の葬送儀礼について考察するということになりました。もしできれば他の儀礼のデータと併せて、ヴェーダ期の社会組織について研究したいと存じます。もしヴェーダ期の社会構造が明らかになれば、初期仏教の研究にも新しい光を投げかけることができるかと存じます。先行する研究としてはカーラント、辻直四郎などの研究がありますが、それらとは若干違った切り込み方を構想しております。

これから大学は夏休みに入りますが、夏の間はヘーステルマン教授と個人的に勉強する予定です。

まずは御報告まで。末筆となりましたが、理事長先生の一層の御健康をお祈り申し上げます。　　謹　言

1993年７月15日

留学生からのたより

曜日を除いて毎日夕方6時から2時間ずつ文法学に関する書物を読んでおりますが、今年7月からはすこし欲を張りまして毎朝6時にインド六派哲学の講読をも開始いたしました。

パンディトといえば、インドの伝統的な知識人、しかもサンスクリット語に関しては最高度の知的能力を備えた人に対して、半分尊敬を込めて呼ぶ名前です。韓国や日本でいう伝統的な漢学者に当たると思いますが、ブラフミン階級の人の中でも特異な存在でして、子供の頃から「グルクラ (gurukula)」と呼ばれる師の家に寄宿しながら、師のもとでヴェーダを始め史・文・哲などを学ぶそうです。修学のために少なくとも20年以上の年月を要するそうですから、彼らの一生それ自体がインド精神史の生きている証人になるわけです。いつか機会があれば、彼らの人生遍歴記みたいなものを描きたいと思っております。時代の波に押し流されてそのような伝統的な知識人が消えてゆくのを目の前にするのは私としてはあまりにも悲しいことですから、勉強を始めて以来ずっと彼の肉声を録音し続けてまいりました。あと20年ぐらい経ったら、インドでパンディトという存在はもはやなくなるでしょう。

季節の変り目で気候が不順の折り、くれぐれも御身大切になさいますように。

敬　具

1993年7月19日

留学生からのたより

インド　　李　鐘　徹

平素は学業のためにご無沙汰いたしておりまして申し訳ございません。

ここマイソールはうだるような暑さを終え、本格的に梅雨の季節に入っております。先生は相変らずお元気でしょうか。お陰さまで我が家族はみんな元気に過しております。

さて、先生のありがたいご恩を受けてインドで研究生活を始めてもう一年近くになりますので、ここ一年間の研究状況をご報告をもかねて申し上げたいと思います。

昨年11月、マイソール大学のサンスクリット学科に研究員として登録して以来、奨学金の申請書に申し上げましたように、私の研究活動は主に博士論文の完成とサンスクリット文法学～パーニニ文法学～の修学という二つの分野に向けられています。

博士論文（世親思想の研究～『釈軌論』を中心として～）の執筆は順調に進んでおります。今年度の末までは文献学的な基礎作業を終える見込みですので、すでに部分的ではありますが本文の執筆に着手しており、来年（1994年12月）東京大学に提出する予定でございます。

文法学の修学はサンスクリット語で書かれた仏教註釈文献を読むために必須となりますが、昨年12月からあるパンディト（Paṇḍit）に付いて個人教習を受けております。コミュニケーション手段がサンスクリット語しかなくて、初めの頃はずいぶん苦労いたしましたが、今は慣れましてその方がむしろ良かったと思っております。日

FOREWORD

Next year is the twenty fifth anniversary of the Zenkoji-temple. I have no words to express my gratitude. Though we started from scratch, I owe today's prosperity to laudable piety and practice austerities of the supporters through Buddha's protection.

We regretfully dosen't have big main hall enough for everyone, to gather so we arranged to borrow the hall for ceremony of Sojiji-temple. The commemorative ceremony was unanimously decided to be held at 30th May. We will send the invitation later, hoping everyone to present.

Secondly is about the Yokohama Zenkoji Scholarship Foundation for International Buddhist Sutudy, which name was changed from the Zenkoji Scholarship Foundation as you have known in the last Seiju. Recently, internatinal exchanges have changed, I think it owes not only

to growth of Japanese economy but to well-known our Foundation.

As you know, I have been to some countries concerned since seven years ago, last July I visited Tenryuji-temple, Most Rev. Dogen's sacred place in China, where I requested the chief priest as an honorary adviser and took his willing consent. Besides, we have received a lama, who had practiced at Yong-he-gong in Beijing, that led us to be invited the ceremony of the consecration of the great image of Buddha at Yong-he-gong. This volume has put together a special issue on the visiting China.

Next year is the tenth anniversary of our scholarship foundation, so we prepare to hold its memorial event in the last ten days of March. Beseids the event, we plan to publish a record about ten odd countries where we visited to study, and also essay of priests studying abroad.

We ask you kindly cooperation and support.

編集後記

▼平成六年の新春を迎え、皆様には愈々ご健勝のこととお慶び申し上げます。本年は当成寿山善光寺開創二十五周年の記念の年にあたります。五月三十日には大本山総持寺において、梅田禅師さま御親修法要と祝宴を予定していますので、どうぞ皆様お揃いでご出席いただきますようご案内申し上げます。また、各種の記念事業実施のために浄財の勧募をお願いしておりますが、厳しい社会情勢の中、心苦しいところでございますが、何卒ご理解下さいまして、ご協賛のほどよろしくお願い申し上げます。

▼本誌で発表のとおり、第十回留学僧が決定しました。前回までと合わせて交流国と留学生の数は十五カ国、五十六人となります。横浜善光寺留学僧育英会も設立十周年です。三月三十日には大韓民国・通度寺方丈老天月下猊下を拝請して、記念式典と記念講演会を予定。また、関係十カ国を訪問しての旅行記『留学僧を世界に』（仮題）を出版の予定です。多くの方がたのご支援に心から感謝申し上げ、次の十年に向かって新たな決意で臨んで参ります。

▼本号は中国特集です。昨年六月に黒田方丈、育英会常務理事・佐藤俊明老師が中国の育英生・李幼麟氏の案内で中国を訪問。曹洞宗開祖、道元禅師得法の霊跡・浙江省の天童寺をはじめ各地を巡拝しました。李幼麟氏の語学力、人脈、人柄によって旅は大成功でした。佐藤老師の「中国八日間の旅」、東隆眞先生の「天童寺と如浄禅師」やグラビアで、壮大な中国を実感していただけるのではないかと思います。また、中国訪問が縁で招待された黒田方丈の「北京雍和宮弥勒大佛開光慶典記念に参列」は、珍しい中国の法要がつぶさに記録されています。

▼一月十二日（水）に新年祈禱会、また、二月三日（木）には節分祈禱会を執り行います。この一年の招福、無事をご祈念申し上げます。どうぞご出席下ださいますようご案内申し上げます。

成寿　第二十二号
平成五年一月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

横浜善光寺